兵は外套を着ることが出來ない。其の上地勢は見渡す限り千里の廣濶地で、何も身を寄せて蔭蔽すべき地物も何も無い、己むなく大隊は狹長な水の一倍溜まつた地隙のやうな壕の中につッ立つた儘射撃をつゞけて居るといふ姿、第二線は其の後方約二百米の是れも亦小さな壕内に泥に埋れて低い姿勢を保つて居なければならぬ窮境であつた。大隊本部は第二線の中央に在つて、一生懸命に應戰した。そのまゝで日はいつしか暮れ果て、彼我の戰も自然的に止み、午後九時になると四面暗黑咫尺を辨ずる能はざる有様となり彼我の砲火は全く止み戰場は沈靜に復した。そこで、陣地を堅固にし、戰鬪隊形の儘寒い風に吹かれ濡れた身體で冷い露を浴びて一睡した。幸にして其夜は敵の逆襲もなく、大隊も亦比較的損害が少くて先づ强敵との鞘當ては滯んだが、前途は益々遼遠で、本舞臺とも見る會戰はどうしても明三十一日以後であると豫期された。

斯くて其夜は去り、明くれば八月三十一日、午前二時聯隊命令に接した。而して此三十一日は實に軍神中佐戰死の日である。

一〇 我が第一線

聯隊は首山堡高地ノ敵ヲ攻撃セムトス

第一大隊ハ第一線トナリ、拂曉ニ乘ジテ隘路東側高地ニ向ヒ突撃ヲ決行スベシ

これは三十一日午前二時に下つた聯隊命令である。中佐は謹みてこれを受け、次いで踊躍蹶起直ちに命令を部下全大隊に下し、安藤中隊を右翼第一線、大築中隊を左翼の第一線に置き、攻撃の部署は遺憾なく完備し命令により今將に攻撃前進を起さうとしたとき、聯隊長關谷大佐が馬を飛ばしてやつて來て、何か要件を談じ合ひ、其處を去るといふときに、

『橘君、熱心に貴君の成功を祈る。』

と大佐はいつた。

其の有難い一言を聞くや、中佐は姿勢を改め、恭やしく敬禮をして、

『誓つて命を遂げます。』

と應へた。

聯隊長は又もや馬に一鞭當てゝ彼方に去つたが、これが二人の今生に於ける交話の終りであつた、軈て其の黄昏には二人の魂魄は彼世に於て直に合したのである。歩兵第三十四聯隊は此一日を以て聯隊長を失ひ大隊長を失ひ全滅の悲境に陥るのであるが、今拂曉前まさかそれほどの大事にならうとは何人も思はなかつたであらう。

中佐は少時聯隊長の後姿の闇の中に消えて行くのを見て居たが、其處へ馬丁の伊藤金二郎が湯を一杯容れた水筒を提げて來て、これを主人中佐に侑めていふには、

『吶喊の時に咽がお渇きにならうと思ひまして、大急ぎで沸かして來ました。』

中佐はさも嬉しさうな顔をして、

『うむそりやお世話ぢやつた。伊藤、これから前進して夜明方になつたら吶喊の聲がするだらう、暫らくして銃の音が止んで萬歳の聲を聞いたら、我が軍の勝利だから、直ぐ追擊の出來るやうに馬を用意して來い。吶喊の聲が起つて銃の音がいつまでもするやうなら、突擊不成功で、乃公は戰死したものと思つて、お前一人でやつて來て、

乃公の死骸を背負ふて歸へれ。』

それを聞いた金二郎は喜悲交々臻るやうな顔色をして、これが今生のお別れであると、知らずに一禮して其處を去つた。

前進の命令は下つて、諸隊は各々出發した。曉の風は涼しい。が、彼我の運動と局所の小せり合ひとで風も道も靜かではなかつた。殊に敵は極めて用意周到で、我が軍が前進するに、どうしても通過しなければならぬ高粱畑は悉く地上二尺ばかりの處から折り曲げ、之れを障碍物に利用して居るので、行進を碍げること思ひの外酷しく、加ふるに道は暗く躓き倒ふるゝものもあれば、畑に滑るものもあつたが、元々訓練の出來て居る我が軍の事であるから、躓いても直ぐに起きて隊列に復し滑つても跳ね起きて舊位に復し隣兵互ひに相助けて軍容は少しも紊れず、整々堂々として一絲紊れず、人馬一つとして聲を發する者なく、沈粛森の如く枚を銜んで前進した。

既にして第一線部隊は進んで敵前凡そ三百米に達したと思ふ頃待ち構へたる敵は猛然として小銃、機關砲を亂射し、面を向けることも困難な程の狀況であつた。

されども軍紀嚴肅なる我が全隊は滿を持し、鋭を蓄へてちつとも應射せず、徐かに墓地の側傍に伏臥して、先づ敵線の模樣から前方の地形等を偵察して、敵中に突入する手筈を狙つて居る。暫らくすると左翼第一線中隊長大築大尉は敵情及び地形の偵察を遂げ、大隊長に報告して言つた。

『これから前方には諸種の障碍物はありますが、其の中間に少しばかり通過の出來る部分があります。』

少しばかり通過し得る地點がある、これ突擊可能の範圍に在るのだ。

Is it possible to cross the Path? asked Napoleon of the Engineers, who has been sent to explore the dreaped Path of St. Bernard. "Perhaps," was the hesitating reply. "It is within the limits of possility." "Foreward then," said the little corporal.....

卽ち Limits of Possiblity. である。果斷なる橘大隊長は大築大尉の此報告を聞くと齊しく、

『突擊ッ。』と令した。其の面色態度凛として犯すべからざるものがあつた。

隊長の命令詞がまだ十分に終らぬうちに、諸隊は猛烈な勢ひで突擊に移り、喊聲は地を撼かし、黃塵泥沫天に飛び首山堡山腹一大修羅場と化した。この目覺ましい突擊を見た大隊長は佩刀の柄を握り、先づ大隊副官に命じ第二線に突擊せよとの命令を傳へさせ、副官が走つて第二線部隊の方向へ去つたのを見るや、大隊本部附下士の一群を率ゐて、秋水三尺を上段に揮り翳し、驀地に奮進した。

隊長の軍刀は關兼光の名刀、日頃鍛へし腕の冴え、一旦意を決して突入したからには、刀刀はサヽラとなるまでは休まぬが日本男兒の心意氣である。況んや敵に對しては鬼神の如き橘大隊長である、眞一文字に突入した後の働きは如何であつたらう。

第二線は續いて突入して來た、逆卷く怒濤か將又湧き來る潮か、發射の火光、刀劍の光芒閃々として百折の稻妻の如く、我後れじと吶喊格鬪する第一大隊の猛襲は四邊を風靡し如何なる强敵たりとも怯へられるものではない。けれど山は急峻である其の上に、前日來の雨で斜面は泥濘足元滑つて、徒らに將卒を疲勞せしめ、其上武裝は重

く唯上體のみは前に出るが足は心に從はず、敵の塹壕内に跳び込む迄には名狀すべからざる困難がある、之に反して敵は高い堡壘に據つて銃を胸墻の上に固定し、銃眼から射下ろす彈丸は雨霰の如く降りしきり、見る〳〵間に死傷の山を築き、血は河と流れる。我が軍は之れを見ると愈々益々憤激して志氣はいやが上に興奮し、決死の將校を先頭として猛卒勇士面も振らず、攀ぢ登るのである、とにかく敵の第一線にとり着くまでは山の斜面に永居は無用と全隊全力を擧げて突進し或は突き或は斬つた。

二　嗚呼橘大隊

今や將卒畢生の勇を鼓しあらん限りの體力を盡して山の斜面を攀ぢ登り、勝敗を一擧に決せんと何れ劣らぬ勇敢義膽を發揮した、中にも橘大隊長は滿面朱を注ぎ、

『進め、〳〵、死ね〳〵。』

と大喝しつゝ、名刀關兼光を高く揮り翳し、衆に先んじて敵の簇り據つて居る其の第一壘に躍り込んだ。續いて部下の大部も己が隊長に遲れては濟まぬと先きを爭ふて壕

内に跳び込み、茲に一大格闘が起つたが、無二無三に突き込んで當るに任せて薙ぎ立てた恐ろしい勢ひに、さしもの敵も怯へ得ず、間もなく動搖を始め、戰友の死屍や武器やら裝具やらを遺して周章狼狽取る物も取り敢ず驚き遁れて了つた。これで敵の第一壘は難なく我が手に入り勇ましき萬歳の聲は全線から揚り、次いで一休みする暇もなく直ちに敵の第二壘へと猛進したのである。

既に各中隊へは命令が下してある、殊に拂曉人顔は見え分かず、大隊長としては最早此一家庭の協同的奮戰によつて、何處までも猛擊し所命の通り首山堡を占領しなければならぬ、最早大隊を部署する必要はない、此の上は我も亦武士の嗜みとして個人的にも日頃鍛へし腕を敵の頭上に實驗せんと、今茲に第一壘の占領を終るや息をもつかず直ちに猛進して第二壘に闖入した。

これを見るなり敵兵はよき敵ござんなれと衆を恃んで隊長に銃劍をつきつける、隊長は白電一閃前なる一敵を水も溜らず兩斷した。腕の冴え刀の冴え眞に是れ快刀亂麻を斷つとはこのことなりだつた。それのみではない、今一人を斬つて返へす刀で又一

人、碧血拭ふに遑なく、又もや近づく一敵兵、己れッといひさま眞額梨割の美事さ、そのとき——その一刹那、敵の小銃彈一發中佐の右下腮を貫通した、けれど豪氣の隊長物ともせず、直ちに軍刀を左手に持ち換へ、又もや反向ひ來る一兵の頭上目がけて斬り下げんと此時遲く彼の時早し、近距離から狙ひ撃つたる第二彈は、碧血滴る名刀兼光の鍔から約四寸の處に發矢とばかり命中して、刀身は弓の如く彎曲し、その餘勢は鍔を碎き、握つて居る食指、無名指、中指の三つの指頭を傷つて、尙ほも餘勢を弛めず、斜めに長く左の上腮を貫通した。

重傷せる楠中佐軍刀兼光を杖に起ち上る

隊長更に驚かず。

平然として部下を指揮する豪膽剛氣、宛ら鬼神阿修羅の怒つたのと異らない。鮮血淋漓とし、兩腮から迸り出るが、隊長はこれに目もくれず、神色少しも緩る處なく彎める血刀揮つて、敵の中堅を睨んだるその恐ろしき形相、實に有らん限りの聲を立てゝ部下を激勵し、有らん限りの勇を鼓して敵を斬り、有らん限りの體力を以て突進せん、而して餘力を殘すまいとは隊長の今日の覺悟である。今日は八月三十一日、皇太子殿下の御誕生日、生きて殿下の祝日に浴せずんば死して護國の神とならんとは既に心に期した所である。

隊長が既に此の通りである。部下の將校いかでか躊躇しようぞ、何れも手に手に血刀を打振つて、血死の猛卒に率先して突入突戰これも亦宛ら夜叉の荒れたるが如く、當るを幸ひ斬り廻はれば、さしもの堅壘も搖ぎ出し、唯一の賴みとして最後の抵抗を試みた敵も、我が鋭き切尖には迎も當り得ず、遂に遂伍を亂して潰走したこれで難關たる敵の第二壘も破竹の勢を以て我が軍の占領する所となつた。萬歲の歡聲は盤

壘上高く轟いて、數旒の日章旗は翩々として首山堡高地の絶頂に、曉の風を受けて翻へつて居る。これが丁度午前五昨四十分の事であつた。

隊長の得意思ふべしで、左右兩膊の負傷を以て鐵壁も異ならぬ目的の高地を奪ひ取ることを得た武運の強さよ。されど隊長の胸中には數限りなき死傷者を出し、僅か此一小高地の占領にこれほどの犧牲を生じたのは、責任上餘り上出來とは謂へないといふ感想があつた、中佐は常に及ばざらんことを恐れたからだ。

橘大隊の只今占領した此の首山堡東南高地は、遼陽街道上鞍部の東に方る三四百米の地に位し、嶄然として他の諸高地を拔き、其形狀は恰も箱根の二子山を見るやうである。第一高地、第二高地が相並んで居て、一帶の高地が其の左右に連なつて居る。是れは遼陽正面防禦の中央の據點であつた、敵はこれに據つて本陣地の守りを堅固にし、我れこれを占領すれば即ち敵の死命を制することの出來る、彼我の重要な土地である。さてこで我軍としては速に此の堅壘を拔かなければ、延いて全軍の攻擊進捗に多大の關係を有し安危に繫かるといはれた要地であつた。固より斷崖絶壁と云ふ譯で

はないが、兎に角急峻であつて攀登に甚だ困難である。其上に第一高地と第二高地との間には隧道を設けて連絡を通じ、兵員や彈藥等皆之れに依つて居た。從つて頗る此陣地は堅固で且又巧妙に築設せられたことは云までも無い。之れに加ふるに比隣の高地から側防せらるゝ樣に配備がしてあつたから、防禦力に於ては實に完全無缺と謂はなければならぬ。

土地の形勢といひ、陣地の價値と云ひ既に以上述べたる通りであるから、敵は第一壘を取られ第二壘を取られ一度は日本軍に地歩を讓つたにせよ、唯其の儘に泣寢入りをしよう筈はなかつた。逆襲は何時企圖せられるか、智勇兼備の隊長亦これを豫期し速に防禦設備を仕替へ之れを堅固にすることを怠らなかつた。斯くて我が將士の乃血はまだ乾かず、夜半からの活動拂曉の活劇に疲勞した體力はまだ恢復もしない、その時を見澄して、果せるかな敵は新鋭な部隊を增加し、遙かに鼓噪して逆襲をかけて來た。小銃、機關砲は豪雨雹雨の如く此高地に飛び來り、優勢なる步兵の大部隊は銃劍を閃めかして潮の湧くが如くに北方の緩やかな傾斜を傳ひ登つて我れに肉薄した。

何れの戰鬪に於ても一旦奪取した敵陣を遂に逆襲に遭ふて奪ひ還へされた例は少くない、隊長は實にこれを知つて居た。

三　嗚呼橘大隊（其二）

斯くと見たる我が軍は、それ始まつたと云ひながら少しも猶豫することなく、各々配置に就き、唯一擊の下に粉齏し呉れんと勇み進んで應戰した。中にも橘大隊長は天にも響けとばかりの大聲にて、

『一度占領した此の高地だ、全員死すとも敵に返すなッ。』

と呶號した。

今度は斜面の攀登に困難する事もなし、奄々として登り來る敵を唯一突に蹴落し呉るは此時だと、我が各隊は見る見る間に敵の先頭部隊を撥ね落して了つた。落された敵の部隊は其の儘屁古垂れるが、其の後の物蔭から前にも増す優勢なる兵力が雲の如くに湧き出ては、ウラー〳〵の喊聲を擧げながら、仆れし彼我の死屍を踏み越え踏み

越え、猛烈な射擊、亂雜な射擊、突進、肉薄、或は爆彈を投げる者、或は大小の岩石を拋つもの、惡戰又惡戰、腕力、體力の限りを盡して迫つて來る。所謂攘へば來る夏の蠅とは眞に此事であつた。激戰は到る處で行はれた。一旦取つた此の高地と覺悟を定めて守る我が軍、どうしても奪り還へすと思ひ定めた敵軍、共に何れが勝つか定めることは出來なかつた。隊長は一段小高い處に突立ち、八方に目を配つて、聲を限りに士卒を鼓舞激勵して居る。銃砲彈は十文字の如く高地に集中して土砂を吹き揚げるかと思へば不愉快なる破片の嘯は長く空中を掠めて隊長の身邊に蝗の飛ぶやうに落下する。されど隊長は更に驚かず。

此時川村少尉が頸部に銃丸を受けて仆れたので、隊長は直ちに之れを擁して塹壕の中に入り、他の兵卒に命じて繃帶をさせ、自分は直ちに引き返へして指揮についた。双方共に此處を先途と戰つて居たが、敵がどんなに狂つてもどんなに暴れても勇猛無雙の我が兵進退巧みにあしらひつゝ、好い機會を見て一時に火蓋を切つて放したので流石の逆襲部隊も、堪まり兼ねて遂に雪崩を打つて潰走した。然しながら敵軍の幹部

は戰線の後方に身構へて、軍刀やら拳銃やらをつき付け、退却して來る其の部下を脅やかし、只管逆襲せしめんと激勵するので、餘儀なく踵を回して逃路を失つた疵負獅子のやうに、自棄の惡戰前にも彌增し、前線が仆れると坑道から躍り出ては補充し、撃ても〳〵新鋭の敵兵が出て來て、逐はれては取つて返へし、入り代り又立ち代り、撃ち盡さうにも盡されぬ有樣だつた。

隊長はこの有樣を見て、怒髮天を衝き眼中血走り、壘上に突立つて連りに號令する折りしも、第三彈は眞正面から飛んで來て下腹部を貫通した。

既に第一彈は右下膊を貫き、第二彈は左上膊を傷り、更に今第三彈は下腹部に命中した。けれど〳〵、豪氣の隊長は負傷を押隱くし、前にも增して猛烈に勇敢に味方を勵ますので、我が各兵も亦、何處までも此の高地を墳墓の地と定めて、神の如く慈母の如き隊長の脚下に榮譽の屍を横へんと、屈せず撓まず猛戰する勢は、到底人力の及ぶ所ではない、之れが爲めさしも優勢にして又强暴なる敵兵も遂に逆襲の手を弛めて一先づ退走したのである。

隊長も部下も此有樣を見て、胸の中ではホット一息吐いた。けれど此時冷靜に見渡した隊長の瞳にも部下の眼にも、既に味方の勇士或は傷き或は殪れ、殘兵は寥々殆んど數へるしか生き殘らぬ。傷者は塹壕の內外に横はり呻吟し、血は土色を更め悽愴此世の事とも思はれぬ光景だつた。恰も其頃のことだつた、天か將た命か、彼我の砲兵は互ひに味方の戰鬪を掩護する爲めに、此の高地を目がけて盛んなる砲擊を開始した悲劇はこれから始まつた。地物の據るべき無き此高地上に集團せる寡少なる我が兵の頭上やら脚下やらに爆發して、これが爲めに死傷者は益々加はり、流石の我兵も、少しく動搖の色を呈した。これが天の命ずる運命であつたらう、我が兵の困つて居る色を見て取つた敵軍は、好機逸すべからずと爲し、以前にも倍する優勢の兵力を以て第三次の逆襲を決行し、尙ほ豫備隊の大部をも第二高地に集めて全力を此の一地點に盡さんとした。砲火は刻一刻猛烈となり、斜右左から敵彈は飛電急霰の如く飛び來つて、大隊は正しく十字火の下に葬られんとしたのである。而も眼前には兩手に爆藥を持つた者、劍戟を打振るもの、連發銃を擬して呶號し來る逆襲隊がある。今度こそは

いよ〳〵最後の斷案を下すべき場合だ。已に殘り少なになつた我が大隊は、隊伍を整ふる暇もなく、平素訓練された通り唯思ひ〳〵に突進して互ひに協力し附近の指揮官の命令に服從して、死物狂ひに戰ふばかりであつた人間も働けるもので昨夜半から飲まず食はずで働き徹ほし、今又餘力の限りを盡して敵の逆襲に對抗した。彈丸の猛威は以前にも增して烈しく、或は劍で敵を突き刺したまゝ自分も射殪されて死する部下もあれば、敵彈の爲めに面部を射貫かれて居るのも心付かず、盲目的に射擊を續けて居る我兵も居る。或は携帶彈藥を射盡して己むを得ず小銃を棍棒の如く振り廻はしつゝ敵の中に突入する者もある。或は銃器を破碎されて仕方が無いから岩石の破片を投げつゝ戰ふものもある。人間最後の胴力を出したときは强いもので、重傷を負ふて塹壕内に在る者と雖も或は彈藥補給の世話をしたり、或は足場を片づけて味方の動作を助ける等、凡そ息のある者は誰一人として必死の防戰に與らぬ者なく、難戰は既に其の極度を超えて、今は慘酷痛絶の觀があつた。最早普通の人間の仕事と見るよりも、人間以外鬼神の性を弄ぶ血腥き場面に外ならずであつた。けれど隊長は依然と

して元氣を失はず傷を包みて壘上に突立ち刻々迫る危急切迫の裡に、沈靜少しも部下の儀表たるの威容態度を失はず、敵を斃す——これより外に精神を餘さぬ超人間の少しばかりの部下の核心となり、一擧手一投足皆是れ部下の爲め基準たらざるはなかつた。嗚呼。

三　嗚呼橘大隊（其三）

大隊は今や危機一髮の境遇に臨んで居る。飜つて此時橘大隊に連繫して運動した兩翼の友軍は如何であつたか。此等の諸隊も以前から激戰はしたけれども、未だ目的を達することが出來ないで依然として高地の麓で奮鬪して居つた。されば橘大隊のみ最も突出した高地を占領し、兩翼の連繫は取れず今や孤立無援の絶望の境遇であつた。而かも橘大隊とは最早名ばかりで、生き殘つて敵に對して居るものは眞に雨夜の星と異る事なく、限りの無い多數の敵軍を引き受けて、果しもない苦戰を續けるばかりで、今は唯現在の少人數を以て最後の死所として抵抗を續けなければなら

ぬ、誠に已むを得ない場面に立到つたのである。此の如き悲慘なる絶望境の中で、士卒は少しも志氣を沮喪しないばかりか、愈々益々勇壯に抗戰したといふのは、甚だ語弊があるが他の普通の隊長では出來ないことであつた。換言すれば橘中佐だつたから、部下が斯樣な狀態にあり得たのだ。橘中佐だつたからそれが忍べたのだ、他の指揮官なら或は第一壘の衝突のときから既に突擊不成功に終つたかも知れない。

隊長は自己の重傷を打忘れて、全軍の爲めに飽くまでも此の大切な高地を保持せんとするのであるから、部下も亦能く隊長の意圖をのみこんで、最後の一人となるまで戰はうと覺悟を定めて居る。それ故、負傷して壕內に居る者に向つて、

『携帶彈藥を健在者に渡して呉れ。』

といふと、負傷者は頭を左右に掉つて、

『いや〳〵、少し休んで直ぐ戰線に加はるのだから、渡すどころか、まだ補充して貰ひたい位だ。』といつて、それを拒んだ。

又正面の敵と格鬪して居る間に橫合から射擊せられて、鮮血淋漓たる兵卒に、『一先

づ退がつて繃帶をせよと。』勸めると、別段痛いとは思はぬから構つて呉れるな。今一人でも退いたら戰鬪力に影響があるぢやないか。』と反對に怒鳴り返へして突進するといふ有樣、實にこれほど强い兵隊は滅多にあるものでない。どの兵もどの兵も皆心は同じである、隊長の感化力は實に偉大ではないか。遠き以前から涙を以て部下に接し謹嚴自ら持し、苦樂を共にし大隊でも中隊でも打つて一團の家庭とするといふ隊長の主張の正しいことは今此悲絕痛絕なる實戰場に於て着々として實を結んで居る、實に何とも云へぬ鮮やかさではないか。

而して我が軍の殊死奮戰以上の如くであつたにも拘らず、敵は頻りに新鋭を增し飽くまでも此の高地を恢復せんとしていつかな退却をしない。恰も其のとき第二大隊長鈴木少佐が部下の二箇中隊を提げて大急ぎで來援した。實に地獄で佛に會つた心地、今や全滅に瀕せる橘大隊も轍鮒の水を得たるが如く、勇氣俄かに百倍して更に備を立て直ほし、防戰に力めた。而かも敵の砲彈は益々精確に益々猛烈に高地上に爆裂して殺傷を恣にし、一彈落達する毎に少なからぬ死傷者を生じ、忠魂義膽の將卒の血

漿飛び散つて地面は朱に染まる、何人増援隊が來ても此通りの情況では徒らに死傷の山を築くばかりで、高地兩翼の友軍が奮進して本高地をして凸角ならしめぬやうにせぬ限りは、橘大隊は依然として孤立である。何故この戰況が友軍の指揮官の目に見えぬか、何故戰術的見地から橘大隊の高地を保持することの必要を感じないのか、否々感じないのではない立派に感じて居る、目に見えぬのではない歴然として目に見えて居る。見えて居ても感じて居てもそれを救援して孤立から引き出す丈けの勇が無かつたからだと云はれても詮方はあるまい、橘中佐としては所謂武運拙なかつたのであらう。しかしそれは凡夫の考へる所で忠節の外眼中に置かぬ中佐は、自己の運命といふことはよく知つて居た。友軍の出る出ぬは問ふ所ではなかつた。自分には自分の本領があるとは中佐の平素からの固い信念であつた。

既にして堡壘の中央部に爆裂した敵の一砲彈は無數の破片を散らして我が忠卒を傷けた、中にも稍大なる一破片は斜に飛び來つて、瞋目裂眦、部下を叱咤し鼓舞怒號せる隊長の腰部に凄じい勢を以てぶつつかつた。腰は碎けた。如何に剛勇なる中佐も

重ね重ねの重傷には堪り得ず、

『殘念！』

とばかり瞠と後へに倒れた。

氣の確かな中佐であつたればこそ、身に數創を蒙りながら、少しもひるまずに今が今まで奮闘し得たのである。けれど生身の悲しさこの恨み深き砲彈の破片に打たれては、もう堪まらなかつた。中佐は生れて四十年、まだ肉體の苦痛といふことは知らなかつたが、この最後の一撃にはいさゝか苦痛を感じたらしい。しかし自分は此高地で死ぬのだ、生きて敵に奪還へさるゝの苦痛よりも笑つて負傷で死ぬ方がどれ丈け輕き負擔か知れないと考へて居た。

嗚呼、隊長は倒れた、そしてそれから後は起てなかつた。

之れを見るより、隊長の側に立つて居た第二大隊副官の櫻井中尉は、直ちに隊長を扶けて壕内に收容し、片寄副官も亦馳せて來て、應急の手當を施し、更に内田軍曹に命じて、隊長の傷は甚だ淺くないから側を去つてはならぬが、『見らるゝ通り我が大隊

の幹部は殆んど死傷して戰線の指揮をする者が居ないのだ、その方が第一の急務だから殘念ではあるが、これから戰場に行くから、軍曹に隊長を御預けする、よろしく御介抱申上げて呉れ。』といつた。軍曹は委細承知の旨を應へ、『死を以て隊長を守りま す』と誓つた。

内田軍曹は一時も猶豫すべき時でないから、急いで隊長を危險の少い場所に移らせさて繃帶を卷かうとして見ると、血はさながら瀧のやうに迸つて居る。手もつけ兼ねる重傷で血を見て驚かぬ軍曹も此時ばかりはひやりとした。

それでも中佐は苦しい息の下に、

『斷じて此の高地を敵に渡してはならぬぞッ。』と嚴命し、何度もそれを繰り返へして居る、其の都度鮮血は滾々と迸り出る。

恰も其處へ白鳥伍長も亦來り合せて、内田と共に看護の任に當つた。餘りの重傷に内田軍曹は隊長に向ひ、

『隊長殿、しばらく此高地を第二大隊長に御託しなされて、退却して御休養なさつて

は如何でありますか。』と尋ねた

すると隊長は頭を左右に振り、

『乃公は此の高地で死ぬのだ。』と叫んだ。

そこで軍曹も强つては勸めず、

『お苦しくはありませんか、痛みはしませんか。』と慰め問ふと、

『別に苦しいとは思はぬが、腰部を打たれたとき膀胱の方まで强く響いて、聊かこたへた。』と微笑した。

隊長はこのまゝ少時休養して再び舊位に引き還へす積りでゐる。

一四　嗚呼橘大隊（其四）

斯かる間にも我が軍は、正面と左翼方面とから依然として益々强猛なる敵襲を受け、銃丸、砲彈、岩石とは相擊つて空中を飛び、土砂硝煙は地を覆ひ、劍戟は地上に火花を散らし、悲絶壯絶の激戰今が最頂顛と見えたが、如何せん、我が兵は今曉から

の激しき闘ひで、筋肉は休む暇もなく、其れに加へて將校も下士卒も誰一人として負傷をせぬ者はなく、何れも相當の手疵を負ひ進退の自由ならざるに、彈藥は盡き刀劍は折れ銃口は裂け銃把は碎け、今や殆んど戰闘の餘力は絶無の姿となつたので、纔かに來つた二箇中隊の後續隊も、敵の十字砲火を浴びせかけられ、死屍壘々塹壕を埋め、血潮は漾々として屍と屍との間は赤い河が出來るやうなものだつた。それでも剛勇義烈の我が兵は、最後の血の一滴となるまで此の高地は敵に渡さぬと惡戰又惡戰を續けて居たので、最早兵數は幾許も居らぬとは見て居ながら、敵も容易くは强取することを得ず、此處しばらく睨み合ひの姿で息を繼いだが、暫らくすると、敵は更に有力なる增援を得た樣子で、驀然として總軍擧つて逆襲を起した殘り少なになつて居る我が兵は、尙ほ堡壘の上に最後の力を盡して防戰したけれども、敵の兵力は益々增加するばかりで、心は矢猛に逸るけれど、衆寡の勢ひ餘りにかけへだてゝ居る爲めに最早如何ともする事が出來なかつた。思はず一歩退がり、二歩退がり、三歩四歩と無念にも押し返へされる情けなさ、今茲に一大隊の增援でも來たら、敗を轉じて勝と

することは譯の無いこと、これも亦天運未だ至らざることで、誰を恨まんやうもない、どんなに勇敢な日本兵であつても、身に數創を負ひ終日食はず飮まず休まずに數倍の敵を引き受けていつまでも支へることは出來るものでない、殘念ではあつたが、手疵を負ふたる中佐の心づくしも其の甲斐無く、折角取つたる敵の第二壘は再び舊主に復へらんとするの有樣とはなつたのである。

其後の戰況はどうなつたであらうと、顏を上げて見渡した內田軍曹は、早や此の隊長の避難地が彼我の格闘場となるやうな情況に迫つて居ることに氣が着いたので、隊長の前に折敷きをして徐かに、

『隊長殿、敵がどんなに優勢でも我が大隊の占領した此高地は、決して奪り還される氣遣はありませぬ。隊長殿の御負傷こそ此儘長く棄てて置くのは宜しくありませんから、一先づ假繃帶所へ行つて軍醫の十分な手當を受けられては如何でありますか。』

と促がしてみた。

中佐は其れを聞いて稍々暫らく默つて考へ込んで居たが、忽ち活と目を見開き、弓のやうに彎曲せる軍刀兼光を矢庭に取つて起ち上らんとするので、軍曹は驚き急いで奪ふやうに我が手に之を取り、

『最も大切な此軍刀は此内田が確乎とお預りいたします。死んでも離しは致しません から、御安心なさい。』

と、皆までいはず、今は少しも猶豫して居る時ではない、と、飛び付くやうに自分の頭を隊長の脇下に突込み、片手を以て確乎と抱きかゝへて起ち上がり、側に居る白鳥伍長に隊長の左手を扶け支へさせ、敵の屍體を踏臺にして、やつとのことで塹壕内を出たが、名殘惜しさにふりかへつて我が第一線を見たとき、軍曹等の心には思はず絶望の嘆息があつた。見れば殘存せる將校とては鈴木少佐、稲生中野の兩中尉ばかり、先刻まで何かと隊長の事を指圖した櫻井、片寄 兩副官の姿も今は目には映じなかつた。『もうあれぢや迚も駄目だ。』これは内田にも白鳥にも同じ思ひであつた、その意が神の如き隊長に通じたか、兩下士に扶けられながら隊長は又もや叫んで味方を勵まし

中野中尉を顧みて、

『此の高地を決して敵に渡すな。』

と最後の嚴命を下した。中尉は決然として再び戰場に引き還へした。斯くて隊長は二人の肩に身を委ね昏々として長い息を吐いたが、不圖氣が着いたか、又もや聲を勵ましし、『決して敵に渡すな。』といつた。軍曹等は壘々たる死屍を踏み越え踏み越え一目散に高地を降つて行つたけれど、正面の高地には狠穽が多く、附近一面には高粱を折り曲げて、宛ら鐵條網を張つた如く歩行の困難危險は言ふに及ばず、殊に左右兩側面は眞の鐵條網を一帶に張り廻らし、殆んど足を蹈み入る餘地もなかつた。此有樣を見渡した軍曹等は、山の中腹から斜めに右に針路を變へて、五六歩も走つたかと思ふ頃、不意に左の胸部を棒で突き卷くられたやうな痛みを感じて、『呀ッ』と叫ぶ間もなく、其の儘仆れて人事不省に陷つて了つた。これは此の時又もや一彈來つて隊長の左胸部を貫通し、强烈なる彈丸は其の餘勢を以て内田軍曹の胸部に中つたものであつて、隊長と軍曹とは相抱いたまゝ屏風倒しに打ち倒れ、隊長は仰向になり、軍曹は斜面を二

三回轉倒して倒れたのであると、後に其れを目擊した重傷者が物語つた。今は此道路さへ敵の監視の眼の嚴しい危險區域で、近距離に潛伏した敵が、日本軍の指揮官だと見て取り、幸先よしと狙擊したものであらう。

隊長は何も云はなかつた。『呀ッ』と叫ぶことすらもしなかつた。彼が敵彈に傷められて言を發したのは例の砲彈の破片に腰部を打たれて、起てなくなつたとき、唯一言『殘念！』と叫んだばかりだつた。剛氣な隊長は今又胸に一發食つたことはよく感じて居る、けれど最早自己の力を以て身を起すことが出來ないから、其のまゝ默つて、『擊つなら敵の全部の彈丸を殘らず我が身に引受けたい。』と希ふたのである、此際隊長に少しでも起き上る餘力があつたならば、彼は匍匐しても再び山上に這ひ登り、今一度敗退せんとする生殘りの我が兵を叱咤激勵した事であらう。軍曹は總てを悲觀させまいと隊長には戰況不利にあらずと報告してあるが、明敏なる隊長は今我が大家が如何なる狀態にあるかは熟く知つて居た。

一五　墳墓の岡

稍々暫らくして內田軍曹は夢の覺めた如く、正氣に甦つて目を開くと、痛ましくも隊長は自分の側に目を閉ぢて仰向に倒れて居つた。軍曹は忽ち其身には重大なる責任を帶びて居る事を想ひ起し、負傷の苦痛を打ち忘れて、矢庭に這ひ寄りつゝ、

『隊長殿、又彈丸をお受けになりましたか。』

と叫び問ふたら、隊長は存外平靜に、

『うむ、胸部と左の下腹とをやられた。』

と答へた。

驚いたる軍曹は近づいて熟く見ると、鮮血は軍服を透して左から右から迸り出て居る。軍曹は血を吐く悲しさに涙をふり拂ひつゝ、

『隊長殿、心臟に異狀はないやうですから、御心配はありませぬ。』

と慰めた。ところが隊長の疵は決して輕くはなかつたのである。

首山堡第二壘に於ける橋中佐の奮戰

其のとき、隊長はソット眼を開いて、

『内田軍曹はどこをやられた。』

と問ふた。

『いえ、私は何處もやられたのではありません。走つた勢ひで石に躓いて仆れたもんですから、暫らく御介抱を放棄りまして濟みません。』と詫びた。

其後の戰況は如何にと軍曹は高地の方を見渡した。悲しや第二壘は既に敵の有に歸し、我が忠勇なる殘兵は辛うじて第一壘の塹壕を

挾んで此處を墳墓と血戰して居る。彼我の戰線は手に取る如く近く、敵の彈丸又もや隊長の附近に落下することしきりであつたから、軍曹は此上の負傷をさせてはならぬと、急いで凹地に移し、介抱しようと心ばかりは焦燥つて居るけれど、自分の體格が小さな上に、負傷せる彼一人で大兵肥滿の隊長を抱き上げることは容易な業ではなかつた。其上に隊長の身には數箇所の重傷があることだから、最も安靜に且つ鄭重に取扱はなければならぬ。しかも敵彈ハラ々落下する此危地ではあるし、進退いとゞ自由でないが、さらばといつて、此危險極まる生死の巷に逡巡して隊長を見殺しにする譯にも行かぬ、全身の力を出して隊長を抱へ尙ほも匍匐して小さな獨立樹のある狹い凹地にたどり着いて見ると、其處には我が負傷兵が數へきれぬ程折り重なつて横つて居る、誰も彼も重傷を負ふて身の自由を失つた者ばかり、しかも敵の注意を恐れて聲をも得上げず呻めき苦しんで居る有樣、一目見るなり酸鼻に堪へなかつた。幸にも其の中に大隊の傳令大塚一等卒と、白鳥伍長とが是れ亦負傷して仆れて居たので、氣の毒ではあるが二人を呼び起し、直ぐさま三人がゝりで匍匐して隊長の側に到り、

『隊長殿、向ふの樹の下に一つの凹地がありますから、一先づ其處へ參りませう。動かしてはお痛みでせうけれど、暫時御忍び下さい。』といひつゝ、内田は上體を擁し、大塚は腰部を、白鳥は脚部を支へて、辛つとの事で目ざす凹地に移し、大塚の外套と尙ほ外の一枚の外套とを拾つて下に敷き、内田の外套を卷いて枕とし、漸く隊長を安臥させることが出來たのである。

ホット一息入れたとき、先刻から負傷を忍んで激働した白鳥伍長は、疵の苦痛に耐へられないので、元の處に赴いて倒れたので、内田軍曹は大塚一等卒と共に、隊長の釦を外づし上衣を開いて見ると、左胸部、右胸部、共に呼吸をするにつれて濃血滾々として迸り出で、左の下膊も又出血が烈しいので、一等卒の持つて居る繃帶包まで も取り出させ、ガーゼを四分して其の二分を左右の胸部に當て、取敢へず防腐繃帶は施したけれども、まだ左の下膊を卷く繃帶が足らない。詮方がないから内田は手拭を引き裂いて、殘る二分のガーゼを以て辛くも全傷部繃帶は施したのであるが、傷ましくも鮮血は繃帶を透して盛に滲み出る、豫ねて心得て置いた止血法も有ゆる手段も最

早其の效を奏せず、如何とも施すべき術がなかつた。二人は泣くにも泣かれぬ有樣だつた。

其時隊長は靜かな聲で、

『鼠蹊部にも痛みがあるやうだ、内田軍曹一寸見て呉れんか。』といつた。

云はるゝがまゝに、軍袴を開いてよく見れば、なるほど鼠蹊部にも貫通銃創があつて、血は上と下とから流れ出して居る。これには流石の軍曹も失望の叫びを胸に上げない譯に行かなかつた。けれど彼はさあらぬ體に聲を靜めて、

『大腿軌部を貫通して居ります。』

と欺き、慰めた。

捨て置く譯には行かぬから、早く繃帶を施さうとしたが、悲しや既に繃帶は用ひ盡して、もう何も無い。已むを得ず弱つて居る大塚を勵まして、附近の負傷者に就いて其れを求めさせた。大塚は壕の底を這ひ歩いて、何處からか三個の繃帶包を得て歸つて來た。其のとき彼は何となく打ち悄れて、

『第一壘で踏みこたへて居た兵も、大方死傷して、殘つた者も何處かへ退却したやうです。』

といはんとするを、軍曹は慌てゝ之れを制し、強ひて平然として直ぐさま鼠蹊部に繃帶を施し、左の下腿の繃帶も交換し、尙ほ胸部のガーゼの不足も補ひ、脚部から腹部にかけて外套を覆ひかけた。此悲觀すべき狀態を隊長の耳に入れまいとする軍曹の胸の中は思ひやるだに可憐であり義烈である。この間隊長の出血は少しも止まず續々として迸り、これを防ぎ止める爲め銃の拭巾から手巾から遺明寺糒の袋に至るまで、其他四邊に散亂して居る布片までも使ひ盡したけれどもまだ足ず、身體中の血液が減少するにつれて唇は漸次色が變り、體溫は下がり、折々吐血さへ始まつた。負傷は最早膏肓まで進み、僅かな間にゲツソリと隊長の顏は痩せて來た。出血斯くも多量なので、非常に渴を感ずる樣子、

『大塚、水があつたら少しくれんか。』

と、隊長は求めたのだつた。

大塚は水筒を手にして、

『隊長殿、水は傷に害がありますから、少しづつ幾度にも差上げます。』といつて、水筒を口に當てゝ渴する喉を沾ほした。

兩人はかはる〳〵かうして介抱をして居たが、其の中に兩人の水筒の水は最早一滴も餘さず、出發の際馬丁の金二郎が滿塡した隊長の水筒は勿論空になつて了つて居る。而かも隊長は益々〳〵渴を感ずること夥しくなり、それを兩人に厄介をかけまいと强いて我慢して居る樣子の見るに忍びないので、二人は又もや其の邊を這ひ廻はつて負傷者に水を請ふて辛くも隊長の渴きを醫して居る狀況であつた。

然しながら、敵の射擊は相變らず盛んで、若しも今よりも一寸でも高い姿勢を取つたならば、神經過敏なる狙擊を行ふから、思ふ樣に行動も出來ず、さらばといつて何時までもこのまゝで居ては隊長の一命も危ふく、果てしがないので、何とかしなければならぬ、が情況以上の通りであるから、擔架卒の到底來るわけもなく、よしや萬が一つ來たにしても敵前でこれを運搬するなどは思ひも寄らぬ事であつた。

一六　武運

嗚呼高地一帶は早く悉く敵兵に奪ひ返へされ、塹壕上に列つて居る敵の銃劍は日光に反使して不快極る光を放ち、一齊射擊の奇異な號令は直ぐ頭の上で手に取るやうに聞え、時としては意味はわからぬが、さも得意氣な笑ひ話も起るといふ有樣で、これを見たり聞たりする我が負傷兵は、齒嚙みをして無念がり、

『此の畜生！』

と舌打ちをして憤慨する、けれど今は我に武運が無いと思へば、如何とも詮方が無い。

そればかりではない、こんな所に依然として倒れて居ると敵の爲めに搜し出されて、どんな殘忍な取扱ひを受けるかわからないので、負傷者の中には向陽寺の本隊に向つて、這ひ降りやうとする者もあつた、何れも傷の痛みを忍んで、出來さうにもないことをやつて見やうとするのを見ると實に氣の毒の至りであつた。その憐れな負傷

者をば、內田軍曹は一々之れを呼び止め、

『お前は若し向陽寺へ到着したら、此の情況をよく話して、速かに隊長を收容する手段を講じて呉れ。』

と云ひ付けた、其の聲が隊長の耳に響いたか、目を見開き其等の負傷者を見て、

『貴樣も負傷したか。何處をやられた、實に氣の毒だな。大切にしろ。』

と一々溫かい言葉をかける。負傷者もこれに對しては何と申上げやうもなかつた。

內田軍曹はなる丈けこんな物を見せて隊長の心を使はせないやうにしようと考へ、其からは、傷者が通りかゝると手を振つて知らせ、出來る限り其の視線に觸れさせないことに努めた、その間にも隊長は內田軍曹が何か知らひどく悲憤に耐へないやうな樣子のあるのを見て、隊長は

『內田、此の場に及んで憤慨するのは止せ。人を咎めるな、何事も運命だ、是非を云ふな。』

と慰めた。それをいひ終ると感慨に耽るものの如く少時默つて考へ込んで居た。軍曹

が手を以て負傷者を制したのが、計らずも隊長の目にとまつて、或は彼等を叱つて居るとでも思つたのであらう、軍曹も別に憤慨して居たのではない、一途に隊長の安靜を欲して斯くは取計つたのである。

暫らく感慨に耽つた中佐は、再び軍曹に向ひ、

『内田軍曹、乃公は生れて四十年、未だ曾て身體に苦痛といふものを感じた覺えは無いが、今日こそは隨分……。』と言ひかけて口を噤み、やがて力めて微笑しながら、

『三人目を斬つた時右手をやられた。直ぐに軍刀を左手に持ち換へて四人目を斬らうとしたとき左手をやられ、續いて腹へ彈丸を受けたが、未だ何ともなかつた。ところが砲彈の破片が強く腰部を撲つたのには全くこたへた。殘念ながらそれから起てなかつた。』

と物語る。軍曹は隊長があの烈しい戰渦中にも自分の爲した事は、極めて順序よく記憶して居るのに心竊かに驚きながら、一々謹んで聽いてから、

『いやさうでありませう。軍刀は宛で鋸の齒のやうになつて居ります。血糊は其の

儘拔はずに置きました。鍔は碎けて居ります、隊長殿、何處も烈しくお痛みはありませんか、胸か腰でも撫でませうか。』

と問ふと、

『別に苦しくはない。胸も腰も此儘に置いて呉れ。』と隊長はいつた。

軈て急に姿勢を正す樣子が見え、微笑は止まつていとも謹嚴な面色に變り、聲は靜かであるけれど極めて威嚴のある調子で、

『嗚呼今日は八月三十一日、我が　皇太子殿下御誕生の吉日だ、此の目出たい日に於て一身を君國に捧げるは此上も無い榮譽な事で、不肖周太の本望とする所だ。たゞ數多の部下を餘儀なく損傷したのは返す返すも遺憾の至りだ。誠に申譯の無い次第である。聯隊長殿に對しても責任上面目が無い。』

と、言ひ畢るや兩眼は涙に滿ち、やがて目を閉ぢて、

『聯隊長はどうされたか知らん。聯隊副官は……、我が副官は……。』

某は、某はと其の他の將校士卒の名を稱へて、其の安否を氣遣ひ、少しも自分の苦痛

は感ぜぬものゝ如くであつた。

負傷兵を見ては氣の毒だといつたのは蓋し此の述懷で始めてよくわかる。隊長は今拂曉聯隊長關谷大佐と別るるに臨み、聯隊長より

『君の成功を祈る。』と餞けせられ、之に對し隊長は『誓つて命を遂げます。』といつた、それに高地は一旦占領し先づ任は遂げたやうなものゝ、執念くも逆襲し來る敵の爲めに遂に部下の大部を失ひ己れ亦起つことの出來ぬ重傷を負ひ、今や高地は再び敵の有に復し、何事も水泡に歸したるのみならず、遂に部下の爲めに身體を擁せられて山麓に下つたことが、如何にも心苦しかつたのであらう、此の場合に臨み部下の名を忘れず、我身を後にして一途に彼等の安否を氣遣ふ、之れを知つたら生きて居る部下も死んだ部下も定めて泣くことであらう。

早やく後續隊が來て呉れゝばよい、早やく衛生隊が來て呉れゝば……と、待つて待つて待ちあぐんだけれども、遂に其の甲斐もなく、高地は敵の有に歸したまゝ我兵は再び淵落しに破られたまゝ、狀況は依然として悲慘の極みで、加ふるに隊長の身

體にも血液の限度があつた。あまりの出血に全身は次第〳〵に冷えて來る、唇の色は愈々變つて來る。血を吐くことは前にもいやまして回數を增し、瞼には早や死の色を認むるに至つた。隊長は愈々堅く死を覺悟したらしく、以前にも增して沈着き拂ひやをら口を開いて、

『内田軍曹。』と呼んだ。

何事を云ひ出づるかと、軍曹も前途を失望し、安き心もなく、

『はい。』と答へた。

矢叫びの聲、叫喚、銃砲丸の嘯き四邊は實に凄絶たるものであつた。

一七　首山の留魂（其一）

吐血は漸次烈しさを增して來る。全身は益々冷える、今は早や隊長の生命も九分九厘までは覺束なく見えだした。其のとき隊長自身も亦堅く死を決せしものと見え、從容として、内田軍曹を呼び、

『乃公は吐血の上に下血したやうだ。夕方までは生命はあるまい、生命のある間にもう一度高地を見て來やう。』

といつて起ち上らうとするので、軍曹はすは一大事と辛くも之れを止め、

『高地は依然として我が大隊が守つて居ます。增援隊ももう來ない筈はありませんから、心を確かに今暫らく御待ちを願ひます。隊長殿がそんなことを言はれますと此邊の負傷兵が皆失望して了ひます。』

實に附近に瀕死の息に苦しみつゝある負傷兵も、可懷しい橘大隊長が今尙ほ元氣で居ると思つて、落膽せずに生命を保つて居るのであつた。軍曹は斯く訴ふるが如く押止め、手早く手巾を以て隊長の口を拭ひ、糒の空袋に自分の唾液を浸して之を示し、

『隊長殿、吐血ではありません。只今差上げました水が納まらなかつたのであります。』と言ひ紛らし、續いて吐血の度毎にかうすること再三再四、それから今一つ下血の方を調べやうと大塚を促がし、共に向きを變へ、小刀を以て軍袴を切り破つて見る

と、糊のやうな血汐が少なからず下つて居た。腹部を負傷して下血をするなら早晩必ず絕命すると聞いて居た事とて、兩人は顏を見合せ今更の如く失望と落膽に呆然たるばかり、それからは大塚と交互に折々拭き淨め、終始布片を當て換へ、掌を以て防いだ。

隊長は內田軍曹の左の胸部の上衣に血の染んで居るのと、左の上膊に繃帶をして居るのを見付けて、

『內田軍曹は早く假繃帶所へ行つて疵の手當をうけるが可い。』と促がし命ずるのを、

『いゝえ、私の疵は極く輕傷でありますから、少しも御心配はいりません。』

といふと、隊長は、

『もう〳〵十分世話になつた。滿足だ。實に氣の毒だから、大塚と一緒に早く行つて呉れ、乃公はもう夕方までには必ず死ぬ體だから構つて呉れんで澤山だ。早く此處を退がつて二人丈けでも助かつて呉れ。』

と强いて部下を去らしめやうとする溫い情けに、內田は又もや涙を催ほし甚く感激

して、

『隊長殿、私と大塚とは生きても死んでも隊長殿と一所です。大隊長殿の部下には義を捨てゝ命を惜しむやうな卑怯者は一人もありません。』と決然として云ひ放つた。

隊長は

『さうか。誠に氣の毒だなァ。』

といつて、ひどく滿足氣で、快く最後の微笑を漏らした。然り橘大隊長の教育を唯の一日でも受けたものは義を捨てゝ自分許りの生命を惜しむものは一人もなかつた其證據には高地上の忠卒忠士の戰死が立派に物語つて居る。

我が軍は既に盡き、敵勢は益々加はり、山腹と山麓とに向けて發射する小銃火は愈々烈しく愈々精確で草一本と雖無事なものは無い位であつた。從つて我が兵の負傷して壕の中に居る者は一歩だつて動くことは出來ない。氣息奄々として唯恨を飲んで此儘で生命の終るのを待つより外はなかつた。内田軍曹は大塚一等卒に命じて、萬死を冒して向陽寺の本隊に辿り着き、此情況を報告して救援を求めようといつた。け

れども敵の監視は極めて嚴密であつて、壕底を一歩でも出やうものなら忽ち敵の狙撃の目標となり、今出でんとする大塚も死ぬるに死なれぬ大切な任務、出やうとはしたが、さてどうすることも出來なかつた。詮方が無いから内田軍曹は自分之に代つて其の任務を遂げやうとし、巧みに壕の底を這ひ傳ふて行くこと凡そ二百米、遙か彼方我が軍の方を見渡せば、我が救援隊の一團が高粱を蹂み亂して前進して來る。

『やれ嬉しや。』

と雀躍して引き返へし、これを大隊長に報告した。其間隊長は大塚の熱誠なる介抱を受けて氣分はまだ確かであつた。内田軍曹は救援隊が猛烈な勢ひを以て進軍して來るといふことを報告し、併せて衛生隊も暫時の中に到着することでせうと僞はつて報告した所が、

『御苦勞だつた。』

と隊長は此一言を洩らしたのみだつた。それから後は物をいふにも苦痛であつたか餘り物は云ひたくなささうな模樣が見えた。内田は隊長の側に伏し、刻々冷えつゝある

隊長を自分の體溫を以て煖めやうとした所が、
『胸に當たられると却つて息苦しいやうだから、外套でも掛けて置いてくれ。』
といふ。
で、命のまゝに側の外套を掛け、枕を直ほして其の兩側に伏し、今か〳〵と只管救援隊の到着するのを待つた。しかし救援隊の來着まで果して隊長の生命が保てるであらうか。

一八　首山の留魂（其二）

救援隊は漸次近いて來た。軈て此高地の敵に對して射擊を開いた。ところが我軍の小銃彈は今瀕死の隊長を守つて居る此の塹壕――これは敵と少しゝか距離を隔てて居ないから、敵の第一線に到達する其等の銃火は、往々にして此處の上を低く通過したり、又時としては此邊に落達するといふ有樣で、少しく危險を感ずるので、內田軍曹は大塚一等卒と共にそこらに棄てられてある方匙を持つて來て、土を掘つて壕を深く

しそして隊長を守つた。偶々高地の方から鷲津軍曹が轉ろんで來たのを幸としてこれを呼び留め、三人が相談して我が救援隊も前進して來たので敵の注意も以前とは違ふ、此の間に乘じて、隊長を搬び去らうと議一決し、外套やら天幕やらを以て擔架を假造し、折りしも一天かき曇つて來たのを幸ひよしと、此の驟雨に乘じて虎口を脫せんと計畫したのであるが、擔架がまだみんな出來ないうちに雨は止み雲は去つて了つたので三人は呆れて物が云へなかつた。此時まで默つて居た隊長は、突然！
『軍刀はあるか。』
と問ふた。
『軍刀は此處に在ります。』
と軍曹は答へて、右手に執つてこれを見せた。
『隊長殿、やがて日も暮れますから、暮れたら直ぐ假繃帶所へ御供する積りで擔架を準備して居ります。どうか氣を確かに今暫らくお待ち下さい。』
と慰め勵ましたが、

その頃隊長の樣子は急變し、眼は坐はり、脣は固く締まつてもう一語も發しなくなつた。內田軍曹も覺悟した、これでは到底恢復の見込は無い、誠に殘念ではあるが、此塹壕の中で隊長と永のお別れをしなければならぬのだ、では『遺言』をと軍曹は此處まで思ひ及ぼしたのであるが、二三度口までは出たが、さて、餘人なら兎も角、これほどまでに堅い決心を以て潔く死を期し、君國を思ひ、責任を念ひ、皇太子殿下を思ひ、部下を思ふ純潔悲壯なる隊長の美しい最期に、女々しい他事を問ふて本心に背き、覺悟の花を散らさんことは心無い所爲であると、名殘は盡きぬけれど、何も言はずに涙を呑んで姿勢を正し英魂の今肉體を離れ行く從容神の如き隊長の最後を見て居る軍曹の心中、果してどうであつたらう、靜かな死、靜かな心三人は眞に人間の斷末魔の靜けさを見た。只今限り橘大隊長は歷史の人となるのである。

斯くて今後六時三十分頃、隊長は自若として毫も苦痛の狀態もなく、仰向けに不動の姿勢を取つたまゝ、遂に瞑目して玉の緒が絕えて了つた。見よその儼然たる姿勢、颯爽たる威容、脣の色こそ少しは變つたけれども、愛馬に跨り陣頭に馳驅した平時の

隊長と少しも違つて居ない。何人が見ても實際隊長は死んで居るのか生きて居るのか見判がつかぬほどであつた。

護國の神の石像！

眞實それに違ひはなかつた。尊くもあり森嚴でもあり、實に何とも云はれぬ堂々たる最期であつた。

隊長は遂に瞑じて了つた。內田軍曹等三人は何事も口には言はれず、只管禮拜して遺骸に侍し又もや二三時間を過ごした。靜乎とかうして居る間に、中佐は再び呼吸をふき返へして、自分の名を呼んでは吳れまいか、先刻の臨終は誤りで、今一度あの溫情ある訓戒の言葉に接するのではないか、彼等三人は今目前り護國の神の石像を守つて居ながら、それが未だ神となつたとはどうしても思へなかつた。實に眞摯な態度となり、身體も精神も故人の偉大なる人格に照らし付けられて、何物の邪點をも殘さぬやうに洗ひ去られたやうな心地がする。

やがて夜の幕は下ろされた。その闇に乘じて、負傷者のことは鷲津軍曹に負託し內

田大塚の兩人は、大隊長の遺屍を擁して閃々たる銃火の下を潛ぐり〳〵通り過ぎて、午後十時半頃辛つとの事で向陽寺なる後方部隊に合することを得た。何から先きに言ひ出さうやら、萬感交々胸に塞がつて軍曹も泣くより外はなかつた。漸く胸に物語の順序を見出し、戰況の報告も濟まし、更にヤンヂヤリズキと云ふ處の衛生隊に赴き、村井看護長の斡旋に依つて一小室を借り受け、大隊長遺骸を安置しようとしたが、何ぞ圖らん、隊長が奄々たる氣息の下に、聯隊長殿はどうなされたか……と其の名を口にした關谷聯隊長は、早や既に中佐より一足先きに戰歿して此の小さな室の先主になつて居られやうとは、實に戰場の悲慘といふことがひし〳〵と身にこたへた。聯隊長と大隊長とは其の生前に意氣相投合して、互ひに君國の爲めに一死を誓つたものである。其の兩隊長が死んだ後にも亦冷やかなる體軀を並べて幽魂相交はりつゝ、茲に今曉來の激軍を物語るとは實に不思議な因緣といふのも中々愚かなことである。

一九　護國の神

橘大隊長の偉勳は記るされた。陸軍歩兵中佐に任じ正六位に叙し、功四級金鵄勳章勳四等に飾し旭日小綬章を授け賜はつた。

翌九月一日は遼陽占領の當日である。我を邀撃せんとした健氣な敵の壯圖も遂に僅々三日間の我が猛攻に當り兼ねて、北方に退却した。首山堡の高地は間もなく我が軍の手に收められて、忠勇なる中佐の生命を奪ふた敵の大部炎は殘り少なに殺戮せられ、陣風今は北方に向つて順に吹くに至つた。中佐の遺骸は聯隊葬儀委員の手によつて定められた場所に運ばれ、二日の明け方曉風殘月の下に遂に荼毘一片の煙と化し去つたのである。

『小生は兎角身體が健康過ぎて反つて困る位に候日本刀を振り廻はすことの出來ぬのが何よりの殘念なり一度は敵の首をも斬りて土產話に致す考なり目下炎熱大に加はり何となく心地よく相感じ候何でも戰爭に出かけては困難ある程氣も丈夫になり身も强くなるものなり小生が平素の身體の鍛錬は今日の爲めなり御安心あれ。』

これは七月三十一日卽ち戰死の一ケ月前名古屋の留守宅に送つた手紙である。一度は

軍刀を振り廻はし云々の希望は其後間もなく達せられて、敵の首は思ふ存分斬つた。

中佐は困難に遭遇すればするほど元氣の出る人で、戰況が思はしくなければないほど愈々強くなる人であつた。首山堡の高地を部下の大隊を以てとにかく占領したのは一に隊長の絶大なる勇氣の然らしむる處で、所謂勇將の下に弱卒なしで、着任後僅々二十日を以て凡ゆる部下を、例の偉大なる感化力を以て勇卒忠士に練成したのである。隊長の率先躬行は部下をして眞に水火をも辭せしめぬ現實を作つた。鬼神の如き其奮戰は實に吾人をして人間業とも思はしめぬ。思はしめぬも道理隊長は眞の神であつたからだ。中佐は自己の運命といふことをよく知つて居た。さればこそ、身に數創を負ひながら其れに對しては何等の手當もせずに平然として部下を鼓舞激勵した。若しも普通の人の爲すが如く一先づ後退して、疵の手當を受けたならば、生理的には命を保ち得たであらう、が、責任を重んずる中佐は、自己の大隊が敵に擊退されたといふ汚名を受くることは末代迄の名折れだと恐れた。自分が疵を包み平然として山上に在るといふことは即ち我が大隊をして榮譽を保たしむる唯一の方法である、斃れて後止む

なら兎に角、まだ一兵でも殘つて居る間は斷じて此高地を敵には還へさぬ、これが心中深く期する所だつたのである。

後で知れた事があるが、此首山堡の逆襲に向かつた敵の將卒は、日本軍が僅かな兵力を以てこれを守り、幾度突入しても一歩も退かず、彈藥盡きれば銃劍を揮ひ、銃劍折るれば岩石を投げ、最後の一人となるまで踏み止まつた勇猛には舌を卷いて恐れた最初橘大隊が占領したときに機を失せず日本軍側から更らに一二大隊の後續隊があつたならは、自分等は假令一軍團の兵力を差し向けても奪回することは出來なかつたのであらう。後になつて餘程時機が遲れて二中隊の增援を得たやうであるが、其のときは以前の大隊が最早大損害を蒙つた後で、云はゞ逐次に劣勢なものを注入した形がある、殊に夜は明けて露軍側の砲兵が活潑な砲擊を爲すやうになつてから、其後の情況は日本軍側の不利となつた。しかし、最初の大隊が彼の情況にも拘らず堅忍苦鬪したことは實に鬼神の業と謂はなければならぬ。と、稱讃して居る。

斯くして橘中佐は其の一生を畢つた。

少佐橘君ハ八月三十一日ヨリ九月一日ニ至ル遼陽附近ノ戰鬪ニ於テ衆ニ秀テタ

ル武功ヲ立テ殊ニ八月三十一日ニハ數回敵ノ逆襲ヲ擊退セラレタル後名譽ノ戰死ヲ遂ケラレタリ吾等一同此ノ悲報ニ接シ哀悼ノ情禁スル能ハス　謹ミテ弔辭ヲ呈ス

と軍司令部發の電文は、名古屋陸軍地方幼年學校を經て中佐の遺族に達せられた。中戰死死の噂は耳から耳に傳へられて、豫ねて期したる事ながら今更の如く驚き且つ悲んだ。舊知、後進の驚愕、悲愁は勿論のこと、滿天下の志士は知つて居る人も知らない人も中佐の高風を敬仰して居たので、感極まつて一言も發し得なかつた。其の忠烈その悲壯なる最期を惜しみ、護國の神と名づけて文章に、詩歌に中佐の勳業を頌詠して止まなかつた。

その遺骨は肥前國千々岩村なる故山に葬られたが、尾張の中村公園には幼年學校子弟の者が率先して碑を立て、永く其の恩を記念したり、名古屋陸軍墓地には遺族の爲墓碑を設けられた、中佐の遺芳餘烈は千年經つても中々消滅するもので無い寧ろ事新しく益々後進者の景仰の標示となるのである。そして其れは永く天地のあらん限り、護國の神として……。

七生報國

一、秘密計畫

ものゝふは　玉もこがねもなにかせん
　　生命にけけても　名こそ惜しけれ

と乃木將軍の詠まれた歌は、軍神廣瀨中佐の壯烈なる最期に比して、實によくあて嵌まつて居る。なるほど玉や黃金を山の如く積み上げたる昔からの富豪の名は、或は悲慘なる零落の終末か若くは金を湯水の如く使ひ果した嘲罵の意味の籠れる物語に殘つて、世の景仰を買はざるは申す迄もなく、不名譽なる名を小說や講談に記されて、後の世までの物笑の種となるのみである。

明治三十六年は我が國民が日露兩國の國交危殆に瀕し、極東の天空に渦卷く黑雲の姿を見い〳〵近き未來の成行を氣遣ふた年である。どうせ一度は鐵火の裡に見えて、勝敗を爭はねばならぬ運命である。敵となるべき露國は、初めより日本などは眼中にない。眼中にはないが萬一の場合を顧慮するのと、外交の背後には優勢なる武力を必

要とする見地から、旅順の要塞を修築增設し、陸には遼陽奉天に軍需品を集積し、續々として歐露本國より兵團を輸送して滿洲は愚か朝鮮、遼東半島の要所を守備せしめ極東に於ける武備は益々優大となるばかり。

故海軍中佐廣瀨武夫氏

之れに對する我が帝國の現狀はと觀れば、國民皆敵愾心に燃え、陸軍は動員準備を整へ海軍も亦艦艇の修理、練習等に非常なる活氣を呈し、且つ滿洲方面に於ける露西亞の防備は一日を遷延すれば一日の强味を增すばかりで、所謂時日の遷延は彼に有利にして我に不利であるから、元々が彼の兵力に比較して劣勢なる我が陸

軍海軍に於ては、外交上の行澁りはともかくとして、其れが爲めに作戰上の不利を多く招くことがあつてはと、實に氣が氣でなかつたのである。

どうせ開戰は避けられぬ、彼が我が要求をおとなしく容れて滿洲より撤兵したなら知らぬ事、反つて兵力を增し武備を急ぐ今日の有樣、これで兩國の平和が今後一年と保たれぬことは誰しも覺悟する處であつた。

我が海軍に於ては、日露兩國開戰の場合には、如何にして露國の海軍に對して作戰するかといふことは、既に計畫は成立つては居るが、我に五十萬噸の艦艇があり敵の東洋艦隊も亦略ぼ同等の艦艇を有するとせば、幸にして敵の海軍を擊破し得るにしても、我も亦戰鬪力の大部分を消耗して了はなければならぬ。卽ち彼も殪れ我も殪れ而して最後に我艦艇の一隻でも殘つたら無論其れは我軍の勝利に違ひはない、違ひはないがそれで平和となり講和談判に戰勝國としての要求が通過すれば結構であるが、若しも敵の波的艦隊が東上する幕になれば、其時はどうするか、又講和談判をやるに就ても、我が艦隊の大部分が健在して居ると居ないとは、其の勢ひが違ふ、諸種の點に

於て押しがきかぬ、第二の三國干涉が出て來たとき斷乎たる行動に出ることが出來なくなる、屈辱の儘の平和を結び勝利國たるの眞の面目を保つことが出來ない始末となるのだ。

そこで、理想をいふなら、我れは一隻も艦艇を損せずに敵の東洋艦隊を擊滅するのが一番有利ではあるが、其れは到底胸算の出來ぬ範圍の物である。從つて其の理想に近いやうにしようと思へば、奇襲を以て敵の巨艦を擊沈し漸次に戰鬪力を失はしめ、我はその東洋艦隊よりも遙かに優勢を占むるといふ程度で滿足しなければならぬ。卽ち二月八日の夜に乘じ我が驅逐艦が旅順口外の奇襲を試み、次いで數回之れを繰り返へしたのは卽ち此理由に基づくのである。此の戰法は今回の歐洲戰に於ても獨逸の海軍が其の方針でやつた。

なるほど、當時我が海軍の勢力は露國東洋艦隊に比しては決して劣勢ではなかつたで、單に東洋艦隊のみを敵に取るなら、別に心配することはないが、波的艦隊が東上するとなれば我は腹背約二倍の大敵を受けて、非常なる苦境に陷るばかりでなく、制

海權も亦十分であるといふ譯に行かず、殊に陸軍の作戰に大影響を及ぼすことゝなるのである。

その見地から、我が海軍一部の將校中には、開戰とならば、宣戰布告に先だち敵の東洋艦隊全部を旅順港內に抑留する爲め、港口に汽船を爆沈して閉塞して了はうとする計畫が其れである。實に名案で彼の狹い港口を數隻の汽船で塞いで了つたら、露國の艦隊は徒らに港內に蟄伏して、あるも無いも同樣の艦隊となり、日本の海軍のみ極東の全海上權を占有する結果となり、それならば波的艦隊が東上するにしても、少しも恐るゝには足らない。

此計畫は明治三十六年の秋頃から立てられ、海軍中佐有馬良橘氏を中心として極めて秘密の裡に時々同士の將校が會合して、益々其れを具體的の畫策にまで進めて行つた。

計畫が立つたので、其の筋に於ては、戰爭の始まる前から、天津丸、報國丸、武揚丸、仁川丸、武州丸などいふ古汽船に粉炭を滿載して特務船といふ名の下に、それと

なく佐世保軍港に差し廻はしたのである。なにも閉塞船に粉炭が最も適して居るといふ譯ではないが、當時は露探が到る處に出沒して居たので、なる丈け世間の注意を惹かないやうにする必要から、普通の石炭運搬船と見せかける爲めに、態々さういふことにしたのである。

當時此加盟に加はつた者は謀主の有馬中佐を始めとして、大尉藤七五郎、同正木義太、同松村菊男、中尉島崎保三、大機關士山賀代三、同栗田富太郎、同南澤安雄、中機關士大石親德、少機關士杉政人の十人であつた。有名なる廣瀨中佐は此時はまだ加盟に加はつては居なかつたのであるが、其の後愈々戰爭が始まつて三十七年二月九日我が聯合艦隊の主力が旅順港外に敵艦隊を邀擊したとき、松村菊雄大尉が負傷したので、其のあとに廣瀨中佐（其時少佐）が行くことゝなり、第一回は報國丸を指揮して武名を輝かしたのである。

二　決死の勇士

閉塞船五隻に乗り込んで一壯擧やらうとした士官が初めて會合したのは明治三十六年の十二月末つ方であつた。有馬中佐が謀主となつて大體の計畫と其れが實行の方法等の話があつて、尙ほ此事に就ては司令長官の許可を願つてそれが聽濟みになり次第決行しやうと云ふ豫定であるから、それまでは一同絕對的秘密を守るといふ事になつた。明くれば明治三十七年、早々第二回目の會合があつて、又一件を議したのであるが、此間一同は皆夫々乘組の艦艇にあつて毎日毎夜戰鬪操練だとか、戰鬪射擊、高力運轉等に忙殺されて居たが、有馬中佐は當時先任參謀として軍艦三笠に在つて、親しく長官の帷幄に參して居るのであるから、此等の計畫に就いてぬかりのあらう筈はなかつた。さて第二回の會合といふ聲を聞いて一同は、

『さては愈々物になつたなッ。』と思つた。

ところが、實際會場に集まつて中佐から談を聞いてみると意外も意外、殆んど失

望的の成行きだつた。

『自分は長官閣下に閉塞決行に就いてお許を願つたが、何うしてもお聽入れ下さらない。無論此計畫に不同意ではなくて、時機の點に就いてゞある。因つて已むを得ないから、何分機會の到來する迄は一先づ中止といふ委で居つて貰ひたい。但し何時お許しが出るかわからないから、その節は直ぐさま應じられるやうに準備丈けはお互ひに十分やつて置いて貰ひたい。』といふことであつた。

元來此閉塞の事は、宣戰布告のずつと以前に電光石火の如くやつて仕舞つて置きたいと云ふのが希望だつたのである。さもなければ全然敵の不意を擊つといふことが困難であるのは申すまでも無い。けれど只今の申し渡しで、それも出來ないと極まつたのであるから、當時秘密裡に計畫した有志の面々は如何に殘念がつたか想像に餘りがある。

どんなに立派なことを計畫しても司令長官の許可がない以上は何とも致方はないで、此閉塞を思ひ立つた決死の面々も、甚だ殘念には思つて居るが、徒らに愚痴を溶

しても仕様が無いから、然る上は長官より一日一刻も早く許可が出て、此の計畫の決行の出來る日が來るのを樂しみにして待つて居るといふ姿、恰も其ときの事であつた、東京の某新聞に、

『日本海軍では軍艦鎭遠に石材を滿載し、是で以て旅順港口を閉塞せんとの計畫がある由。』

などゝ外國電報を掲載した。實に物騷極まる事で、かうなつてみると決死の面々が別に秘密を漏洩したのではないが、何か外國人の目に映じた所があると見なければならぬ、そしてこんな記事が出ると露國側でも萬一の場合を慮つて警戒を嚴にするに相違ない、さうなれば此の快擧も成功甚だ覺束ないといふことになるので、一同氣が氣でなかつた。これは眞に無理も無いことで、

『全體どうするつていふんだらう？』

『一體機會つて何時來るんだらう？』

などと血氣の若者は氣早いことを言つて居る。

しかし待てども待てども容易に長官の許しは出ない。さうかうする裡に正月の月も過ぎ、今は早や開戰は今日か明日かといふ實に危機一髪の雲行、遂にその許しは出ずして我が聯合艦隊は擧つて佐世保軍港を拔錨し、舳艫相啣んで威風堂々直ちに戰地に向け出發し、旅順口なる敵艦隊を襲擊しようといふことになつた。

二月八日の夜半から、東洋平和の破れたる霹靂一聲遂に夜襲となり、九日正午旅順口外に敵艦隊を邀擊した。次いで我が艦隊は根據地へ引揚げたが、此の一戰を濟まして見ると總べてが活氣を呈し、どうせやる丈けの事はやらねばならぬ遠慮氣兼をして居るべき場合ではないといふ氣になり、人も物も生き〳〵して來た。

二月十八日であつた。東郷聯合艦隊司令長官より、麾下各戰隊に對し、

『決死の勇士（下士卒若干名）を選拔して、至急其の人名を報告せよ。』

との命令が、突如として下つたのである。

さア、何の事やら薩張りわからない、固よりかうして戰場に出て來た以上は何れも死は決して居る、それに選拔して出せとは全體何の事だらう、何事が出來たのであら

うか。と、氣の早い連中は譯もわからずに萬歳を唱へると云ふ騒ぎだ。ところが有馬中佐を始め例の十人は、いよ〳〵「お出でなすつた」と北叟笑みをして居たが、しかし、努めて素知らぬ顔を裝ふたのである。各艦では水兵、機關兵を甲板上に整列させて、長官の命令を傳へた後、志願者は一歩前へ出よと令すると、我も我もと先を爭ふて前に出る、これでは選拔に困つた。そこで兎に角志操の確實な、技術が優秀で、品行方正で、其上に係累の少ないのにしようと云ふので、急遽携帶履歴を調べて父母兄弟等の關係を明らかにして、とにかく、人員の數を定めて旗艦の方へ報告したのである。

翌日は例の發案同盟者の一同が旗艦三笠に招集され、有馬參謀より、閉塞決行のことが愈々長官より許可が出でたこと、但し收容艇はどうしても附けて遣らなければならぬといはれることゝ、去九日の戰鬪で負傷した松村大尉の代りに廣瀨少佐が行かれること其他必要の事に就いて申渡しがあつた。下士卒選拔の命令は云ふ迄もなくこれが爲めであつた。

此打合の結果として、直ちに、

『閉塞隊員は本日午後各々其の配屬閉塞船に乘船すべし。』

との長官よりの命令が下つた。斯うなると早いもので、命令も早く下る皆もぐづぐづしては居らぬ。で、一同は各々指定通り閉塞船に乘り組んだのである。廣瀨少佐が乘艦朝日より出でゝ閉塞船報國丸に乗り込んだのは翌二十日の早朝であつた。朝日では將校下士卒に至るまで、少佐の後姿を見送り、熱誠なる歡呼を揚げ、武運長久と光輝ある成功とを祈つた。

三　オールド、ロング、サイン

第一閉塞隊　天津丸　（二、九四二噸）
第二閉塞隊　報國丸　（二、七六六噸）
第三閉塞隊　仁川丸　（三、三三一噸）
第四閉塞隊　武揚丸　（一、一六七噸）

第五閉塞隊　武州丸　（一、二四九噸）

右の五隻であつたが、此等に分乘した指揮官及び機關士は

天津丸　有馬中佐　山賀大機關士
報國丸　廣瀬少佐　栗田大機關士
仁川丸　齊藤大尉　南澤大機關士
武揚丸　正木大尉　大石中機關士
武州丸　島崎中尉　杉少機關士

であつた。これに下士卒六十七を加へて全員七十七名、これが第一回閉塞隊の總員である。

この六十七名の下士卒を選拔しようとしたとき、殆んど二千有餘名の志願者が出たので、全くどうにもかうにもならぬ。元來指揮官になつた人々は自分の艦の自分の部下の中から選拔して連れて行つたら、何かと都合がよかからうと其れを主張したのであるが、各戰隊よりの選拔者も出て居ることで、各戰隊は何うあつても自分のところの

を連れて行つて呉れなくては困る、といふ樣な苦情が出たので、已むなく折中して大部分は部下から採り其他は各戰隊から採るといふことになつたのである。

朝鮮木浦沖なる現在の根據地から、旅順港口まで航海するには約三百四五十浬はある。而かも此等閉塞船は全速力を出しても八節はむづかしい、從つて港口まで達するには途中何等の故障が無いにしても彼是二晝夜の餘はかゝるものと見なければならぬ前にも述べた通り此閉塞船には最初粉炭を澤山積み込んだのであるから、普通の航海なら十日でも二十日でも石炭缺乏といふやうな心配は更に無いのであるが、漸次目的地たる旅順の港に近くなると、粉炭では煤煙が盛に揚るから、敵の探照燈にかゝつては早く發見せられる虞れがある。殊に日本產の粉炭と來たら煤煙が非常に烈しいので愈々目的地に接近したならば、一切和炭は使はれない、で、其の準備として各船に英國產の石炭を五噸宛積み入れた。五噸あれば先づ四時間は焚ける計算だ。

閉塞船爆沈裝置は各船とも遲くも十九日一杯には是非之れを濟ませねばならぬ豫定であつたから、廣瀬少佐監督の下に報國丸では有名な杉野上等兵曹が、非常に奮勵努

力してやつたが、何分にも他の四隻のもやつた後の事で遂に報國丸のは豫定通りの間に合はず、二十日にはもう出發するのであるから已むを得ず、杉野上等兵曹は途中迄報國丸に乘り込んで同行することゝなつた。それでも二十一日の晝頃朝鮮黄海道の西南なる某前進地點に達する頃迄には全部完成した。又糧食は到底炊爨をするいとまが無いから、總べての物品はそのまゝで食へる物を選んだ。尤も或地點までは本船の從來の乘組員が一緒に行くので、其れまでの食糧は其の方で萬端調へるといふことになつて居た。

時はこれ明治三十七年二月二十日の午前八時、五隻の決死閉塞船隊は淡霧を排して西南に向ひ發進した。旗艦三笠の甲板では、軍樂隊が現はれ並んで、例の『軍艦マーチ』

守るも攻むるもくろがねの
浮べる城ぞたのみなる

を吹奏し、續いて海軍の留送別曲たるオールド、ロング、サインを吹奏して一行の爲め

に大に行を壯にして臭れる、留まるものゝ中には羨望に堪へぬ人もあらう、行く人には得意の色がある、が、これが今生の別れかと思ふと、一種の悲壯をも伴はずには置かなかつた。各艦では登舷禮式を行ひ、總員甲板上に整列して、閉塞船が其の前を通過する毎に天地も張り裂くるばかりの大聲を以て萬歳を三唱した。そればかりではない。或は手旗信號を以て、

『成功を祈る。』と通じて來るし、

又は傳聲器で、

『必ず成功を祈る。』といふものもある。

斯かる熱誠なる送別の情に對し、閉塞船では、

『好意を謝す。』又は『必ず成功を期す。』と返答し、又總員は船橋や收材甲板上に整列して、手巾や風呂敷を打振りながらこれに應對する、其の光景は實に沈痛であり又壯絶であつた。そのうち漸次懸け離れて遂には艦隊の姿も見えなくなつた。

愈々外洋まで出て見ると行く手に又艦隊が居る。これは閉塞隊よりも一足先きに根

據地を出港した第三戰隊の笠置以下が待つて居て一行を迎へた。此戰隊は當分閉塞隊の前衛と云ふ格で、其外第五驅逐隊が側方の掩護に當る爲めに後から追着いて來た、で、これからは第三戰隊、閉塞船隊、側方に第五驅逐隊といふ配列で進航したのである。しかし一旦本隊と別れたには別れたが旗艦三笠を始めとし六隻の戰艦六隻の巡洋艦其他第四驅逐隊等は此日の正午過ぎ即ち一行より約四五時間後に根據地を出て翌日朝八時某地で合する豫定であつた。

根據地出港の日は極めて靜穩な天候であつたが、二十一日群山の沖合に差かゝらうとした頃俄然海上の模樣が變つて來て、軈てそれが大變な濃霧となつて來た。同じ船の甲板上に立つて居る人間が六尺と離れるともう見えない、況んや船と船とは皆目見えなくなつて、危險此上も無い有樣、それに此時は嚮導船天津丸からの命令は旗旒又は手旗信號で各船に傳へるといふ外には他に約束も別段してなかつたので此濃霧に遭ふては指揮官廣瀨少佐も施すに術がないといふ有樣だつた。で己むを得ず速力も思ひ〳〵に減ずる、さらばといつて餘りそれを減じると、朝鮮沿海のやうな潮流の強い處

では其の爲めに押し流されて、却つて危險に陷る虞れがあるから、無闇に減らすといふことも出來ない。で、汽笛を鳴らし、霧中信號をやつて辛じて船の位置を保つて行つた。その時の操船上の困難といつたら、どんなであつたらう、本來の船長は無論のこと指揮官の心中も思ひ遣られるのである。幸にも此船長船員等は朝鮮沂海を航海して、十分水路に慣れて居たので、所謂五里霧中の中に船を進めて、五隻が五隻とも何等の故障をも惹き起さなかつたのは誠に見上げた御手際と謂はなければならぬ。しかし此霧は午後の二時頃には漸く霽れたが、直ぐ又霰が降り始めた。二月の下旬ではあるが寒い冷いこと夥しい、その内に日も暮れて各船は危險豫防の爲めに距離を開く、いつの間にか、お互の影も形も消えて、シューッグッ〳〵、ゴトン〳〵といふ大きな濤が舷側を打つては飛沫を揚げる、實に名狀することの出來ない凄じさつたらなかつた。

船長や機關長等と食堂に會して、種々の談話をするうちに夜はだん〳〵と更けて行く。

『私共はつひ此間迄は、長崎から旅順へ石炭運搬に從事して居たのでありますが……。』

と船長は語り出した。

『てんでお話になりませんね。これは御承知の通り、ギンスボルク商會が萬端請負つてやつて居るのでありますが、先づ斯うですね、たとへば長崎で石炭千噸の送狀を渡される、所が實際は七八百も積むか積まぬかですね、先方へ持つて行く、海軍からは檢査官が來て立會ふ。併し別に文句もなく、ずん〳〵陸揚しちまふといふ有樣です。一體ギンスボルクつて大きな顏をして居るが、自分の妻君を手先きに使つて旨くアレキセーエフ大將を丸め込んで、あんなに儲けたのださうぢやありませんか。それで居て旅順には石炭が一萬噸あるの、二萬噸あるのつて、皆んな駄目です……。』

なるほど露軍の內面はそんなものだらう。其他種々の話題はあつたが、明くれば二十二日一行は前進地點たる黃海沿海州の西南沖合に着いたのであるが、此日は大變に浪が高く且つ寒さが烈しく、山々は一面に刷毛で撫つたやうに白くなつて見える、その

高い波の間を我が驅逐艦の一隊が檣が水に浸かりはしないかと思はるゝ程搖れて居ながら隊伍整々と進つて來た。道がに豪氣なものだつた。

四　丹心報國の詩

續いて前進する豫定ではあつたが、何分にも濤は高し肌を劈くばかりの寒さで、出港は頗る困難のやうに見えたが、其の內嚮導船天津丸から信號があつて、

『暫らく此地に碇泊して天候の模樣を見やう。』

と云ふことになつた。が、待つても〳〵風力はちつとも衰へないので、愈々困つて居ると、到頭九時過ぎになつて旗艦三笠から、豫定の行動を翌日に延期する旨の信號が一般に傳へられた。其處へ第九艇隊、第十四艇隊、通報艦の龍田、特務艦の春日丸、第一驅逐隊を始めとし金州丸それから四五時間經つと本隊が相前後して此處に集まつて來た。其の間閉塞の準備はどし〳〵進行して居るが、とにかく一日延期で小閑を得たわけであるから、舊船員も一行も思ひ〳〵に一堂に會して述懷談やら功名談やら

に花が咲いた。其の内廣瀬少佐の乗つて居た軍艦朝日から、カステーラ、羊羹、チキンロース、ロースビーフ等盛んに美味さうなものを澤山送り越して來た、又同艦から井原少佐が見舞に來た。廣瀬少佐は機關長などを紹介した後で、一行が根據地出發以來益々元氣なこと、爆發裝置、其他の準備も概略出來上つたことやら、天佑に依つて成功を確信するといふやうなことを、例の極めて快活な調子で話した。聽て井原少佐は、

『あとで又艦載水雷艇をよこすから、用があつたら何でも……。』

と言ひのこして歸つた。

此のとき廣瀬少佐へ小包が到着した。それは令兄廣瀬大佐夫人から義弟の困苦を察して心をこめた妙にやさしい心盡しのものであつた。披いて見ると、紫のメリンスで製したふく〳〵した胴衣と珍らしい菓子とであつた。

少佐は早速この胴衣を被て、

『おゝこりや有難い、溫い〳〵。嫂は實に宜いものを呉れたわい。』

と恐悦至極の體。

それから菓子は船内一同に分配して共に喜び、それから衣嚢から禮服用の手套を出して、

『これは曾て　陛下の御手の觸はつたものだ。』

又寫眞を取り出して、

『これは僕のお爺の寫眞だ。』

『それから、これは今度八代さんから贈つて來たので、裏にはこんな文句が書いてある。』

と一々説明する。八代さんとは今の男爵八代大將當時は軍艦淺間の艦長であつた。今回廣瀬少佐が決死隊に加はつて出て行くといふことを聞いて、自分の近影の裏に、

『旅順閉塞の壯擧に君が形影に伴ふ心にて。』

と認めてあつた。

少佐は更に着けて居る外套は以前西伯利亞旅行のときに被たものであること、自分

は柔道着の猿股を穿いて居ることなど細々と話して聞かせた。少佐は　陛下の御手が觸つたといふ禮裝用の白革手套と、父君の寫眞とを肌身につけて離したことはなかつた。

其處へ杉野上等兵曹がやつて來て、爆發裝置が總て出來上つたことを少佐に報告した。舊船員から聞もなくこの船を受取ることになつて居るので、少佐は栗田機關長を隨へて直ぐさま船内の巡檢を行ふた。晝食後杉野上等兵曹はサルーンで兵員を相手に日清戰役中威海衛で行つた防材破壞の經驗談を始めた。三日三晩水雷艇から傳馬船を出して貰つて、それに乘つて行るのだ。直ぐ頭の上は劉公島だらう、ソリヤ實に豪氣かつたぜ。その時の事を思ふと今度の戰爭なんか全で物見遊山だ。まゝ何んでも宜いが皆んな確乎やつて呉れ、俺もこのまゝ一緒に行きたいんだが、何うしても許して呉れんから仕樣が無い、廣瀨少佐の下について行くんなら一人で百人力だ、俺が行けば確乎やつて見せるがと中々の氣焰だつた。その内便船があつて杉野は朝日へ歸つて了つた。老練な杉野兵曹の實戰談には一同耳を傾けない譯には行かなかつた。所謂戰場

往來一騎當千の勇士とは實に彼の事を指すのであらう。舊船員等は明朝愈々特務船の金州丸で内地へ歸へることゝなつた。根據地を出てから僅かに一晝夜にしかならないが今更の樣に名殘が惜しまれた。それで其の晩は船長の志とあつて酒肴を振舞はれるやら、又隊員の方では急造仕込の歌人が出來たり宗匠が出來たり、中々の般やかさであつた。

丹心報レ國、　一死何所、　與レ船埋レ骨、　旅順之陲

の有名なる詩は、少佐の此際の述懷であつた。

報國の操は高しゐ置山
朝日に匂ふ敷島の花

これは兵員が作つたのを少佐が筆を入れたものである。

少左は天佑といふ言葉を幾度となく繰り返へして口にした。しかし軍神の口にした天佑は己れは何もしないで、一途に天の助けを望んで居るやうな自分勝手なものではなかつた。人事の有らん限りを盡し、最善を施してかゝれば我々の上には必ず天佑が

來るものであると信じて居たのである。恰度此の名殘の小宴が此報國丸の一室に開かれて、袂別の意を表したが、其のとき旗艦から一快報があつた。其れは我が軍事探偵の探ぐり得た情報で、

旅順の敵艦隊や陸上の建築物の多くは去る九日の我が聯合艦隊の砲擊によつて甚だしく破壞せられ、戰艦「レトウヰザン」の如きは港口西側燈臺下に擱坐し、周圍には防材を廻らして日本水雷を防いで居ること、又旅順への通路が二あつて黃金山の裾に沿ふて鮮生角からずつと大連灣の方へ、他の一つは老鐵山の裾に沿ひ、山東省芝罘の方へ出入りの途になつて居るらしい、其他敵が大分窮して居る情報だつたので、廣瀨少佐は早速之れを一同に讀み聞かせたが、一同は期せずして萬歲を唱へた。さういふ有樣で此小宴は極めて愉快なものだつた。

明くれば二十三日天候は昨日と大した變りはないが幾らか穩やかだつた。午前八時頃に從來の船員は總べて金州丸に移り、これからは少佐以下十六名の手で萬事を行らねばならぬ。

五　一片の住話

『今度不幸にして貴國と我國と干戈相見ゆるに至つたのは誠に千古の遺憾である。がこれはお互ひに國家の爲めであつて吾々個人としては昔も今も少しも變りはないのである。で、武人は既に去る九日の海戰には、軍艦朝日で以て、旅順港外に、貴國艦隊を熱心に砲擊した。それさへあるに今又第二閉塞船報國丸を指揮し、旅順港口を閉塞せんとして現に其の途上にあるのだ。健在なれ某令孃樣、某少尉殿……。』

といふ意味の手紙は此際廣瀨少佐の手によつて認められた。少佐は以前露國に留學して居た間に、某海軍少將に最も昵近を得其の二人の令孃とも親しく交際した、それから留學中弟のやうに可愛がつてやつた某少尉が居る、此人は、現に旅順艦隊の船艦「ツエザレウヰッチ」に乘り組んで居るが、某少將、その二令孃、某少尉の三人に宛てた三通の手紙だつた。

唯今の地點に碇泊中は旗艦始め各艦から用達しの爲め艦載水雷艇を出して、各艦艇

を廻らせて居たから、少佐のこの信書は勿論兵員一同の通信も遺憾なく發送することを得たのである。

少佐は露國に留學すること約二年、更に露國駐在を命ぜられ、彼の地に留まること更に三年、前後を通じて五年間露國に駐在した。其間少佐は鋭意露語の習熟に勉め、出でては露國の猛士と臂を把つて交りを結び、退いては一室に凝坐して露國の諸書を讀破し、時には地方を遊歴して風土民俗を察し、山川嶮要を案じ、時には軍衙に入つて陸海軍の現狀、其他戰略戰術に關する實情を知り、露國の研究、爲めに其本望の幾分を償ふことを得た。少佐が一身を捧げて露國の研究に從事し得たのは抑々天が近き將來に於て起るべき日露戰爭の選手として、其使命を果さしめんが爲めではなかつたであらうか。

其の露國將校と交るや、亦誠實眞摯殊に外交術に慣れ社交に長じて居たので、露國將校の間にも亦親交が多く、彼等の少佐を畏敬すること自國の先輩に對すると異らなかつた。

或る露國の海軍將校が少佐に向つて云ふた、

『日本人は團體としては實に力が強いが、個人として、第一體格が小さいから敢へて到底吾々の敵ではあるまい。』と。

少佐はもと〳〵柔道の達人である、これを聞いて莞爾と笑ひ、おのれ露國の將校の荒膽挫いで呉れるのは此時だと思つた。

『こりや面白い事を承つた。君等のいはゝる事が果して事實か否か、然らばこれを事實の上に徵するとしよう。願くば貴國海軍々人の中で膂力最も勝れた者三人を選拔して吾輩に當らして貰ひたい、吾輩雜作なくこれを投げ倒ふして御覽に入れる。』

と聲に應じて日本男子の氣を吐いた。

露國の軍人等はこれを聞いて、小面憎い日本士官だ、その誇言が癪に觸る、今に見ろその高慢の鼻を挫いで呉れんと、彼等も亦軀幹の强大なる者三人を選び、海軍省の廣場に出て、茲に日露兩國の晴れの格闘を試みる段取りとなつた。三人の巨大漢は腕を扼し目を瞋らして立ち上つた、實に鬼神が怒つたやうな面魂で大抵の者なら怖氣

廣瀬中佐高慢の露國武官を投倒す

を出すのだが、流石は廣瀬少佐で、腕にも氣力にも自信がある、少しも惡びれたる色なく徐かに廣場に進み三人が迫り來つて搏つてかゝるのを待つて、さつと開いた電光石火の早業、各々之れを拉して一振りしては土地に投げつけた。見て居る露國將校舌を卷かぬ者は無かつた。これから少佐の勇力の名聲は乍ち全露都に籍甚して、此事は直ちに帝室に傳はり、皇帝はこれを聞かせられて、少佐の力技を見たいといふことを懇ろに申込まれた。一度はお斷りを申上

げたけれど強つての懇望で否むに由なく、遂に召さるゝ儘に宮中に參向して、皇帝の前に跪いた。

皇帝は侍從武官其他の中で平素から膂力自慢をして居る者等を選んで、交る〳〵少佐と其の力を角させた、少佐は柔道の秘術を盡してこれに對したが、當る者誰一人として投げ倒ふされない者はなかつた。皇帝は少佐の膂力の絶倫なるに深く驚歎あらせられたが、其時侍從武官の某少將が皇帝の傍に居た。進み奏していふには、

『陛下を始め奉り朝廷の諸臣、皆廣瀬を以て唯武勇一遍の士と考へ居るは甚しい誤りで御座ります。彼が頭腦は極めて透明にして理解力の鋭いこと驚くばかり、普通の人が三箇月を要する事も、彼は唯一箇月を以て能く其の眞相を透徹し盡すので御座ります。決して凡庸人と同一視してはなりませぬ。彼は確かに驚くべき偉人物であります。』と讃め湛へた。

それから後同少將は少佐に對すること宛然自己の愛子に於けるが如く、露帝も亦少佐を愛慕して他の外國將校が視察し得ない秘密機關の門戸すら特に之れを少佐に開

放して示されたといふことである。かくて少佐は深く露帝の恩寵を受け留學二年に引き續き在武官として更に三年任滿ちて將に歸朝の途に就かうとした。少佐を愛することと實子に於けるが如き彼の侍從少將は、非常に少佐と別れるのを惜しみ其の愛孃の容姿才學共に露都に名高い三美人の一人であつた其の一人の娘を選んで少佐に娶はさんことを望んで來た。少佐は長い間此少將の恩誼を荷ふて居る、自分を見込んでの深切なる申込み、旦つは孃の切なる胸中も察して居ることゝして、無下にその懇ろなる所望を謝絶するに忍びなかつたけれど、少佐は夙に獨身を以て立て通ほすといふのが根本主義、日本の婦女とさへ結婚はせぬと心に定めて居たことであるから、他の事はともかく、どうしても少將の乞を容れる譯には行かなかつた。とつおいつ少佐は煩悶又煩悶遂に三日間考へ通ほした。遂に意を決して少將邸を訪ひ、斷然其の所望を謝絶した。少佐はそのとき少將に向つて、

『私は深く閣下の恩義を感謝致します。この事は終生廣瀬の肝銘して忘れざる所ではありまするが、しかし、貴國は決して我國の永久の友邦ではありませぬ。思ふに砲火

の間に相見ゆるの日も亦遠くはありますまい、若し今にして閣下のお孃様と夫婦の契を結ぶやうなことがありましたなれば、他日恐るべき運命が私共夫妻の間を割くことゝなるだらうと其れを慮るのであります。私はこれから故國に還りまするが、その曉は、閣下によつて得ましたる智識を以て、必ず貴國の艦隊に大打擊を加へんことを期して居ります。これ亦志士たる者が其の恩人に酬ゆる所以の道であらうと信じます。令孃と婚を結びまして却つて閣下の御心を苦ましむることに立至るのは、私の忍び得ぬ處で、此邊御推察あつて惡しからず御取消の程御願ひ致します。』

といつた。

其の言の正大にして義理明白、而かも至情惻々人を動かすの力は實に偉大ではないか。少將も亦此上少佐に强ることは出來なかつた、而かも少佐は既に歸國の途に就いた、少將の令孃達は少佐の出發と聞いて胸塞がり、纏綿の情緒絶たんとしても絶つべからず、少佐が今將に露都を後にするに臨み露都三美人達は空しく豐頰に紅涙の垂るゝを禁じ得なかつたといふことである。少佐の歷史は一點脂粉の氣を帶びて居ないが

唯僅かに露都の此の佳話を傳へるばかりである。而して今や萬死の境に旅立つに臨み第二閉塞隊指揮官たる少佐は、坐ろに侍從少將の過去の恩誼を思ひ、又木石でない彼の心に一片悲哀の念生じて東西幾千里を隔つる露都の佳人に、身は櫛風沐雨の境から遙かに絶筆を送つて、有りし昔の知遇を謝し、自分を思ひし令孃達の身に幸福あれ健在なれと祈つたのであるが、英雄の眼に涙あり、その信書が露都に着いて孃達の手に入つたとき、少佐は果して此世に居たであらうか。第二回の閉塞で櫻花と散つた軍神廣瀨の死を聞いたとき、露都萬里の天、哀悼の涙に堪へざる者豈獨り三人の令孃のみではなかつた。露帝を始め少佐を畏敬せる將校、多年交遊せる諸士皆その死を悼んだといふことである。

中佐と共に露國に留學中であつた前陸軍大臣田中大將は『中佐が斯くの如く宮廷にすら愛せられて、其れが爲めに却つて中佐の行事に支障が生ずる場合が多かつた。其都度中佐は僕に相談をされた。或時の如きは中佐の腕力を稱讃して或貴婦人などは、高價な「ダイヤモンド」の珠を中佐に與へたりした。中佐は其處置に困つて、とうと

う二人が考へた末ひそかに其婦人に返へした事がある。實に男らしい好士官だつた。』と語つた。

六　港口の爆沈

我が聯合艦隊は二月二十二日より旅順港口に向ひて出發し、驅逐艦を以て二十四日午前二時頃港外を搜索せしめたる處が、敵艦一隻を認めて之れを襲擊し、五隻の閉塞隊は風波を冒して進み行くに、敵の砲臺は前後二回の我が襲擊に恐怖し、夜に入つても燈火を點けて居ないので、四顧晦冥にして咫尺を辨し得ず、爲めに驅逐艦の「曉」は老鐵山燈臺の南岸に近づき、二基の電燈を點じて各艦艇の進航に便し早くも午前三時半となつた、そこで閉塞船隊は全速力を以て港口に突進したが、敵は四基の探海燈を以て海面を照破し、閉塞船を見て我が軍艦の襲來したものと誤認し、俄かに諸砲臺やら軍艦やらから砲彈を擊ちかけること頗る急であつた。

始め閉塞船は門司で石炭を積み入れ、佐世保に廻航して船體を軍艦と同じ色に塗り

換へたのであるから、風聲鶴唳には常に股慄する敵の事で、これ等を軍艦と見たのは道理千萬である。旋轉閃爛する探照燈に妨げられて、思はずも針路を誤らんとした閉塞船隊は、之れに加へて急霰の如く降りそゝぐ敵彈に、あはや擊沈せられんとする中を、危ふくも乘り切り乘り切り進んで行つて、各々此處ぞと思ふ場所に自ら爆發沈沒せしめたのであるが、中にも廣瀨少佐の報國丸は、進み進んで旅順港の東口に突進し、比較的適當の位置に自ら爆沈したが、船の名は報國丸、實に報國の誠と少佐の宿志とを貫徹して遺憾ないものといふことが出來る。當時報國丸は雨下する敵彈を物ともせず、東口目ざして猛進し、港口に膠着せる敗殘の敵艦「レトウヰザン」の防材に突き當り、敵の猛烈なる砲擊は、特に報國丸に集中したにも屆せず、自ら其の火藥燃料を燒き少佐以下十六勇士は端艇に乘り移らうとした處が、激しい敵彈にいつの間にやら二隻の端艇の中一隻は擊ち落されて無い、電導線も既に切斷されたのを幸にも敵彈が飛來して、燃材を爆發して吳れたので、首尾よく目的を達し一同殘り一隻の端艇に乘り移つたが、此際少佐は舷梯二段ばかり飛び下りたときハタと氣が付

いた、其れは報國丸の船橋に短劍を懸けて置いたことであつて、刀は武士の魂である、いかに急迫の際と雖も日本武士たるもの佩刀を置き去りにして危險を避けたといはれては、千古の恨事である、ヒヤリと胸に感じた少佐は彈雨の間を平然として沈沒船に引き返し、短劍を佩びて再び艇に移り自ら舷頭に屹立して、ハンカチーフを竿頭に飄へして其の所在を標識したのである、所謂死生の間に泰然自若たるの沈勇を具へて居なければ、とてもこれほどに大膽にして周到な行動は出來ないのである。源好尉義經が雨と飛び來る敵の箭を切り拂ひつゝ、我が弓を拾ひ取つた武勇にも似て、古今その轍を一にして居るとは床しい中佐の振舞ではないか。

これより先き集合地を出で航海中、少佐は講話をやつて聞かせるといふので、非番の兵員を交る〳〵船橋に集めた。そして少佐は紙に包んだ禮服用の手套を衣囊から取り出して、之れを押し戴き、最も熱誠なる態度を以て講話を始めた。

『去る明治二十七年四月十七日卽ち日淸戰爭の當時　聖上横須賀行幸に際し、自分は御召小蒸汽の指揮を命ぜられて居たのであるが、　陛下が御召艇へ玉歩を移させられ

るときに、畏くも御手が此の手套に觸つたのである、されば自分に取つては此の手套は何物にも換へ難き寶である。爾來日清戰爭には勿論、露國留學中、滿洲旅行中、乃至は端艇競爭のときでも陸上競技のときでも、常に之を懷中して報效を勵んで來たのだ。つひ此間の旅順港外の海戰にも亦其通りやつたのだ、其の時には皆も見て知つて居るだらうが僚艦の中には不幸にして敵彈の中つたものもあつた。然るに軍艦朝日には一彈も來なかつた。實に天佑と申すの外はないのだ。で、自分は平素陛下の御稜威によつて、何事でも成し遂げられ得るもの、又此の手套には靈が籠もつて居て常に自分のやることを照覽ましまして御座るといふことを確信して居る。それに此度の任務は、武人としては此上もない名譽の任務であると同時に、其の責任は非常に重いのである。我が國の興亡は此の閉塞の成否に繫ると云つても宜しい位のものだ。斯かる重大なる任務の遂行を命ぜられた吾々は、抑々何たる幸福なるぞや。武士の面目誠に此上もない。さはれ、吾々は少しも豪いのでも何でもない、皆も知つて居る通り此の閉塞隊の志願者は艦隊殘らずで二千有餘名もあつたのだ。其の內から吾々一行七

十七名が遣られることになつたのだから今も云ふ通り他の人より豪いからといふわけでは無いのだ、即ち是れは全く天佑に依つて斯かる武運を擔ふことになつたと申すより外はない。從つて此の閉塞作業も亦天佑によつて必ず成功することを自分は確信して疑はない。』

といふのであつた。そして兵員一同に手套を押戴かせた。

此講話が終つてから、少佐は露國海軍々人の氣質や、誰々が人物であるといふことや、露國から歸朝の際に旅順港で陸海軍の奴等から水交社宿泊を要請せられて實に困つたこと、而かもやつとこれを切り拔けて、其の着いた晩便船に乘り込んで仕舞つたこと、閉塞を終つてから、時宜によりては港內に進み、アレキセーエフ大將に面會して戰爭の理非を說き、降服を勸めて遣らうと思ふことや、晝食が濟んだならば、兵員に最一つ擧丸の話をしてやらうと思ふことなど、いろ〳〵の話があつた。その擧丸の話といふのは、膽力が据つて居るや否やを試めすには色々の方法はあるが、何が一番宜しいつて自分の擧丸に觸つて見るに越した事はない。膽が据つて居れば擧丸は平素

の通りぶらりと下つて居るし、さうでないと直く縮み上つて仕舞ふから、誰にでも能く判るのだ。今度の任務は先にも話して聞かせた通り實に重大な任務であつて、此任務を果すべきお互の責任は海よりも深く山よりも高い、從つて膽力が一番肝腎だ、取り分け戰爭などと云ふものは、進むときには規律整然とやつて行くこと敢て困難ではないが、往ける處まで行つて、さて今から引揚げやうとなると、得て困難に陷り易いものである。是れも畢竟は膽力の据わつて居ない所から致すので、膽力さへ確乎と据つて居れば、決してさういふことは無い筈だ、今度の閉塞は天佑に依つて必ず成功するに相違ないと信ずるが、愈々任務を終へ偖て是れから引き揚けやうといふときになつて、萬一にも泡喰つたり躁いだりする者があつては甚だ以て感服出來ないのだ。で引揚げるときには悠々とやるべきである。尙ほも一つ心得迄に云つて置くのは端艇に乗り込中敵の驅逐艦から追窮されないとも限らないのだ。其のときには皆『おいおい哥兄』と聲をかけて、敵艦の舷側に端艇を持つて行く、さして之に乗り移るが早いか片つ端からふん縛つて敵艦を捕獲するのだぞッ。』といつて「おい〳〵哥兄」の露語

まで敎へて呉れた。

七　猛襲

一行船隊は恰も嶇を負ふ虎の如き勢で、突進の機を窺つて居たが、敵は益々警戒を嚴にするばかりで、一分の隙もない、時間はずんずん經つて行く、愚圖々々して居ては夜が明けて了ふ、今は躊躇すべき時ではない。乃ち猛然として簇がる探照燈の光を冒し港口に向つて突進した。この少し前に先任指揮官有馬中佐は、敵の警戒が甚だ嚴重で、時機も亦猶不可であるといふことを看取したのであらう。船を報國丸に近づけて、廣瀨少佐に相談する處があつた。少佐は之に答へて、

『探照燈は氣安めに過ぎないから恐るゝに足らず、大砲は闇に鐵砲中るの憂なし、自分は天佑に依つて成功を確信する……。』といつた。そして前記の通り突進したのである。

敵彈は益々烈しくなる、無慙や有馬中佐の天津丸は、報國丸の左舷後部に當り、檣

の上に赤色のランプを掲げ、煙突のあたりから白煙が濛々と立騰つて居る。そして敵は、此不幸なる進退の自由を失へる天津丸に向つて、探照燈と砲彈とを集中しつゝある。

廣瀨少佐は塗潰した硝子板を顏に翳し乍ら、「天佑」を連呼して居る。機關長栗田大機關士は『水雷長(少佐は朝日水雷長であるが)天津丸は到頭擊沈れて仕舞ひましたね。』といつた。

『仕方が無い、水雷に罹つたのだらうと思ふ。到頭有馬を殺しちまつた? 併し俺は決して有馬一人を殺しはせんから……。』と少佐の聲は悲壯であつた。

敵の探照燈は饅頭山、城頭山の二ヶ所より、此不幸なる天津丸を照したきり少しも他へは動かさない。そして附近の砲臺からは無闇に之れを擊つて居るのがよく見える天津丸を左舷後方に見てからは、報國丸は全く山の蔭になつて少しも照らされずに港口に接近することを得たのは眞に天佑と申すの外はなかつた。

『うむ、港口はわかつた、全速力突進!』

と少佐は栗田機關長に命じた。

大機關士は直ちに機關室に還つて汽罐係の兵員に罐が破裂しても構はないから、焚けるまで焚けといつた。軈て又大砲の音が轟々と響いた。すは最早港口だ、閉塞だと云つて居る間に通信器のヂャラン〳〵に續いて機械停止、直ちに全速後退、再び停止の令が機關室に下つた。最後の停止の令が下つたのは二十四日の午前四時半で、天津丸と別れてから約二十五分を過ぎて居た。報國丸は實に此時刻に於て豫定の如く旅順港口の燈臺下尖岩に突擊し、茲に其の命ぜられたる任務を終つたのである。將に港口に達せんとしたとき、恰も其處に擱坐して居る敵の戰艦「レトウヰザン」の探照燈から烈しく照射せられ、同時に附近の堡壘砲臺から猛射を蒙つたので、第一救助艇は船橋の一部と共に海中に投飛されて了つた。

それから一二分の後『總員上へ』の令が傳へられたので、一同萬歲を三唱したる後機關室の者も順次に上甲板に出て來た。砲臺や「レトウヰザン」からは砲彈を亂射する、小銃彈を射かける。此時廣瀨少佐は二人の兵員に扶けられ、よろ〳〵辛うじて歩

み得るといふ有様、而かも例の元氣な調子は少しも失なはず、

『大丈夫〳〵、實に愉快〳〵。』

と叫んで居る。少佐は船が燈臺下の尖岩に突撃し、次いで擱坐したので直ちに後部に引上げやうとしただ。此時船橋の段梯は、既に敵彈に破壞されて了つたので、いきなり船橋から上甲板へ飛び下りた、其のとき例の短劍を置き忘れたのに氣が着いて之れを取る爲め再び船橋に飛び上り又飛び下りるなど隨分劇しい働きをした其の時に、强か向脛か何かを打つたので、一寸起ち得なかつた爲めであることは後に少佐の語る所によつて始めてわかつた。

『救助艇の用意は出來て居ります。』

といふ報告に接するや、直ちに人員點呼を行ひ、そして缺員が無いことを確めたので即刻本船を退去することに決し、それ〳〵端舟に移乘の命が下つたところが、端舟は實際どうかと云へば、浸水と潮流とで船尾の方は最早舷縁が水に浸りさうになつて居るので、最初に乘艇した者は、何れも豫ねて本船の舷側から垂下げてある舫索に縋つ

て其れで以て僅かに艇の沈下を防いで居る有様、少佐と大沼兵曹とはまだ本船に留まつて居る、機關長は到底これでは駄目だと見たので、此事を少佐に話すと、では他の端舟に乘り換へようといふ、そこで一同再び本船へ戻ることゝしたはしたが、それが又實際に出來る筈ではなかつた。總員が健全であるにしても小人數では迚も端舟が降りるもので無い。それに最早負傷者は四人も出來て居るし、砲火は益々劇烈を加へて居るのであるから、實に絶體絶命の場合だつた。ところがこれこそ眞の天佑、此時船橋の前部に火災が起つた。それが見る間に焔々天を焦す猛火となつたので、其處ら一面明るくなつて後甲板に居るお互ひの顔までが判つきりと見える様になつた。それが爲め敵火は烈しくなつたが端舟乘換の不可能といふこともわかつた。

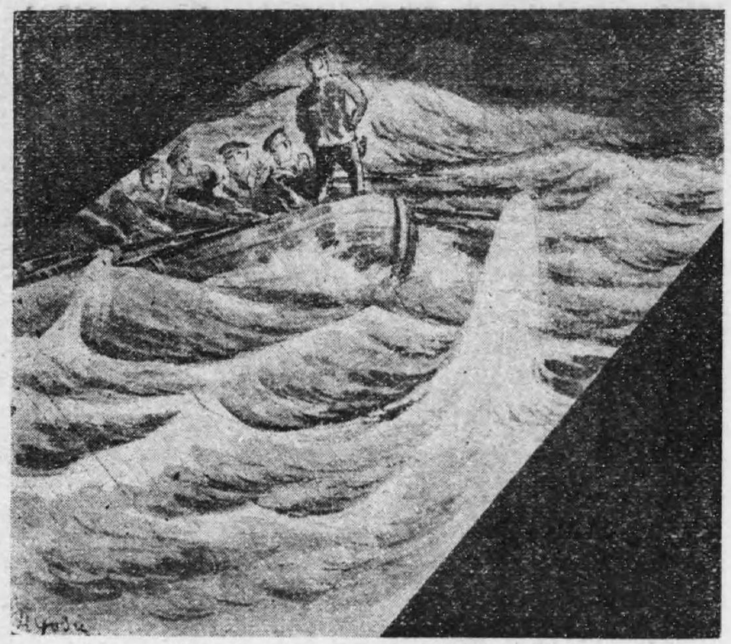
此現情を見て取つた少佐は、何かは以て躊躇すべき、直ちに現在の端舟で行ける所まで行かうと言明し、總員十六人、殆んど脚の半分以上を沒しながら、偏へに天佑を確信しながら斷然本船を離れた、これは二十四日午前五時の事であつた。

今が今まで此端舟は本船の艦に密接して居つたので、敵からは能く見えなかつたの

であるが、約二三艇身も漕ぎ出したかと思ふ頃忽ち敵の發見する所となつた。最早どうすることも出來ない、彈丸の束が水面を打つてはね返す、幾十幾百と數知れぬ飛沫と、橈の先から迸る飛沫とが共に探照燈の煌々たる光に照らされて、鼻先きに一種名狀の出來ない色彩を現ずるので、いつ何時非業な目にあふか知れない有樣、しかし一同は實に平然沈着したもので、何等恐るる色もなかつた。中にも少佐は荐りに睾丸を見たか〳〵と云つたり、又外見はしなくて宜いから能く俺の顏を見ろと云つて兵員を鼓舞し、一同は必死となつて漕いだ。

八かゝる時

恰度このとき、報國丸の後方近く港口に向つて驀進し來る閉塞船がある。はつきりとはわからないが、順序から云へば何うしても仁川丸らしい。敵は直ぐ相手を此船にとり、その爲めに少佐一行を乘せた端舟に飛び來る彈丸は急に減つた。とにかく一同必死となつて調子を合せて漕いで居る、僅か六艇立の小端舟ではあり、而かも艇は半



黄瀬中佐の一行敵砲火劇烈の中を端舟に乘換へる

分以上も浸水して居たが、ずん〳〵進むのが見える。初めは沈没を氣遣つたのと探照燈を避けやうとしたので可成陸岸近く漕出したが、中にも機關長は長靴を穿いて居たので其れを脱いで、早速それで浸水を汲み出し、段々水も減つて行くし探照燈も仁川丸の驀進を阻てる爲めに、專ら其の方を照らし換へたので、端舟の方へは餘り彈丸が來なくなつた。一同はこれで勇氣百倍し益々調子を合せて更に沖合に向つて漕ぎ出した。

このとき『敵の水雷艇がやつて來る』

といひ出した。探照燈の光芒ですかしてみるとなるほどそれらしいものが見える。氣早の者は豫ての覺悟、『おい哥兄！』を實用するのは此時と云はぬばかりに、最う太刀を引き拔いて今にも斬つてかゝらうとする身構へ。ところがだん〳〵近いて見ると其れが端舟の顚覆して居るものであるといふことが判つたときには一同憮然とした。此の端舟は報國丸の第一端舟であることは紛れもないが、其のときは誰もさう思ふものはなく、これは當然仁川丸のものである。この模樣で見ると、指揮官以下全滅になつたに相違あるまいと思つたからである。此端舟に就ては其後數日を經て仁川丸乘員の收容せらるゝに及び始めて眞相を知ることが出來た。

しかし、此の端舟は仁川丸のにしては頗る審しいといふ反對說が直ぐ起つた。何故なれば、仁川丸其物が吾々が既に報國丸を漕出した後で漸く遣つて來たのであるのにそれがどうしても未だ引退げよう筈がないといふのだ。さういへば現に仁川丸は今此の報國丸の端舟の稍後方に在つて敵から盛んにやられて居るのが、今しも炎々たる猛火に包まれて天を焦がし波を燬かんずる報國丸の火災と、敵の探照燈とで能く見えて

居る。それに此の顚覆した端舟には少しも人の氣配がしないのは、愈々以て仁川丸のでない證據とも思はれる。さういふうちにも長靴なんかで浸水を汲み出したので水はかなり減つた。で、最初には姿も見せなかつた軍用堅麵麭の一箱さへ尙ほ艇內に留まつて居ることが判つて一同の勇氣は更に百倍といふ有樣。

ところが、又困る事が出來した、それは段々港口を距るに從つて星も見えなくなつて行く手が頓と判らなくなつた。羅針も何も無いので唯便るところは港口に猛り狂つて居る報國丸の火焰と、黃金山其の他から閉塞船を照らして居る探照燈とのみである即ちこれによつて港口丈けは見當が付くわけだ。で、港口を後にして沖にさへ出れば先づ大體に於て差支はないのであるが、その見當をつける爲めに刻々港口を振り風つて望むのが眼の毒で、それが爲めに薩張り前方が判らなくなる。然るに又々天佑があつて、敵は其の頃から荐りに半彈を發射する、その都度海面一帶が分明になる。それでどうやら針路もついて來た嬉しさ。

報國丸は何時迄も盛に燃えて居るが、最早曉方に近いたのと敵彈の來るのも大分疎

散になつたのとで、急に寒さを感じ出した。それが爲めに橈は時々亂れかかるので、廣瀨少佐は荐りに元氣を鼓舞するが、遂に武野といふ兵は橈が打ち切れないと云ひ出した。他の者が喜んで代つた。此武野は端舟を卸ろすとき、右肩背を始め大小十三箇所に負傷してゐることが後に知れて實に氣の毒であつた。一行は規約に從ひ收容艇に所在を知らせたいのは山々であるが要具は或は燒失し或は濕潤して少しも用を爲さない。已むを得ず例の軍用麵麭の箱に點火して信號しようと試みたがそれも駄目であつた、色々のことをしてみたが皆駄目だつた。併し最う夜の明けるも間もないことだと云ふので、艇員を入れ換へ大聲で收容艇を呼びつゝ、更に一層の勇を鼓して漕いだ。その内夜がほの〳〵と明けて右舷前方に老鐵山が模糊と見え出した。豫定によれば收容艇は此邊に潛んで居る筈だから、爪竿の尖頭に白布を結び着け、之れを左右に掉りかざしつゝ、段々近いて行くと果して味方の水雷艇が之れを見付けて飛んで遣つて來た。見れば衛艇たる「隼」である。

隼では萬歲を三唱した、一行も之れに和して萬歲を唱へた。白布を結び着けたる爪竿を突いて端舟の艇尾に儼然と立つて居る指揮官廣瀨少佐をば、全く軍神であると稱したのも實に誤りではなかつた。

隼が十六名を收容して嵎岩附近なる本隊に會すべく駛出したのが朝風寒く海面を吹いて居る二十四日の午前六時半頃だつた。夜前さしもに猛烈を極めたる諸砲臺も今は靜まり返つて、旅順口の山々は裾一面の細霧の裡に、波濤の如く起伏して居る黃金山の探照燈は尙ほも海面を照らして居るのが夢の樣にかすかに見えて居る。隼は二十節の快速力で旅順沖を横ぎりつゝある、餘燼未だ消えず左舷遙かに是れも亦夢の如く淡く白く立騰つて居る報國丸の烟を見たときには、流石に萬感交々臻るを禁じ得なかつた。

午前八時頃隼は本隊に合し、一行十六名は軍艦朝日に移された。朝日の甲板上は人山で黑くなつて居た。隼は報國丸の衛艇であつたから、廣瀨指揮官以下の消息如何と待ちくたびれて居たのだ。少佐は隼の後甲板に勇氣凛々として佇立して居る。之を迎へたときの朝日艦上は、無限の感慨でどよめき渡つたことは茲に筆紙の盡す所で

はない。兎にも角にも此度の閉塞は成功といふほどの事は云へないが、其中で廣瀬少佐の報國丸だけは殆んど豫定通りの行動を遂行し、而かも隊員十六名の中三名の負傷者を出したのみで還つて來たのだから其の歡喜は蓋し譬ふるに物なしだつた。

九　功名赫灼

越えて二十七日、山本海軍大臣は祝電を送つて軍勞を謝した、其文は左の通りである。

第三回旅順方面の攻擊に於て、喜ぶべき情報に接す、是れ一に　陛下の御稜威に由るものありと雖も貴艦隊將卒の忠勇義烈の誠に出でざれば、焉んぞ能く此壯圖を擧ぐることを得べけんや。只紀果に於て未だ豫期する所に達せざりしも、其效力の多大なりしは確く信ずる所なり。殊に貴艦隊が、今回數日に亘り絶えず攻勢を執り敵をして殆んど策の出づる所を知らざらしめ、以て帝國の光威を發揚せられたるは本大臣の最も敬意を表する所なり。

茲に貴艦隊の行動に對して祝辭を呈し、併せて全艦隊員の軍勞を慰す。

我が　大元帥陛下にも此壯擧を聞召されて、叡感斜ならず、二月二十八日を以て左の詔勅を東鬼聯合艦隊司令長官に下賜せられた。

聯合艦隊旅順港口ヲ閉塞セムトシタル壯擧ヲ聞ク朕深ク其事ニ與リシ將校下士卒ノ忠烈ヲ嘉ス

この優詔を拜して感激に堪へず、司令長官は三月一日左の奉答を電送した。

旅順閉塞の擧に對し優渥なる　勅語を賜はり臣等恐惶に堪へず此擧完全に其效を奏せざりしは深く臣等の遺憾とする所なれども之に從事したる將卒が殆んど無事生還したるに至ては唯　陛下御威德の擁護に依るものと一同感激せざるものなし

右謹んで奏す

是れより先き少佐は屢々書を令兄夫人なる嫂に寄せて、袂別の懷を述べたのであるが、幸ひにも萬死を賭して一生を得たので、三月二日を以て左の如き郵書を寄せた

『(前文略)報國丸に於ける武夫の筆にせんと欲するもの多し、されば何より始むべきか武夫は閑暇ある毎に其の一節を抒し二節を筆し以て久しきに亘らば或は草間蛇を認むるの感あるも多少當時を知る可きか。旅順港口閉塞の企あり武夫も其實行者の一人たり豈に勇躍の至りに堪へざらんや。此行畢竟死を決する身にしあれど萬死ありて一生なきもの艦内(朝日のみにて)にて同行者を募る、應ずる者水兵部百十九人機關部百十二人あり、しかも先きを爭ひ懇請涙を以てするものあり、其取捨に於て大に苦しむ。あゝ死を賭して事に當らんとするの氣性は實に吾國民にして始めて見るべし、痛快の至りに堪へず。特別運送船五隻とし各船に要する將校一名機關官一名水兵部二名機關部大型(天津、仁川報國)には十二名小型(武揚武州)には十名とす。吾朝日より總五隻に要する人員を出すも尚餘あり、吾が指揮する報國丸のみはせめて朝日のものを以てせんことを欲せしも議容られず各艦より先を爭ふて其の行に加はらんとするもの多く辛うじて其人員を各艦に配付して衆意を慰することを得たるなり。武夫が最も敬愛する先輩にして義師兄に同じき淺間船長八代大佐より

此度の壯擧に死すれば求仁得仁ものなり邦家の前途は隆盛疑ひなし憂慮を要せず安心して死すべし

と武夫の意を得たるもの

司令長官東郷中將宴を旗艦に開きて旅順閉塞隊の一行を送る宴酣にして長官三鞭の杯を擧げて行を壯にす辭簡にして意壯なり上村中將壯快の辭を以て又之を勵ます。一行の意は曩に既に決せり今其發途に臨み又此辭あり愈々激奮せるを見る、送らるゝものも送るものも陛下の御稜威によりて其成功を疑ふものなし快極矣、旅順閉塞の途に上る意決せり何をか躊躇せん。朝日を辭するに臨み身裝する九日の戰に於けるが如し、唯懐にする亡家大人の寫眞と共に八代大佐の寫眞あり大佐書を寄すると共に其の寫眞を贈り、其裏に『旅順閉塞の壯擧に君が形影に伴なふ心にて』と此行を共にするもの朝日よりは一等兵曹大沼今朝次郎三等機關兵曹大山鐵五郎一等機關兵三富由太郎同竹澤彌七二等機關兵高井清三等機關兵石井銀次郎とす、二十日朝日艦長山田大佐　皇太子殿下より恩賜の三組銀盃に三鞭を注ぎ副長は總員を集めて大に

其行を壯にす。武夫之に答へて曰く「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇統ヲ履ミ玉ヘル　天皇陛下ノ御稜威ヲ頭ニ戴キ武運茅出度軍艦朝日ノ餘光ヲ後ニ負ヒ此行ノ成功ヲ期ス」と船發するに臨み各艦熱誠に皆萬歲を唱へ吾等も亦之に和す。手旗「メカホン」にて前途を祝し勵まさるゝもの多し。淺間より手旗あり「汝の成功を確信す」と之に答へて云ふ「天佑によりて自らも成功を確信す」と。今之れを書き直ほせば、

報國の操は高し笠置山
朝日に匂ふ敷島の花

一笑一笑敷島よりせし二等兵曹角久間千幾藏は大縣竹田のものにして武夫と鄕里を同じうす彼が尙ほ四等水兵たりしとき武夫磐城に於て彼を知る、彼を報國丸に見るや顧みて『おい貴樣と一緒にならうとは思はなんだ。』と、彼答へていふ『宛で夢の樣です』と。

第四信としてはこれまでと致候』――

此閉塞實行に於て、有馬中佐の天津丸と正木大尉の武揚丸とは隊員全部收容せられたが、齊藤大尉の仁川丸と鳥崎中尉の武州丸とは隊員全部行方不明、兩隊員は運惡く其日の中に收容せらるゝ事が出來なかつたので、風のまに〳〵渤海の彼方に押し流され、とある島蔭に辿り着いたまではよかつたが、味方に通信することも出來ないので、是では叶はぬと更に再び船を艤して大洋へ乘り出した。風は段々强くなる海は次第〳〵に荒化て來る、それから非常な艱難を嘗め盡して辛つとの事陸に着いて見ると何とも勝手の知られない所だ、それから我艦隊に救はれるまでの消息は全くロビンソンの漂流記そつくりで、實に何とも譬へ方の無い難儀な目に遭ふたのである。

一〇　敵の心膽を挫ぐ

吾人はこの第一回の閉塞が露軍側に對して如何に響いたかを玆に語ることの無意味ならざるを信ずるものである。

（一）　絕東太守アレキセーエフの報告に曰く、

謹んで二月十一日(我が二月二十四日)附を以て上聞に達したる電報の件に付き追奏す。二月十一日午前二時四十五分より黎明まで敵は多數の水雷艇を以て「レトウヰザン」を攻撃し、又燃燒物を積載せる大汽船數隻を通路に沈沒せしめんとせり。最初に敵の水雷艇を發見したるは「レトウヰザン」にして、砲臺の掩護を受け水雷艇に向ひ强烈なる砲火を開き、其の直進し來る二隻の汽船を港口附近に破壞し、其の内一隻は老虎尾燈臺下の岩上に乘り上げ、他の一隻は黄金山下に沈沒せり。水雷艇に對する撃攘は黎明まで繼續せしが其の時錨地に四隻の汽船沈沒し八隻の水雷艇は其の沖合に待てる軍艦の方に向へるを認めたり。而して端舟を以て遁れ得たる汽船の乘員は其の一部分溺沒せりと雖、恐らくは敵の水雷艇にて收容せられしならん。海岸附近の搜索を行ふに、港口の通路は現時障礙なし。此の如く敵の畫策悉く失敗せしは「レトウヰザン」の勇敢に抵抗したると、其の砲火の劇甚なりしとに歸すべし。今も尙ほ一隻の汽船は焚燒を休めず、錨地に漂へる水雷は殘れり、敵は尙ほ二戰隊を以て水平線に殘留せり。追撃に遣はしたる三隻の巡洋艦は錨地に於ける浮漂水雷掃除の爲め召還せんとす。

(二) 同太守の第二報告に曰く

海軍中將スタルクより二月十一日(我二月廿四日)の未明に於て日本驅逐艦の我戰艦「レトウヰザン」を攻撃し、續いて閉塞船侵入し、竝に同月十二日敵の巡洋艦我が驅逐艦「ベズストラ!シヌイ」及び「ウヌレーテリヌイ」の二隻を攻撃せる狀況を報告せるを以て謹んで傳送す。戰鬪動作は暫らく鎭靜せし所、二月十一日午前二時四十分戰艦「レトウヰザン」より砲聲起れり、同艦は常に老虎尾半島の錨地外を監視せしに、白色の敵驅逐艦一隻を認め發砲するや、内錨地及砲臺より之れに應援して發砲し、砲戰は斷續一時間に及び、其の最後たる午前四時に至り頗る劇烈を極めたり、是れ「レトウヰザン」の港口を指して來れる敵の汽船等に注ぎたるなり。其の火力は敵に在りては堪へ得ざりしものゝ如く、第一の汽船に向ひ砲火を開くや十五分時ばかりにして同汽船は焚燒し、内錨地より港口の燈臺下に於て自ら擱坐したるを認めたり。第二の汽船も我が砲彈を受け其の目的を達し得ずして第一の汽船と同じく黄金山の下に突進し海岸に擱坐せり。蓋し此等の汽船は驅逐艦に伴はれつゝ「レトウヰザン」に對し、其の位

置を適當に据え乗員を驅逐艦に收容せしめ、以て「レトウヰザン」を爆發せしめんとせしものならん。探海燈照射に依り敵の驅逐艦一隻撃沈せられたるを認めたりと云ふ者多きを見れば、汽船の乗員は悉皆收容せられたるにあらざるべし。汽船の全く撃攘せられたる後に於ても敵の驅逐艦は數回「レトウヰザン」に迫り、同艦をして天明まで發砲を絶えざらしめたり。而して天明に至り敵汽船二隻は自ら岩礁に擱坐し、大驅逐艦一隻老虎尾半島海岸の深處に於て小潮の爲め其の船體を顯はせるを發見せり。此等の汽船は何れも三千噸以上にして石油に浸せる粉炭に「カルミャ」を少しく加へたる燃質物を積載せるが爲め、火焔に包まれ撲滅に努めたれども焚燒すること一週間に及べり。汽船は皆爆發の裝置を爲し沈置すべき場所を豫定せるを見れば最も恐るべき大火船の性質を備へたるものと本職は認定するなり。又汽船及び海岸にて發見したる物件は多からざるも、之によりて乗員の退船せる狀態を判ずるに頗る周章を極めたるものゝ如し、即ち一汽船に於ては海圖一枚と海軍士官の衣服遺れり。是れ其の倉皇退船したるの證なり。尚ほ一の海圖に於ては大船の取るべき位置と「レトウヰザン」の

位置をも日本文字にて記しあり、是亦た日本海軍が火船使用を計畫したる事を證するに足るべし。敵驅逐艦の沈沒せることは其の場所不明なるも確實なるが如し。又敵は火船攻撃の結果を知らんが爲め、驅逐艦五隻を伴へる巡洋艦隊をして「レトウヰザン」と砲臺との前面に來らしめりしが、巡洋艦艦隊は持重して遂に砲臺に接近せざりき。我が巡洋艦「アスコリド」、「ノーウヰック」及び「バンヤン」の内錨地より外錨地に出づるや、敵艦は既に其の形を隱せり。又同錨地に多數の物件浮漂するを以て、其の間に水雷の存在する危險を慮り、直ちに敵艦の追撃を企つること能はざりしなり。

（後略）

（三）　海軍大佐ブーブノフ記事の大要に曰く、二月十一日（二月二）午前三時探海燈光の照界内に當り、港口に向ひ來進する或る船舶を認めしが、猛烈の砲火は「レトウヰザン」と砲臺とより起り之を阻止せり。但し此の砲火は單に探海燈光と等しく敵船をして港口の位置を判定するに困難ならしむるのみの效を奏したりと謂ふべし。然れども此等船舶の指揮官をして大に沈勇の氣を失はしめ志氣を沮喪せしめたれば先づは無形

の影響を有したりと謂ふべし。其後に明瞭となりたる如く日本人の放てる五隻の閉塞船中三隻は目指す目的地附近に來り、他の二隻は遙か遠方に沈没せり、即ち其一は白浪澳に坐礁し其二は外港に沈没せり。又三隻中最も成功せるは「ビジョウ」丸（報國丸の誤である）とす、同船は「レトウキザン」より猛烈なる砲火を物ともせず眞の港口に入り來り港口の西端に散在する礁上に擱坐したり。若し同船にして少しく右したらんには「レトウキザン」は艦尾を衝き破られたるならん、他の二隻は、港口の東側陸岸に擱坐せり。

港口の水道にして若し自由に通航し得べき餘地を存せしならば、是偶然と爲さゞるを得ず、當時我は港外錨地に未だ工兵部の敷設水雷を有せざりしが、後に至り之を敷設することゝなれり。又港口迄の近接を困難ならしむるが爲汽船數隻を沈め此の間の防材を張るの手段も未だ講ぜられざりき。然れども水道は尚ほ自由に開きありて衆皆之を喜べり。但日本人の此の如き企畫は吾人に嚴密なる警戒を喚起せしめたり。此夜の閉塞擧行に對し、我は曉まで内港より驅逐艦も汽艇も出す能はざりき。何となれ

ば砲臺の砲員には彼我の區別なく、尚も探照燈の照界に入りたる物件と見れば忽ち砲火を開きたればなり。斯かる事情なりしを以て却て此等汽船の乘員を海上に拾集し、其の端艇より驅逐艦に之を收容するの便宜を日本人に與へたり。若し拂曉に及び同夜「レトウキザン」の附近に哨戒せし二隻の驅逐艦を派遣するに止めず、四隻乃至六隻を出し尚之に「ノーウキク」をも加へたらんには閉塞船乘員の一部を俘虜と爲すを得たるならん。日本の閉塞船の殆ど總乘員が自己の手に依り救助せられたるの事實は將來に影響する所頗る多からん。爲めに次回の港口閉塞に當り、日本閉塞船の指揮官も兵員も我が雨注する砲彈の無能にして、前回閉塞隊員の救助せられ得たる事實を知悉するを以て、一層自信力を强め猛勇に動作するに至れり。

二　正氣歌

第一回の閉塞は、遺憾ながら豫期の通り敵の港口を全然閉塞して旅順港内の敵艦隊をば、全部袋の鼠となすことが出來なかつた。敵は尚ほ自由に港外にも出で得るので

あつたので、我が海軍に於ては一旦やり出したことは、何處までも最初の計畫通り其れを決行せねば休まないといふ方針であつた。敵の公報にもある通り、閉塞行爲は萬死あつて一生なきものと思つて居たのに、閉塞隊員の殆んど、大部分が生還したといふことと、あれほど猛烈に照明し且つ砲撃した敵の抵抗が、所謂闇に鐵砲で思つたほど效力がなかつたことから考へて、今一回決行したら今度は必ず豫期の目的を達し得るといふ自信力が付いた。殊に新に露國太平洋艦隊司令官に補せられたるマカロフ中將は、三月八日愈々旅順口に到着し、將旗を巡洋艦「アスコリッド」に飜へし、即時麾下艦隊の檢閲を始めるやら、從來銷沈して居た志氣の刷新を圖るやら、或は晝夜兼行で損傷艦艇の復舊に努めるやら、乃至驅逐艦を以て攻勢を取らんと擬するやら、其の甲斐甲斐しさ實に非常なものであるといふことだ。而かも中將着任以來の目覺ましき其の活動は我ながら少々豫想外だつたこと、之れが統帥は海軍戰術家を以て有名なるステパン、オシポウキッチ、マカロフ其の人であるといふことで我が艦隊は好敵手を得たるを喜ぶと共に、一種畏敬の念を禁じ得なかつたのである。

月日は案外に廻り早く、かれこれするうちに三月も半となつた。二月二十四日第一回旅順口閉塞があつてから、最早一月過ぎた。其の間我が艦隊は根據地を前方に進め、從來の根據地は旅順を距る四百浬ばかりあつたが、前進の結果往復の四百浬ばかりは全然儲かるといふ有様、旅順とは眞に一葦帶水呼べば應へんとするの近距離となつたのであるから、敵を攻撃するには至極便利であると同時に、敵からの攻撃を受ける虞れも亦頗る多いのである。で、三月十三日東郷司令長官は麾下艦隊を率ゐて、此地に入來するや、錨地警戒に關し各艦に對して嚴に訓令する所があつた。三月十八日旗艦三笠に於て第二回閉塞に關する會議があつた。

其の結果愈々第二回閉塞を決行するといふことになり、千代丸、福井丸、彌彦丸、米山丸の四隻で、何れも二千七八百噸、速力は十節位の汽船が閉塞船と定まつた。

そこで、下士卒の方は第一回の例もあることではあり、旁々從來夫々指揮官が部下として使つて居るものゝ中を選拔したいといふのが第一の希望であつたが、四團の事情は却々之を許さなかつた。何様第一回に於て全滅すべき筈の閉塞隊員が、仁川丸の

二等機關兵梅原健三一人を除くの外、殘らず生還したと云ふことは、既に既に奇異の感を催さしむるに十分の價値がある。旅順口閉塞を以て單に好事者流の冒險作業に過ぎないなどと腹の中で嗤つて居た連中も、一寸考へ込まざるを得なかつた。之れに反して幾多の冒險家は必ずや胸を躍らせて喜んだに違ひない。否平素から皇恩の萬一に報い奉らんことを期して居る我忠誠勇武なる軍人の志氣は、全滅が全生となつたといふ此一事實で、いやが上にも振ふたのは少しも審しむには足らない。所謂下世話に云ふ景氣がよくなつたのだ。とにかく司令長官から第二回閉塞隊員募集の命令が下つた時には、決死の志願者は無慮數千に上つたのは實に帝國軍隊でなければ見られぬ圖である。で、第一回の例に則つて各戰隊から按分で採用する事となり、愈々其等も出來上つた。

さて閉塞船は以前のものに較べると、速力に於て稍々優れては居るが、四隻とはいにかも物足りない、是れには種々事情があつて、ともかくも夫れで決行するといふ事になつた。

——聯合艦隊は二月二十四日旅順港口の閉塞を試みしも其の效未だ完からず敵艦の出入依然たりしを以て東鄕司令長官は再び之を企圖し二十七日韓國南西岸に歸着するや翌日大本營に致電して更に閉塞用船の準備を要求せり大本營にては海軍運送船千代丸、福井丸、彌彥丸及び米山丸の四隻を以て之に供し山本海軍大臣は之が艤裝を吳鎭守府司令長官海軍中將柴山矢八に電訓し爾來當路者を日夜督勵して諸般の準備を整へ逐次艦隊所在地に回航せしめたり云々

これは戰史の一節である。

廣瀨少佐は福井丸に指揮官として、再び其の雄膽を現はさんとした。少佐は以前に『正氣歌』一篇を抒して、自ら座右の銘に擬して居た。出發する前福井丸の前機關長石田といふ人の請に任かせて、ハンカチーフに書いて與へたのであるが、その正氣歌といふのは左の通り

正　氣　歌

死生有命不足論　鞠躬唯應酬至尊　奮躍赴難不辭死　慷慨就義日本魂

一世義烈赤穂里　三代忠勇楠子門　憂憤投身薩摩海　慷慨就義小塚原
或爲芳野廟前壁　遺烈千年見鏃痕　或爲菅家筑紫月　祠存忠勇不知寃
可見正氣滿乾坤　一氣磅礴萬古存　嗚呼正氣畢竟在誠字　嗷々何必要多言
誠哉誠哉斃不己　七生人間報國恩

指揮福井丸　再赴旅順閉塞　錄舊作

贈千石田機關長

廣瀬武夫

慷慨激越、滿腔の忠憤を吐瀉して遂に一誠字に歸到する、文天祥正氣の歌と併び馳せて光を爭ふに足り、朗吟一過儒夫をして起たしむるものがあるではないか、福井丸の前船長伊藤氏は其の傍に在つて、少佐がこれを揮灑するのを見て、覺えず眉は昂がり氣は激し、案を擊つて少佐の萬歳を叫び、

『私はこの福井丸を家として起臥すること十數年です。今や馬齡已に六十を越えました。思へば私も船も共に老い朽ちて仕舞ひました。然るに此老ぼれの福井丸は忠勇の

皆さんを載せて、天晴なる最期を遂げんとして居ります。私たるもの獨り此船と永く別れをするに忍びませぬ。どうぞ一生の御願ひですから、私も一緒にお連れ下さつて何かの御用を仰せ付けて戴きたい。これでも老軀を君國に捧げて此船と共に沈むならせめてもの心遣りであります。』

と、ハラ〳〵と涙を流し、熱心は其の面に現はれて見えた。

實に是れ壯烈な心底で、白髮を染めたる齊藤實盛の槩があるではないか。けれど老船長の熱誠なる願ひは許されなかつた。何故かならば、籍を海軍に列して現に戰場に出て居る幾多の壯士すらも、其の大部分は選拔に洩れて居るやうな有樣だからである老船長のこの一言には流石の少佐もひどく感動して、互ひに相擁いて悲壯の涙を換はしたのである。漸やく諭し宥めて思ひ止まらせたが、少佐のこの正氣歌に感奮した人は豈夫れ老船長一人のみであらうか、詩中眞に忠誠の熱の籠つた所に何人と雖も感奮せしめられぬものはないのである。實に廣瀬少佐が軍神と呼ばれるのは決して溢美ではないのである。

一二　水道目蒐けて

少佐は先づ隊員全部を上甲板に整列させた上、閉塞に關する大體の計畫、之を遂行するに就ての各自の決心等を話して聞かせた。

『今回は前回に比し、敵の警戒も一層嚴重になつて居るに相違ないと思ふ。が、決して躊躇することはない。我々は唯天佑を確信して猛進すべきである。又、第一回には自分の船は不幸にして尖岩に突擊した爲めに、已むを得ず其處に沈沒せしめたものゝ、此度は場合によつたら水道に闖入する覺悟であるから、一同も其の決心でやらねばならぬ。』

といふ一節があつた。

此挨拶が濟むか否や、準備の第一着手として兵員の部署を決定し、それから彼の有名なる杉野上等兵曹は愈々願ひ叶ふて少佐の片腕となつて同じく出かけることゝなつて居た、兵曹の任務は船橋に在つて指揮官を輔佐する役目ではあるが、愈々港口に突

進と云ふときには、船首の錨投下と船首塗具庫に仕掛けたる六吋砲彈に點火すべき配置になつて居た。

斯くて閉塞隊は六十五人の志士を分乘せしめ、碎石を滿載して出發した。白雲、霞、朝潮、曉、雷、曙、朧、電、薄雲、漣、東雲の八隻から成る驅逐艦隊、雁外五隻から成る水雷艇隊はこれが掩護に當つた。此等の諸艦艇は第一回の閉塞行動に參加したものである。それから閉塞隊は此等艦隊の掩護の下に旅順口の港外に達し敵の探照燈閃射の間を潛つて直進し、港口を距る約二海里の邊に達した頃、遂に敵の發見する所となつた。

是より曩き廣瀨少佐は、夜十時一行が愈々閉塞配置に就くに當り、サルーンの右舷前の方に在る自分の寢室に入つて、素裸になつて冷水摩擦を行つた上、古武士が出陣に際しての嗜みも斯うであらうと思はるゝばかり、軍帽に香を炷きこめ、天佑を連呼しつゝ勇躍しつゝ船橋に上つた。指揮官附杉野上等兵曹は是れも亦同じストーブの前で伊勢大神宮に供へたといふ神饌を戴いた。

又もや日本の閉塞隊來れりと見るや、兩岸の要塞及び哨艇から打出す砲彈は宛ら驟雨の如く、急霰の如くであつたけれども、猛士既に一死を期して居る事とて、誓つて敵港を閉塞せずんば己まぬといふ決心を以て、四隻は相並んで港口水道に闖入し第一の千代丸は黃金山の西側に於て、海岸近く錨を卸して自ら爆發沈沒した。次いで廣瀨少佐の乘り組んだる第二の福井丸は、千代丸の左側を過ぎつて少しく前方に進み、少佐は特に剛毅沈勇なる杉野上等兵曹に、爆發藥點火の任を命じ、上等兵曹は命に應じ直ちに艇艙に下つた。

福井丸が此處に錨を卸ろすと同時に、船橋からは後進全速の命令があつて、程なく又停止續いて「總員上へ」の令があつた。機關室では夫れ〳〵豫定の作業を濟ました上、急いで甲板に昇つて來だした。第一回の時には投錨するまでが既に業に非常な難戰苦鬪であつたが、今回は全く其の反對で、何の苦もなく行はれたやうだ。

「總員上へ――」の號令で一先づ甲板へ出て來た。一番最後の兵員が甲板に出たと思ふ頃、轟然たる響と共に飛沫がさッとやつて來て、附近は時ならぬ雨を降らした規約

によると爆發藥に點火するのは一同が總て後甲板に集まつてからの筈である、それが如何した拍子か總員がやつと上甲板に出るか出ないうちに、最う爆發して了つてゐるのだ、一同は先づ其れに驚いた。沈着剛膽な杉野上等兵曹の任務であるから、何等かの理由がなければそれほど急速なことはやらない筈である。敵の探照燈は三方から照らし合つて頭の頂邊でグル〳〵廻はつて居るさへ既に厭やな心地のせらるゝのに、況して港口附近一面の砲臺堡壘からは、宛ら萬雷が一時に吠ゆるが如き轟々殷々の音、其の數又幾十幾百か數知れぬ砲彈銃丸が、此方を目蒐けて續けさまにやつて來るのであるから、全く氣が氣でない。が、好い鹽梅に端艇は卸りたので、先づ安心と、急いで再び元の場所に就き、指揮官廣瀨少佐外全部は前の方に居つて、立働いた兵員等の消息はどうであらうかと、皆揃ふのを待つて居た。少佐はやをら端舟に乘り移るときに、

『おい〳〵、皆集まつたか番號を唱へて見よ。大きな聲で〳〵。』

と命じた。

一同は命ぜらるゝ儘に端艇にあるものから、めい〳〵番號を唱へると、他の者は殘らず居るが、獨り杉野上等兵曹のみは未だ來合はして居ない。で、指揮官は勿論のこと上等兵曹と同じく前甲板の配置に就いて立働いた甲某乙某等は、大聲を揚げて、杉野〳〵、上等兵曹〳〵と呼ばりつゝ、二度も三度も上甲板を捜し廻つたのであるが、更に應答が無いばかりか、敵の砲火は愈々倍々劇しくなるので、一行の運命は刻一刻急に迫つて來るのみである。それにも構はず少佐は杉野！杉野！と連呼して尙ほも捜索を打ち續けて居る。

一三　杉野は何處

幾ら捜してもウンともスンとも音沙汰が無いので、一行の間には早くも杉野上等兵曹の生死に就いて危惧の念を懷き始めた。これは實に無理のないことで、杉野兵曹と同じ前甲板に働いて居た兵員等に訊いて見ても、誰一人確かに知つて居るものが無いのであるから、果して戰死を遂げたものであるか否かは此際卽決する譯には行かなか

つたのである。これが白晝の事であるなら何の苦もなく捜し當てることも出來るが、夜中も夜中かういふ非常の場合の事であるから、よしんば探照燈で照らされて居るとはいふものゝ、なか〳〵容易に判るものでは無い。そこで其の時色々の說があつた、上等兵曹は敵の水雷が本船の船首に命中した時に、其の爆發の餘波で彈ね飛ばされたに違ひないといふで、是には頗る有力な根據があつた。しかし、實際見た譯で無いからそれで直ちに戰死と定めるわけにも行かぬ。といつてかれこれ時間を延ばすことも出來ぬ、船の方はなるべく速かに爆發するの必要があるのに杉野の所在は幾ら捜しても判らないので、廣瀨少佐に於ても此時ばかりは、如何に煩悶したか心中察するに餘りある。愚圖々々して居ては第一回の如く電纜などを破壞せられぬとも限らぬし、といつて自分の股肱と頼み切つて居る杉野の生死が未だ判然せぬのに、さうぽん〳〵船を爆破して了ふわけにも無論行かない。

果然少佐は雨と飛び來る敵彈を物ともせず、又も杉野々々〳〵と叫んで前甲板を指して捜しに行つた。他の者は豫定の如く本船の左舷後部やら端艇やらに集まつて各々其の

配置に就いた儘最後の命令の下るのを待つて居るのである。少佐は何處を搜して居るのか中々元の位置に還つて來ぬ、一同は又しても心配が殖えた、今度は少佐の身の上の事だ、で、船の周圍はと見れば全く黑闇々といふ有樣、何處が港口であるか退却する方角に當つて居るのか更に判らない。唯福井丸の左舷船首に投錨して居る一閉塞船のゐることだけはあり〳〵と見える。其時は有馬中佐の千代丸であらうと思はれたが後に至つてこれは千代丸ではなく彌彦丸であつたことがわかつた。敵は之に對して例の猛射を沿せかけて居るのであつたが、暫くすると其の探照燈をぐる〳〵と旋回して我が福井丸の頂邊越しに沖の方を照らし始めたので、スハ又何事が起つたのかと一同思はず其の方を見渡せば、勇ましや後續閉塞船の一つなる彌彦丸とは思はるゝが、簇る探照燈の光を冒し、雨と飛び交ふ彈丸を物ともせず、斷々乎として港口目蒐けて驀進し來るのであつた。眼前に此の壯觀を看ては到底萬歲を叫ばずには居られぬ。福井丸の一行は今眞に是れ危機一髮の境に身を置いて居るといふことは打忘れ、殆んど狂氣の如く拍手して萬歲々々を叫んだのである。彼の閉塞船は最初福井丸の艦に衝突し

はせぬかと思はるゝほど猛進して來たのであるが凡そ三四十米ばかり接近し來たと思ふ頃急に取舵をやつて、港口の左側に向つて横つ倒しに駛走した、其のお手際の立派なことは二十年後の今日もまだあり〳〵と見て居るやうだ。(是れは實見者の談)此閉塞船は彌彦丸だと其のときは考へられたが、其の實正木大尉の米山丸であつたことが後に知れた。とにかくさういふ鮮やかなお手際を見せ付けられたので又もや萬歲を叫ぶといふ有樣、その聲裡に益々勇を得たものかその閉塞船は瞬く間に影を沒して、跡には般々轟々の筒の音ばかりが獨り天地を壓して居た。

『杉野はまだ來ないッ、さてはいよ〳〵戰死れたのかも知れぬ！』

廣瀨少佐は散々搜し廻はつて、遂に再び元の所に引き還へしたとき、憮然として斯くいつた。實際に於ては最早搜さうにも方法が無かつたのであることは、杉野と同じ前甲板で立働いて居た兵員等でさへ、其の消息に就いては全く知らないと云ふのでも推察されるのである。指揮官は勿論の事一行の總てが、左舷後部の屯所にあつて、思案投首の體で居ると、足許に何だかビショ〳〵水が浸いて來たやうな氣がする、手探り

で探ぐつてみると果してさうだ、いやこれは大變と機關長の栗田大機關士が、其趣を指揮官に報告した。少佐も最早殘念ではあるが、斯くなる上は力及ばず涙を呑んで杉野を捜すことを斷念した。

廣瀬中佐沈沒せんとする船中三度杉野兵曹を索す

そこで飯牟禮兵曹以下各其の部署にあるものに對し本船を爆破することを命じそれも亦豫定の如く行はれ、一同は端艇に乗り移つて最後の爆破を見届け指揮官は以前の通り艇の後部に立ち、皆は櫓を下ろした。

嗚呼杉野兵曹は敵の水雷が命中したときに火藥は點火を待たずして爆發し、杉野は

壯烈極まる戰死を遂げて姿も留めずなつたのである。斯くとは知らぬ少佐は一旦乗つたる端艇より再び元の沈沒船に引返へし、せめて死骸なりともとて隅々まで捜し索めたけれども見當らないので、復端艇に還つて來て更に船内に走つて其れを捜した。三度までも沈沒せんとする船内を捜したけれども遂に杉野は居なかつた。少佐が最後に端艇に乗り込んだ時には、船は殆んど沈み盡して、第四に沈んだ米山丸の如きも、僅かに船首を現出するのみで、他船の勇士は既に已に遠く漕ぎ去つて見えなかつた。殘るは福井丸の勇士一行のみであつたから、腕の限り漕いで〳〵漕ぎまくりつゝ、沖合に出やうとした。

『杉野を失つたは殘念だ！』

少佐は端舟内の僅かな時間にもこれを繰り返へして言た。折柄敵は探照燈を以て照らし、唯一隻漕ぎ去りつゝある福井丸の端舟目がけて大砲小銃の數を盡し雨霰と注ぎかけ、櫂にあたつてこれを打ち碎き、已むなく豫備櫂を出して力の限り漕いで行くその間にも勇士はポツ〳〵擊たれて重傷を負ふもの、戰死する者が出來狹い端艇内は悲慘

な場面となつた。

『戰死は己むを得ないが、杉野は惜しいことをした！』

と少佐はまたこれを呼んだ。

一四　嗚呼軍神の最期（其一）

福井丸乘員十七名を乘せた端艇が、限なき遺恨を留めて、力なく…本船の左舷から港口の右側即ち黃金山下の海岸に沿ふて漕ぎ出したのは、二十七日の午前四時過ぎであつた。海正面の敵要塞は三基の探照燈と相呼應して、無性矢鱈に打出すのでそれでさへ天地も摧けさうである。一行は此の間を潛行して旨く背進の目的を達成しなければならぬのであつた。

指揮官廣瀨少佐は商人服の外套の上に制規の引廻はしを羽織つて、端艇の右舷最後部に坐し、荐りに、

『睪丸に觸つて見たか。』

と繰り返へしつゝ志氣を鼓舞するのである。飯牟禮兵曹は恰度少佐の左側にあつて專心舵手の任務に服して居る。機關長栗田大機關士等は其の左に並んで壽司詰の樣になつて居る、其他は何れも橈手としての任務に服して渾身の力を出して漕いで居るのである。

斯くて一同は本船を後に見て數分間漕ぎ出すと、恰度左舷正横に方つて一隻の汽船が横はつて居るのを發見した。ぼつとしてはつきりとはわからぬが、恰好から言ふとどうやら仲間の閉塞船に紛れもない、指揮官はこれを見ててつきり之を米山丸と誤認したものらしく、さも殘念千萬であるかの如き口調で、

『噫！　またしても正木の船は此處でやられたか！』

と幾度か繰り返へした。しかしこれは米山丸ではなくて却つて先任指揮官有馬中佐の千代丸であつたことが後で判つたのであるが、此時はどうしても米山丸としか思へなかつた。

とにかく端舟は件の汽船になるべく接近して、前の通り橈漕ぎを續けた。指揮官が

なに故に第一回のときと反對の側に端舟を行らうとしたかは忖度の限りではないが、或は潮流などを旨く利用せんが爲めに左様したのであるかも知れぬ。が、運の惡いことには一行が件の汽船の船尾をかはるが否や忽ち敵の發見する所となつた。それも遠方から發見されたのではなく直ぐ頭の頂邊から探照燈を浴せかけられたのであるから迚も堪まつたもので無い。此探照燈こそは實に黄金山高砲臺と同じく低砲臺との中間にある、所謂搜索電燈なのであつた。もうかうなつては潛行も絲瓜もあつたものでない。それは指揮官も覺悟觀念を極めてかゝつたのであるが、それでも何とかして踪跡を晦ましさうと曳々聲をかけては一生懸命に漕いだ。が、生憎此時は上げ潮だつたので端舟はなか〳〵いふことをきかない。之に反して敵の探照には最も好都合であつたらしく、此端舟が一寸進めば一寸、一尺進めば一尺といふ風に何處までも跟いて來るので、愈々敵の目標になつて了つたなと觀念した。

果然端舟の前後左右は瞬く間に敵の大砲や機關砲や小銃彈の亂射の爲めに、全く大釜が煮えくり返つて居るかの如き觀を呈した。一行の運命は風前の燈火も啻ならぬこ

とゝなつた。先づ第一に小池といふ二等機關兵が戰死して了ふ、それから一分も經たぬ間に恐るべき悲劇が出來したのである。

小池機關兵が戰死したときに誰やらが端舟の中央邊で、

『小池が戰死れました！』

と叫ぶものがあつた。指揮官は此の報に接するや勵聲一番、

『宜しい分つたから騷ぐな〳〵、皆能く俺の顏を見て確乎漕げッ。』

と繰り返へし叫んだ。

菅波兵曹が重傷、栗田機關長以下負傷するもの續出し、小池は三番の橈手をして居たのであるが、敵彈の一發に無慙や胴から殆んど眞二つになつて、橈を握つたまゝ殪れて了つた。

『おう、杉野は惜しい事をした。』

指揮官の殘念さうな聲が、今が今まで聞えて居たのに、それがふッつりと聞えぬやうになつた、たしか小池機關兵が戰死した直ぐ後のこと、『皆能く俺の顏を見て確乎漕げ

ッ。』と鼓舞した聲はたしかに耳に殘つて居る、間髪を容れず後部兵員の頭上から恐ろしい飛沫があつて、山本といふ二等機關兵の額には鮮血一面、それでも彼は平氣で橈を漕いで居る。恰も其のとき、端舟の中央部邊から、

『水雷長が戰死れました。』

といふ聲が響き渡つた。水雷長とは軍艦朝日の水雷長少佐廣瀨武夫其の人である。

もうこれから先きは云ふに忍びない。

水雷長が戰死したといふ聲は、一同を愕然たらしめた。今更の如く吃驚して今が今まで坐つて居た指揮官の場所を見たが、其處には指揮官の姿はなかつた。指揮官と相並んで操舵に從事して居た飯牟禮兵曹が、どうして又少佐が負傷した事を最先きに知らなかつたであらうか。抑々又何故『橈上げ——後へ』を令して十分指揮官の屍を搜さなかつたらう、これは一寸不思議なやうであるが、事實は少しも不思議ではない所謂鹿を追ふ獵夫は山を見ずとかいふ通り、艇尾卽ち少佐の傍に居たものは、何れも血眼になつて前程ばかりを見て居るのであるから、隣の者にどんなことが起らうとも

容易に氣の着くもので無い。これは事實無理からぬ事で、只今も最先きに少佐の戰死を叫んだものは端舟の中央部邊に在つて、比較的多く艇尾の方を見るの機會を有する橈手其の人であつたのを見れば、この間の消息を推知することが出來るのである。

少佐の肉漿や何んぞの爲めに四邊の乘員の上衣は申すに及ばず、殊に栗田大機關士の右半面から帽子と來ては、牛肉のタヽキか何かを打つ付けられた樣になつて居たにも氣着かず、却つて大機關士の側の山本といふ兵が額に迸つた鮮血を以て、矢張り當人の負傷だと速了して少しも怪まなかつたなどは、實に實戰の經驗を有する人なら容易に首肯の出來ることだと思ふ。

少佐の戰死と共に、一時艇中は殆んど名狀すべからざる混亂に陷つたのである。

一五　嗚呼軍神の最期（其二）

越えて數日、四月二日發行の「關東報」は記して曰く、

——アレキセーエフは先月三十一日旅順に到着して、先づ「レトウヰザン」及び「レ

ルニー」の二艦を檢じ、四月一日海岸及び陸上の防禦力を檢閲して、午後「バルラダ」及び水雷艇を檢じ、二日探海燈臺に到りて褒賞を要塞砲兵に頒ち、踵いで赤十字社浮病院を訪ひしが、此間沈沒せる福井丸の船首に當りて、頭部に砲彈の大傷を被り、袖に金線を縫へる軍服を穿ち、望遠鏡を懸け、短劍を佩びたる日本海軍將校の死體浮べるを發見し、四月一日、旅順に於て爲めに葬儀を營み、將校水夫柩に從ひ、且つ樂隊をも附したり——

吁嗟其れこそ軍神指揮官の遺體でなくて何であらう。旅順港頭而かも福井丸の近邊に浮びたる日本海軍將校の死屍、其れが死後の廣瀬中佐でなくて誰あらう。吁嗟中佐の英魂毅魄は死んでも尙ほ福井丸を離れることが出來なかつたのであらうか。抑々中佐の神身を以て敵の港口を封鎖しようとしたのか。敵境に戰死し死して敵將の爲めに禮を以て葬られたとは、洵に軍神の死たるに恥ぢないではないか。

明治三十七年三月二十七日午前四時三十分、これは實に軍神の死した時と日とである。此日少佐は海軍中佐に進められ、金鵄勳章功三級を授けられ、且つ正四位勳四等

に叙せられた。

「關東報」の記事に又曰はく、

——虎尾半島に近く沈沒せる閉塞船の船橋に、露語にて左の題詞を記せる者あり

『尊敬すべき露國海軍々人諸君、請ふ余が名を記せ。余は日本の海軍少佐廣瀬武夫なり。既に二回爰に來り、其の第一回は報國丸を以てせり、更に又幾度か來らんとす。』

と。——

菅沼二等信號兵曹の語る所によれば、彼は中佐の前に居たが、二町ばかりも漕ぎ出したと思ふ頃、何物か眼に遮ぎつたと見る間に、或一水兵は頭上より潮水を浴びせられた如く感じ、顧みれば今迄勵聲部下を鼓舞して居た廣瀬中佐が、忽ち言葉は絶えて手を低れ、俯いたかと見る程もなく、そのまゝ海洋に顚墜して、影をも留めずなつたので、愕然我が身をふりかへつてみると、身に浴びたのは潮水ではなくて是れこそ中佐が忠義の血潮であつて、形見とも見るものは、我外套に附着せる僅かに二錢銅貨大

の肉片と鮮血斑々たる地圖を遺したのみであつた。

中佐の戰死を知ると共に端舟内は非常に混雜を來したのである、といふのは死傷者は續々出て來るし、おまけに段々櫓を折られたり、クラッチが折れたりするので、櫓を取り換へるやら、「クラッチ」が折れた爲めに一時漕ぐことが出來なかつたり、端舟の運用が刻一刻困難になつて來たからである。

次いで栗田大機關士、菅沼兵曹も亦負傷し、菅沼は掩護艦「霞」に搔き揚げらるゝや、高く萬歳を叫んで息は絶えた。

二十七日の朝掩護艦「霞」に收容せられ、同艦は全速力を以て集合點に歸へり、福井丸の勇士を收容して來たと報告した。艦隊からは帽を振り歡呼を以て之を迎へ、

『指揮官は無事なりや？』

の信號に接した。

けれど、「霞」はこれに應ふべき辭を知らなかつた。否知らないのではない、返信するに忍びなかつた。實に他の決死隊員を乘せた驅逐艦は何れも威風堂々たるものがあ

つたに引き換へ「霞」のみ悄然として、音をも立てず指揮官中佐の姿も見えぬのだ、何れもこんどこそはたゞではないと見て居ると、

廣瀨中佐、杉野上等兵曹は名譽の戰死、菅沼二等信號兵曹は重傷といふことがわかつたので、今更の如く戎衣の袖を絞るものもあれば、惜しい事をしたと叫ぶものもある、畜生露助めッ、復讐だぞッと呼號する者もあつた。何れ劣らぬ猛將勇士が、腕を扼し眦を裂いて悲憤慷慨する有樣は鬼神も爲めに哭し天地も爲めに憂ふるが如く見えたのである。

七生報國一死志堅　再期成効　含笑上船

とは是れ軍神廣瀨中佐が第二回旅順口閉塞の大任を帶び、去ぬる三月二十日決死隊の人々と共に、福井丸に搭乘せんとする首途に、朗々として口吟んだ金玉の句ではないか。しかも此笑を含んで船に上つた壯烈無双の軍神中佐は、あはれ忽ちにして一片の肉塊と化し、中佐は淋漓たる血沫に濡れた軍服を纏ひし勇士に守護せられ艦内に持歸へられた。是に於てか海軍省では是れを本國に携帶することを名和海軍大佐に命ぜ

られた。依つて大佐は命を奉じて山城丸に乘船し、將に根據地を出發せんとするや、我が艦艇の全員は此名譽ある戰死者の遺物を送るべく、皆甲板上に整列し、樂隊は「哀しみの極」を奏して悲壯沈痛の光景裡にこれを見送り、船は徐々として纜を解いたが、どうした事か俄かに山城丸の機關部に故障を生じ、急に船は遲々として進まなくなつた。中佐が生前水雷長として搭乘して居つた軍艦朝日の前に來るや、速力は愈々鈍く、中佐の勇魂が恰も同艦との袂別を惜むが如く思へるので、艦員一同思はず涙を浮べ、漸くにして山城丸は出帆することを得たといふことである。而して名和大佐が携帶せし軍神の遺物といふのは、中佐が天晴の最後を遂げたとき、其の腦味噌に染んだ水兵の衣服と、記念の望遠鏡及び遺書二通であつた肉塊はこれを朝日艦長山田大佐がアルコール漬として兄廣瀨大佐に送つた、望遠鏡は長さ約一尺五寸で、中佐が第一回の閉塞隊出發の際、朱漆にて『記念、武夫、六郎兄』の文字を記し、中佐が多年敬慕せる八代淺間艦長に贈つたもので、後中佐が第一回の活動に偉功を奏して恙なく歸つたので、大佐は更に記念の朱書して中佐に返却したが、第二回の閉塞隊出發に際し

中佐は再び朱書して是を大佐に贈つたものだといつて居る。

一六　死後の光榮

中佐の遺物を搭載せる山城丸は、海上恙なく四月一日午後九時佐世保港に到着し翌二日の午後二時三十分上長官用短艇にて同鎭守府港口の埠頭に運ばれた。時に鮫島司令長官、村田要塞司令官を始めとして、陸海軍の將校百餘名、及び儀伏兵三中隊と海兵團水兵やら官公吏、新聞記者一同は各々喪服を着て極めて靜粛に出迎へた。而して中依の遺物は例の名和大佐と梶少佐との二人がこれを捧げ、黑い布に包んで彈藥箱に安置し、軍艦旗を以て之を蔽ひ、名和大佐と梶少佐とは砲車の兩側に立つて軍樂隊の悲壯なる奏樂聲裡に、騎馬憲兵これに先驅し、樂隊、儀伏隊、遺物の順序を以て出發し、鮫島司令長官以下隨從し、佐世保停車場に向つた。時に同地に於ける各學校生徒職員等は、又此名譽ある戰死者を送らんが爲めに、鎭守府表門道路の兩側に整列し、山なす市民は市街の兩側に立つて肅然としてこれを見送つた。軈て午後三時三

と感極まつて號泣したには、流石少佐の夫人も何と慰めてよいやら實に見るも氣の毒な程であつた。

中佐の靈柩が大阪驛に着いたときの事であつた。こゝに不思議にも眼を泣き膨らして聲をもあげ得ずしく〳〵泣いてこれを迎送する一人の婦人があつた。見ると其の風體は別に賤しくもないから、何か仔細があるに相違ないと、早くも眼を着けた機敏なる某新聞社員は名刺を通じて彼の婦人にわけを問ふたところが、

『わたくしは西區江戸堀南通り一丁目旅人宿竹の家の主婦で川村たけと申すもので御座います。八九年前今回名譽の戰死をなされた中佐様が、大阪へ御出なすつたとき、手前の家にお泊まり下すつた御縁によつて、其の後は大阪へ御み足をお入れなさる毎に必ず手前の家に御宿りになりました。が、今回は思ひがけもなく中佐様の勇ましきお働き振りやら又俄かに御戰死なすつたといふ噂が傳はつたもんですから、せめて御遺骸が停車場をお通り過ぎになるときお迎へしお送りなりとせいでは相濟まぬ仕儀と存じましたが、只新聞ではこの驛をお通り遊ばすといふことはわかりまして御座いま

すけれど、まだ時刻がよくわからないもんですから、昨晩から停車場へ參りましてはその時間を聞き合せまして、いよ〳〵今日お通りだと聞いてはとても時間なんかはあてにはなりませんので、早朝からプラットホームに出て居りまして、上りの列車の參ります度びに、さうではないかと心を碎いて居りました。いよ〳〵御遺骸を載せた列車がかうして着いて見ますと、先だつものは涙でこの通り皆様の目障りを致しまして相濟みませぬ。』

といつて又よゝと泣き沈んだ。

實に心のない人から見たら此婦人の爲すことは一の狂態とも見えるであらう。が、これも中佐の忠烈の然らしむる所で、決して狂態でも何でもなかつたのである。中佐が今回の戰死については知つて居るものも知らない者も、苟も一片の同情のあるものなら、萬國の有ゆる人種が皆號泣して中佐が逝去を悲しまずばなるまい。

而して五月十三日遺骸は青山齋場高臺に埋葬せられ、軍神中佐は國家の守護神として靜かなる眠りに就き給ふた。

佐中瀬廣中佐はるな大の箱小持捧せる士兵列前員全隊先決組乗丸井福
の肉片小なるは杉野兵曹長の遺髪簀巻は重傷者栗田大機関士

十分遺物は停車場に到着し、同五十分借切列車を以て徐ろに東京に向つた。これは廣瀬中佐の戰死は鎮守府側の將校は勿論、市民に感動を與ふること著しく、戸々弔旗を掲げて哀悼の意を表したのであるが、當時海軍病院に在つて治療中であつた松村海軍大尉（この人は最初の閉塞隊の指揮官として廣瀬中佐の行く處に行く筈だつたが二月九日の海戰に負傷して、其れが爲めに中佐が報國丸に乗つて行くことになつた、因緣を有する人である）は、萬感交々臻り空しく病床に安臥しては居られなくなつて、俄かに飛び

起つて正裝し徒歩で跳をひきつゝ海軍橋まで隨行し、其處から腕車に乗つて停車場に見送つたさうである。これを見ても中佐の戰死が如何に軍人に一大感動を與へたかを知ることが出來る。又鎮守府の埠頭に出迎へた兵士の中では、感極まつて覺えず落涙したものが數名あつた。見る者皆爲めに涙潸然として禁じ得なかつたのである。

斯くて門司に着し下關に上陸し廣島を過ぎ、大阪を經て新橋に着いた。沿道各驛に於ては何れも故中佐の鬼神の如き忠勇義烈に感泣し迎送して遺靈を拜するもの引きも切らず、遂に五月十三日を以て盛大なる葬儀は東京に於て擧げられた。神宮奉齋會長村田主禮氏は誄詞を讀み上げたが、沈着の音吐楚々として人を動かし、中佐が最期の事に及ぶや、滿場寂として聲なく、嗚咽の聲のみが高かつた。殊に杉野兵曹長の母堂は、傍らなる小笠原少佐夫人に向ひ、

『今日の御佛は妾の伜孫七の姿が見えぬとて、三度迄も御捜しくだされたばつかりにかう云ふ事になりました。其の優しい御心には何と申しても御禮の申しやうが御座りませぬ。』

と感極まつて號泣したには、流石少佐の夫人も何と慰めてよいやら實に見るも氣の毒な程であつた。

中佐の靈柩が大阪驛に着いたときの事であつた。こゝに不思議にも眼を泣き膨らして聲をもあげ得ずしく〳〵泣いてこれを迎送する一人の婦人があつた。見ると其の風體は別に賤しくもないから、何か仔細があるに相違ないと、早くも眼を着けた機敏なる某新聞社員は名刺を通じて彼の婦人にわけを問ふたところが、

『わたくしは西區江戸堀南通り一丁目旅人宿竹の家の主婦で川村たけと申すもので御座います。八九年前今回名譽の戰死をなされた中佐様が、大阪へ御出なすつたとき、手前の家にお泊まり下すつた御縁によつて、其の後は大阪へ御み足をお入れなさる毎に必ず手前の家に御宿りになりました。が、今回は思ひがけもなく中佐様の勇ましきお働き振りやら又俄かに御戰死なすつたといふ噂が傳はつたもんですから、せめて御遺骸が停車場をお通り過ぎになるときお迎へしお送りなりとせいでは相濟まぬ仕儀と存じましたが、只新聞ではこの驛をお通り遊ばすといふことはわかりまして御座いま

すけれど、まだ時刻がよくわからないもんですから、昨晩から停車場へ參りましては其の時間を聞き合せまして、いよ〳〵今日お通りだと聞いてはとても時間なんかはあてにはなりませんので、早朝からプラットホームに出て居りまして、上りの列車の參ります度びに、さうではないかと心を碎いて居りました。いよ〳〵御遺骸を載せた列車がかうして着いて見ますと、先だつものは涙でこの通り皆様の目障りを致しまして相濟みませぬ。』

といつて又よゝと泣き沈んだ。

實に心のない人から見たら此婦人の爲すことは一の狂態とも見えるであらう。が、これも中佐の忠烈の然らしむる所で、決して狂態でも何でもなかつたのである。中佐が今回の戰死については知つて居るものも知らない者も、苟も一片の同情のあるものなら、萬國の有ゆる人種が皆號泣して中佐が逝去を悲しまずばなるまい。

而して五月十三日遺骸は青山齋場高臺に埋葬せられ、軍神中佐は國家の守護神として靜かなる眠りに就き給ふた。

あゝ仁平山

一　いくさ運

日露戰役に於ける仁平中佐の戰功が拔群であつたことは、當時を知る者の何人でも之を認める所ではあるが、首山堡の攻擊に於ける橘中佐、旅順閉塞隊に於ける廣瀨中佐と並び稱せらるゝの武功を有しながら、比較的仁平中佐の名の知れないのは誠に遺憾である。橘廣瀨兩中佐は軍神として萬人の齊しく景仰する所であるからそれは既に本書に於て述べた、が仁平中佐も亦其の至誠と武功とに於ては同じく軍神として少しも恥づかしくないので、玆に本書の內容に兩中佐と並べて特に抒述する所以である。中佐が如何に赫々たる武功を樹て、一隊の長として能く其任務を盡し且つ部下の愛敬を受けたかは戰史を繙く者の熟知する所である、假令軍神としての榮譽はなくとも中佐の偉業は炳乎として靑史が之れを照して居る。

仁平大隊の苦戰に依つて占領せられた楊城塞の高地に、特に「仁平山」といふ名稱を附けられた一事に徵して見ても、如何に中佐を中心として部下の大隊が苦戰したか

じ窺はれるのである。中佐は獨り「いくさ運」の强かつたばかりでなく、其の平素の覺悟と修養とが、斯の如き光輝ある結果を齎らした事と信じて疑はない。

中佐の名は宣旬といひ、茨城縣眞壁郡河間村の生れで、初め敎導團に入り、それから士官學校に入つた人である。幼少の時から漢學で育てられたので、その頭腦は近來流行のハイカラではなく、全然儒敎で鍛へ上げた堅實なる思想を以て支配されて居た。從つて毫も輕佻浮薄な趣きはなく、何處までも質實剛健なる武人的氣風を以て一貫して居た。

人となり極めて淡白で、自ら奉ずること甚だ薄く、人に對すること至つて厚かつた。每月受くる俸給なども父兄の爲めや友人の爲めに使ひ盡して殆んど餘す所のないのが常だつた。此優しき美はしき性格は、隊長としては部下に對する深切となり部下の中佐に對すること恰も嚴父に對するが如きものがあつた。酒は嫌ひではなかつたけれども、どちらかと云へば甘黨であつたが、戰役間甘い物などを送つて來ると、直ちに左右の者や部下の者と與に賞味するのを唯一の樂しみとして居た。それが故らに、

お世辭でなく、其の言語、其の動作は眞に誠心から出づるのであるから何れも心から悅服したのである。中佐が友情に敦く、部下を愛するのは全く其の天性であつたのである。

中佐は士官學校在學中から支那問題に着目し、支那語の研究を始めて頗る熱心であつた。中尉の時多年の素志たりし支那派遣を命ぜられ、在留すること約三年、偶々明治二十七八年の日清戰爭が起つたので歸朝し、戰役中支那に關する事柄に就いて我が策戰を幇けたる事頗る大なるものがあつた。

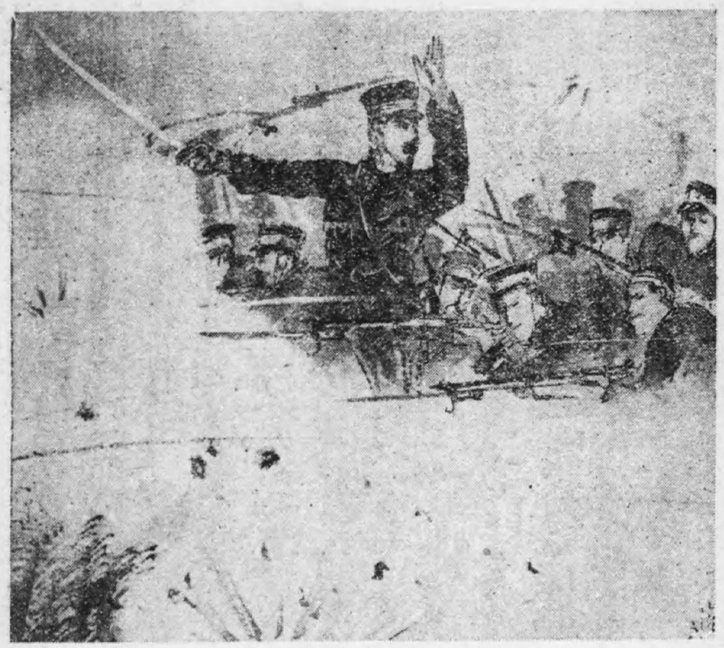
日清戰役の後、更に南支那に出張して調査する所があつた。最後に滿洲に赴き營口附近に在つて諸般の調査を爲し、日露戰役に就いても亦貢獻する所尠少でなかつた。兎に角中佐が支那に關する智識は頗る豐富で、支那通としては第一指を屈すべき人であつた。唯中佐は多く隊附として地方に在り、中央部に立つことがなかつた爲めに、支那に對する抱負を發揮するの機會を得なかつたことは、彼に取つては深甚の遺憾であつたに相違ないが、併し中佐は是れに就いても毫も不平らしいことを口にせず

自ら抑遜して只管自己の本分を守り、孜々として修養を勵んだのである。

中隊長として近衞歩兵第三聯隊に在つた時の如き、隊務に忠實なるは云ふ迄もなく事に處するには公平無私を旨とし、部下に對しては深切にして而かも雅量があつた。寬嚴宜しきを得たとは眞に中佐の事をいふもので、上下親和し、部下の中佐を見ること眞に骨肉を分けたる嚴父に對するやうであつた。無私無慾にして能く部下を愛し、如何なる危險の際にも從容として事に處するの用意があつた、武骨一遍の人かと云へば能く世態人情にも通じ、常識圓滿で一言にして評すれば、人として最も缺點の少い人であつた。

二　累次の戰功

新發田歩兵第十六聯隊の第一大隊長として、日露戰爭に出征した仁平中佐は、各所の戰鬪に於て勇猛の武者振りを示して「仁平大隊」の名は早く已に人の注目を惹いたのである。夫の鴨綠江、摺鉢山等に於ける中佐の動作は、實に目醒しいものであつ



仁平中佐弾丸雨飛の中を突進

た。當時の戰鬪は頗る激烈で傳令書記に至るまで敵彈に殪れ、戰況轉々悽慘渾沌を極めたのであるが、中佐は奮然として部下大隊を提げ、一齊に　陛下の萬歳を唱へながら、雨と降り注ぐ敵彈の下を驀地に猛進して鬚河を渡り、一氣に敵壘に肉薄したのは實に拔群の働きで、中佐の此の如き働きは軈て第二師團の戰勝に與つて最も力あるものであつた。

此戰から沙河會戰までの各戰鬪に於て、仁平大隊は常に卓越の

動作を示して居る、遼陽戰に於ける激戰地たる黑英臺は實に中佐に屬する岡崎旅團によつて占領せられたのである。中佐は斯くも多くの戰鬪に從事し、其の都度人並優れたる武功を樹て、岡崎旅團に仁平大隊ありとの氣を吐き、萬人の注目を惹き、同旅團が光輝ある成功を擧ぐる毎に中佐の率ゆる步兵第十六聯隊第一大隊の名が、影の形に添ふて居たのは如何に中佐が拔群の忠誠を盡したかゞわかるのである。

明治三十七年十月上旬より起つたる沙河の會戰は、これまで連戰連敗の露軍が歐本國より優勢なる增加兵團を得、其の初めは鐵嶺附近の線に於て日本軍を拒止する豫定だつたものが、此の如き增援を得た爲めに、態度一變して、急に攻勢に出で累次の敗戰を此一擧に雪ぎ、日本軍を黃海や渤海灣に蹴落し、且つ危殆に瀕せる旅順要塞の同胞を救援し、運命を挽回せんと健氣な企圖を起したものであつた。

然るに我が軍は機を失せず、露軍の此企圖を偵知し、止まつて敵の攻擊を待つことなく、進んでこれを擊ち、敵の大軍が渾河左岸地區に集結せざるに先だち、速にこれを擊破せんとし双方前進を起したので、沙河附近に於て半ば遭遇戰的の會戰が開かれ

たのである。ところが露軍は其の大部を我が右翼方面即ち黒木大將の率ゆる第一軍の正面及び右側面に向けて來たので、西方鐵道線路方面は比較的有利に進捗するに反し、我が第一軍は頗る苦戰を極めたのである。

仁平中佐の屬する第二師團は、第一軍の最左翼に位置し、其の左翼には第四軍の第十師團が居つた。第二師團の右翼には近衞師團が居たが、前述の通り敵の大軍は第一軍の右翼方面に殺到するので、勢ひ同軍の行動は右翼に偏して來る、第二師團と近衞師團との中間を遠ざかつて來る、遂には軍總豫備隊が其の間隙を塡めるといふ有樣、左翼第十師團との間隙には滿洲軍の總豫備隊が出るといふ頗るいそがしい戰鬪であつた。

會戰の當初に於ては、仁平中佐の率ゆる歩兵第十六聯隊第一大隊は所屬聯隊を離れ歩兵第二十九聯隊長島田中佐の指揮に屬し、十月十二日夜半三家子出發、同中佐の指揮下に入らんとしたが夜半の事とて稍々到着が遲れたので、午前五時三十分其の部隊を展開し、仁平大隊は左翼第一線となり前進を起し、敵の抵抗を受くることなく、下

燒達溝西方高地に達し、六時三十分頃より敵の砲火猛烈に來り、死傷者を出すやうになつたが、仁平大隊は島田中佐の命により下燒達溝西方高地を占領する爲め前進し、七時過ぎ同高地に達したけれども、東方北方の兩方面から敵の猛火を受けたので暫らく此高地に停止する事とした。

當時八家子附近の谷地は、下燒達溝東北高地からする敵の掃射、蛤碼塘南方鞍部からする敵の猛火、東山口方向からする敵の砲擊とで交通殆んど杜絶の有樣となつて居た。此間仁平大隊は八家子東方高地に在つて上燒達溝東方高地一帶の敵と對戰し、而かも蛤碼塘附近に在る敵の砲兵からひどい縱射を受け、非常なる苦戰に陷つたのである。

三一八二高地

當面の敵は遂に我が猛攻に堪へず午前十一時頃退却を始めたので、各隊は追擊に移つたが、これまで歩兵第二十九聯隊長の指揮に在つた仁平大隊は、下燒達溝東北高地

の敵兵が退却して將に追擊に移らうとしたとき、岡崎旅團長の命令によつて原隊に復歸することゝなり、八家子東北地區に集合した、恰度それが十二日の午前十一時四十分であつた。

歩兵第十六聯隊は、午前七時過ぎ八家子西北一帶の高地を占領してから、楊城塞東方高地の銃火と東山口方面から激烈なる砲火を受け、十一時頃になつて第四軍に屬する後備歩兵第十一旅團が、三塊石山方向から大凹東方に前進し來り、北大山を占領することが出來たけれども、楊城塞東方高地の敵の歩兵、東山口方向の敵の砲兵の猛烈なる射擊を受け、頗る苦戰に陷つて居るのを見たので、一部を以て同旅團の攻擊を援助したが、後に至り此楊城塞の攻略が仁平大隊に如何に苦慘を與へたかは、以下項を逐ふて述べたいと思ふ。

明くれば十月十三日中佐の屬する歩兵第十六聯隊は、砲戰の結果を待ち前進を起さんと準備中にあつたが、午前十一時頃より楊城塞の東北約千米突の高地の敵兵は漸次增加したらしく、高地の斜面を昇つたり降つたりする者著しく多く、正午頃から八

家子東北高地に對する敵の砲擊は非常に激しくなつた。しかし、午後零時半頃になると我が砲火の威力も亦大に發揚せられたと見え、南蛤碼塘南方鞍部附近の敵の砲兵約十六門は其の射線を變更して我が砲兵第三中隊に轉向したので、彼我の砲戰は再び猛烈となつた。

仁平中佐は午後一時頃敵の歩兵約一旅團が楊城塞東北高地の北麓に潛伏して居ることを偵知したので、機を失せず之れを聯隊長谷山大佐に報告した。聯隊長は恐らく敵がこれを以て逆襲するに相違ないと判斷したから、其の第二大隊をして仁平大隊の攻擊に協力することを命じ、八家子に在る第三大隊を仁平大隊の後方に近接させた。

この少し前仁平中佐は、第四軍の最右翼の後備歩兵第十一旅團より、『敵の歩兵約一旅團楊城塞東北約千米の高地北麓に集合す』との通報に接したので、其後搜索を行ふて當時楊城塞東方標高一八二高地上の敵は歩兵約一中隊に過ぎないから、先づ其の高地を占領して其の後方の敵に對し機先を制してやらうと考へ、第二、第三中隊を第一線、第一、第四中隊を第二線とし、砲兵第五中隊の援助を受け、標高一八二高地に

向つて前進を始めた。時に午後二時三十分であつた。

然るに目的とする高地附近は、地形思ひの外に嶮難であつて、敵の火力は激烈を極め、死傷者は續出したのであるが、遂に第三中隊を以て一八二高地の南方凸稜に達して高地上の敵と對戰し、第二中隊も亦同高地に向ひ前進した。尋いで大隊長は第一中隊を第三中隊の右翼に增加して、南蛤碼塘南方鞍部附近の敵の砲兵を射擊させ、又第四中隊を第二中隊の右翼に展開して共に標高一八二高地及び其の南方稜線の敵に向ひ前進させ、午後二時五十分頃第二、第四中隊は萬難を排し、同高日稜線附近に達した時、敵の步兵約二大隊は二中隊ばかりのものを第一線とし、此高地の北側の麓から登り來り、我が前方約五十米の地に達したので、兩中隊は猛烈に之を射擊し、多大の損害を與へたのではあるが、敵は後方から絕えず增加して來て、猛然として前進を起し、遂に同高地頂界線の後方に據り、僅かに一つの稜線を隔てて對峙するといふ有樣是に於て兩中隊は極力之れを擊攘せんと努めたけれども敵は依然として死守するのみならず又々增援を得たので、火力は益々熾となり、而かも有力なる砲兵の援助を恃

んで動ともすれば、一躍其の唯一つの稜線を超えて我を衝かんとする勢ひが見える。而かも第一大隊の損害は非常に夥しく陣地の維持も刻一刻危殆に陷つて來たのである。

四　死する覺悟

『吾れ曩さに鴨綠江の戰に多くの部下を失ひ、今又諸子を殺すに忍びざれど勝敗の數は唯此高地を占領すると否とに在り、全軍の作戰を容易ならしめんがためには予は喜んで此難局に當らんとす、諸子請ふ生還を期する勿れ。』

これは仁平中佐が十月十二日早朝より楊城塞東方高地攻略の爲め前進を起すに際し部下大隊に下したる悲壯なる訣別の辭である。中佐は既に死處を此高地と定めたのであらう、而して十三日の日沒頃此高地は非常なる激戰の後、而かも十二日の拂曉から十三日の日沒迄三十八時間不眠不休で奮戰苦鬪の結果辛うじて得た高い犧牲の山である、そして此高地は楊城塞東方高地なる名を捨てゝ仁平山なる新しい床しい名が附け

られた。

中佐の率ゆる第一大隊正面の敵は、優勢なる歩兵の上に有力なる砲兵の擁護に托して、今や我第一大隊を衝かんずる勢ひを示して居る。而かも大隊の生殘者は見る〳〵うちに疎散になつて、勇敢なる隊長の叱咤激勵を中心として各々位置を確保し最後の一人となるまでは一旦占領した高地は敵に渡さじと、人業外れた大勇を發揮して居る。

聯隊長谷山大佐は、第一大隊の同高地に於て苦戰して居る情況を見、又第二大隊の全力を擧げて此戰鬪を援助するけれども敵兵は益々増加するばかりで、形勢甚だ穩やかでないことを知つて、楊城塞東南鞍部附近に到着して居る第三大隊を以て第一大隊方面に前進し午後三時三十分第二大隊の線に到着したので、第二大隊を仁平大隊の右翼より、第三大隊の半部を其の左翼より進めて、標高一八二高地の敵を擊攘させ、此時第一大隊は未だ此の高地の頂上を占領するに至らず、其の前面及び楊城塞東方高地から敵の猛射を蒙り前進することが出來ない、加之曩さに標高一八二高地の東南

稜線に現はれた敵の歩兵約一小隊は、漸次増加して一中隊となり、今や三十米の近距離に迫り來り、第二、第四中隊を側射するので我軍の損害はいやが上にも多く、爲めに第一、第三中隊は先づ此敵から先きに攻擊しなければならぬ狀況であつた。又第二大隊は三時三十分頃猛烈なる敵の火中を冒進して四時頃第五、第七中隊を以て第一大隊の右翼に連繫し、共に力を協はして一八二高地及び其の附近の敵を攻擊し、第六第八中隊は南蛤碼塘南方鞍部の敵の砲兵やら其邊の敵の歩兵やらに向ひ射擊を集中し、敵も亦之に應じて防戰甚だ力むるといふ有樣、我が死傷は思ひの外に多く、戰死將校五、下士卒七十七、負傷將校八、下士卒二百四十五を算し、第二大隊の將校は殆んど全滅し下士が指揮して居るといふ中隊もあつた。

午後四時以後となると、敵の全線概して動搖の色を現はし、南蛤碼塘に在つた敵の砲兵は四時三十分頃最早や過半戰鬪力を失ひ、歩兵第十六聯隊第二大隊前面の敵も亦頗る動搖したけれども、獨り楊城塞東方標高一八二高地と同村東北高地とばかりは、尙依然として敵兵は陸續増加して抵抗頑强を極め、第一大隊の左翼半部に向つて逆

襲すること最後四回に及び、第一大隊は其の都度これを撃退したけれども尙ほ前方十數米の稜線後に停止して氣勢を恢復し、更に大擧して逆襲しようとするの情況が見える、又楊城塞東北高地の東側の麓に敵の大集團が現出し、一八二高地に向つて前進するのであつた。其處へ午後四時四十分頃歩兵第二十九聯隊の主力が前進して來て戰局進展に努力したけれども、日沒に至るまで成功を見るに至らず、我が第二師團の全線は近距離に於て敵と射擊を交換し、殊に左翼方面に於ては彼我僅かに一稜線を隔てゝ激戰を交へて居るといふ有樣だつた。

是より先き約百名ばかりとなれる第一大隊は、午後三時過ぎ一大悲劇を演出した、其れは鬼神の如く嚴父の如き隊長仁平中佐を亡つたことである。

五　一陣の嵐

標高一八二高地の一角に取りついて、三十八時間の長い間食ひもせず休みもせずに、激戰を交へた仁平大隊は、敵の直射と側射とに遇ふて損害山の如く多く、午後三

時頃には約百名ばかりを餘して居つた。此時迄士卒の核心となり部下を鼓舞激勵して居た仁平中佐は、數ヶ所の創傷に遂に起つことが出來なくなつた。殘念ではあるが死んで行かねばならぬものは詮方がない、のるかそるか此沙河會戰に於ける我軍の先途を見屆けることなしに、彼我の爭奮點となつた此高地で、死なねばならぬ中佐の胸中はさぞ無念だつたであらう。

けれど中佐は出發のときから、部下大隊の全滅を覺悟して居た、悲壯なる袂別を宣して置いて、今我事を終るに當り、一片爽快なる感情の動いたことも亦察することが出來る、曩きに鴨綠江の戰に於て多くの部下を殺したことは、中佐の胸に既に終生の痛みを刻んで居た、今度は自分も共に全軍の犧牲となつて可愛い部下を殺さう、情に於ては如何にも忍びぬ所ではあるが、自分と自分の部下との全滅が全軍勝利の一助となるなら實に武門の榮譽ではないか、致命傷を蒙つたる中佐は死所を得たことを陛下に謝し家鄕に謝した、一方に榮譽の樂音を耳にし一方には四邊の修羅矢叫びを耳にした。

『どうしても此高地を敵に渡してはならぬぞッ。』
これは中佐が最後まで絶えず繰返した悲壯なる叫びであつた。
『やれ〳〵ッ、思ひ殘しのないやうに確乎やれッ。』
士卒を鼓舞激勵する聲は勇ましかつた。中佐の傷が輕くないといふことを知つた部下は、己れの危險も傷手も打ち忘れて走り寄つた。見れば、傷ましや大隊長は長時間の奮戰に數箇所の負傷を爲し、鮮血は四邊を染め、顏色既に蒼白に變じ、瞳にかゝる死の白い靄を右手で拂ひ除けやうとしては、其都度怒れる眼を開いて、
『なに此地を敵に渡すものか。』と呶號した。
もはや隊長の一命は助からぬ、隊長は帝國軍人として爲し得る總てを成して居る、此上隊長に望む事があるといふなら、それは其の英魂が永く我軍の陣頭に留まつて敵を惱まし我れに勝利を與へんことのみである。此一八二の高地は敵の爲めには最も大切なる據點從つて我軍は之を拔くに非らざれば到底戰局の進捗を望むことは出來ぬ狀況であるから、仁平中佐たるもの、既に斯の通り悲壯なる決別を豫め遺して置いたの

である。
勇敢なる仁平大隊長が山頂に殪れ、到底恢復の見込はないとの報らせは機を失せず聯隊長、旅團長、師團長の耳に達し間もなく軍司令官黑木大將の耳に達した。開戰以來勇名を馳せたる仁平中佐の戰死を聞くや黑木司令官は兩眼に涙を浮べ、取り敢へず電話を以て、仁平中佐及び其の率ゐし步兵第一大隊に對し感狀を傳へられ、岡崎旅團長は現場に於て之れを讀み上げ、全軍の作戰を容易ならしめし中佐の殊勳を賞へられた。
此時は中佐は全く人事不省に陷つて居た、が、軍司令官より感狀を賜はつた其の聲を耳にしたとき、彼は徐かに兩眼を開き、微かに脣を動かしたが、これぞ軍人の死の旅に出發するに當り何よりも結構なる土產物であつた、其の微かな笑み、其れは云はずと知れた感謝の意の表示だつたのである。
楊城塞一帶に吹き荒む陣風は尙ほ勢が强かつた。晩秋の野邊には傷者の呻吟する聲が彼處にも此處にも聞えて、悲慘酸鼻の極みであつた。嘯て靜かに且永久に眠れる

中佐の頭上には花の如く名譽が飾られた、後ち功三級に叙し金鵄勳章を賜はり、中佐に進級せしむるの恩命があつた。

過ぎにし遼陽首山堡に於ける軍神橘中佐の奮戰と、今沙河會戰に於ける楊城塞東方高地の軍神仁平中佐の奮戰とは、日時こそ異れ、彼も中佐此も中佐同じく大隊長として屍を馬革に裹み、勇名を東西に馳せ後の武夫をして泣かしむるもの洵に好個の對照でなければならぬ。

六　疵を包みて

仁平大隊長が胸部に貫通銃創を受けて人事不省に陷つた午後三時頃は、楊城塞を中心とする此附近一帶の彼我兩軍は激戰の絕頂に達して居た。前日來の激戰に大隊の兵力も餘程減少して居たが、今や全大隊の健全者は百の上を幾らも越えては居なかつた。此惡戰苦鬪の中心に起つて克く部下の志氣を繫いだ大隊長の戰死は、少なからぬ打擊であつたけれど、戰線に於ける忠勇なる部下はそれが爲め、動搖を起すといふやうな事はなく、遂に負傷者も其痛みを押し包んで散兵線に入り、どうしてもかうしても此難境を切り拔けねばならぬ狀況なので、彈丸の二發や三發位受けたからとて、それで繃帶所や野戰病院へ馳せ付けるやうなことはしなかつた。

此日軍司令官黑木大將は西三家子といふ所に居て、親しく此難戰苦鬪の實景を目擊されたのであるが、僅か百名許りの生殘りの我兵が、實に泰然自若として奮戰しつゝある所を見ては、如何に何事にも驚かぬ名將の黑木大將も、この一場の悲劇には必ずや感激と同情との血涙を絞られたことであらう。

殊に第四中隊の如きは中隊長も小隊長も特務曹長も曹長も全部死傷し、軍曹高頭七五三が、負傷を包み　中隊の指揮を執つて居た、軍曹も一時昏倒して居たのであるが賴みに思ふ幹部はなくなり加之に大隊長仁平中佐は戰死されたと聞いて、俄かに這ひ出し、死物狂ひになつて戰線に馳せ付けた。彼も亦鮮血淋漓、起たんとすれば轉び、歩まんとすれば足動かず、而かも此間尙ほ君國の爲めに奮鬪せんとして居る、壯烈の狀眞に想像するだに餘りがあるではないか。

既に隊長を失ひ少なからぬ打擊を受けたことを、敵も亦見たものか、此機乘ずべしと爲し四度びも猛烈な逆襲をかけて來た、我は惡戰苦鬪辛うじてこれを拒支せんとはしたが、最早其れが擊退さへ頗る覺束ない有樣となつた。五十名足らずの中隊を指揮して居る高頭軍曹は奮戰數時間の長さに亘り、死は素より望む所と有らん限りの力を出して幾度か敵を擊退し得たのであるが、敵は尙ほ懲りずまに衆を恃んで逆襲し來り遂に數米の目前迄肉薄して來た。

然るに我が地形前は崎嶇として岩石嵯峨、其れが爲めに敵を攻擊すること意の如くならない。恰も午後五時頃第三中隊がやつて來て此方面に增援したので、玆に戰況は急に活氣を呈し來り、午後五時三十分頃遂ひに標高一八二高地は我軍の有に歸した。

吾人は此激戰に於て我が將卒が負傷を包み、散兵線に馳せ入つて最後に至るまで勇戰したことを見て、坐ろに今日の人心の變化を想はずには居られない。抑々吾人の少年時代頃迄は手や足に微少な怪我位したからとて、やれ醫者に行けやれ消毒して繃帶するのといつた事はなかつた。眞の衛生からいふなら針の先でついた疵でも速かに手

當をしたがよいであらう。が、いつもさういふ事をしなければならぬものとするなら、戰場に出でゝ輕微の負傷をしても、速に繃帶所へ行つたり、戰線から後退しなければならぬといふ事になる、況してや血氣壯なる壯年時代にチツとやツとの負傷位にて顏色を變へたり生命の事を考へたりするのは實に困つたことだと思ふ、壯年時代に出血が少し位あつたからとて、其れで一命に關係するものとは思へぬ、殊に其時代には疵の治癒も速やかな時で、少々な事は醫者の御厄介になるべきものでないと考へて居る。のみならず、今より十五六年前迄は吾人は日射病等の名は野外要務令中に僅かに二三字を見たばかりであつたが、今日の軍隊はどうであらうか、少し暑い日に五六里の行軍をすると直ちに眞物の喝病者を見るに至つた、十數年前迄皆無であつた喝病が今日では殆んど普通の病の如く續發するのは抑々日本の風土が變つて來たのであらうか、但しは軍人否國民の體力が減退したのであらうか。

我帝國は將來日露戰爭の如く、唯一國を敵として戰ふ場合は殆んどなく、必ずや數箇國を敵手に勝敗を爭はねばならぬ場合がある、而して敵の兵力は常に我よりも優勢

である。此間に處して寡少なる兵力を以て優勢なる敵軍を破るに就いては、戰術上の妙訣によつて決勝點に優勢の兵力を向けるといふ事が第一ではあるが、敵も亦これを行はんことに努力する以上は必ずしも常に敵に優勢を占むるとは思はれぬ、是に於てか一將一兵が必ず敵の千人に當らん丈けの覺悟を必要とするのである、敵の千に當らんと思へば、どうしても爲し得る限り最後迄生き殘るといふことが必要で、換言すれば無益の死傷をせざることゝ、少々の怪我には、めげぬ丈けの元氣を要する、その元氣は平素から修養して置かなければいざといふ場合に至つて役に立たぬ。平時に於ては些細の出血にも喫驚してやれ繃帶だのやれ醫者だのといふやうでは、戰場に於て其れを思ひ切つて此楊城塞の如き奮戰は思ひも寄らぬ。

七　仁平山は永久に

日露戰役に於て、殊勳偉功を樹てた人は素より數知れぬ程あるが、併し其の占領したる地點に其の名を冠せられたといふのは、先づ旅順に於ては一戸砲臺、――現陸軍

大將一戸兵衞閣下の占領せられた高地であつて、當時第九師團の擔當して居た方面では、この砲臺の占領と否とに依つて目的を達すると否とに關して居た、其際旅團長だつた一戸小將は決死隊を率ゐて之れを占領し且つ確保せられた。遼陽戰に於ける岡崎山、――岡崎少將の勇戰に依つて占領せる高地にして、敵はこの高地を堅固に防禦し絶えず新手を入れかへて頑固に守備した、それを岡崎旅團長が攻略されたのである、而して沙河會戰に於ける仁平山等僅かに指を屈するに過ぎない。而かも此内の岡崎山の名を得たる岡崎少將の部下には同じく仁平中佐が居た、而かして楊城塞東方高地に仁平山の名が付いたのは、中佐が死して餘榮あることは申す迄もない。中佐が戰死されたのは午後三時十分頃であつたが、愈々第一大隊を中心として此高地を堅實に占領したのは午後五時半頃であつた。卽ち中佐の戰死はもう少しで占領する所まで漕ぎ着けて居たといふてよい。

中佐と鄕里を同うし期を同うした柴勝三郎中將は、次の通り物語つて居る。

『彼は個人としては友情に厚く、義理堅く、珍らしい人物であつた。又武人としては

常に勤儉の美德を守り、無私無慾にして能く部下を愛し、如何なる危險の際にも從容として事に處するの用意があつた。武骨一遍の人かと言へば、能く世態人情にも通じ常識圓滿で、一言にして評すれば、人として最とも缺點の少い人物であつた。

彼があれ丈けの偉勳を奏するに至つたのは、持つて生れた幸運の爲めではない。高潔至誠にして平生部下を愛することが深かつた爲めに、部下一同は喜んで彼と共に死に赴いたのである。卽ち仁平大隊は彼を中心として一致協力し、水火と雖も破ることの出來ぬ一團となり、敵火を冒し、死屍を踏んで常に奮鬪したのであつた。要するに美はしい彼の人格の力が茲に至らしめたものと思ふ。予は世の人が仁平大隊の拔群の戰功を想ふ毎に、深く此美點に學ぶ所あらんことを希ふのである。』——

乃木將軍は青年士官を戒むるに『涙を以て部下に臨めよ』といはれた、卽ち勅諭に仰せある。

『公務の爲めに威嚴を主とする時は格別なれど、其外は努めて懇ろに取扱ひ慈愛を專一と心掛け……』と、懇ろに取扱ひ慈愛を專一と心掛くるは卽ち公務の爲めに威嚴

を主とするときの爲めなり、人に長たる者は戰場に於ては苛酷の事、不可能と思はるゝ事をも部下に要求しなければならぬ場合がある、これ部下の身にとりては水火の中である。而して部下をして水火尙ほ辭せず悅んで犧牲たらむとするに至るは實に人に長たる者の平生に於ける兵力の愛惜があるからである。涙もて部下に臨めといつた乃木將軍の戒めも卽ち此邊の消息を證するもので、涙の意味を含んだ要求なら、部下たるものこれを感じまいとしても感ぜずには居られないのである。

士卒と艱苦を俱にし喜びを分つ丈けの用意さへあるなら、士卒は彼に一命を捧げることを惜しむものではない。これを遠き昔の名將に求むる迄もなく、既に本書に揭げたる橘中佐の平生の如き、廣瀨中佐の平生の如き、其の偉大なる人格の力は部下をして笑ふて死地につかしたではないか。部下をして『此の人の爲めなら死んでも憾みはない』と眞に思ひ込ましむる丈けの人格の光がないならば、徒らに公務を楯に取つて峻嚴なる命令號令を以て部下を水火に投ぜんとしても、其れは到底成功を意味するものではない、橘中佐といひ廣瀨中佐といひ、仁平中佐といひ、死しても餘榮ある武

名を謳はるゝ程の人は、何れも期せずして平生の修養言行が同一轍に合して居る、部下に臨むに權謀術數は要らぬ、要する所は涙と熱誠とあるのみ。

命を棄てて（をはり）

大正十三年九月十日印刷
大正十三年九月廿日發行

【正價金貳圓五拾錢】

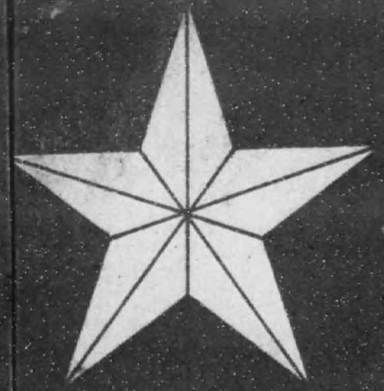
著作者　原田政右衛門
發行者　東京市麹町區飯田町六丁目廿一番地　田原嗚
印刷者　東京市神田區今川小路二丁目十四番地　高倉嘉夫

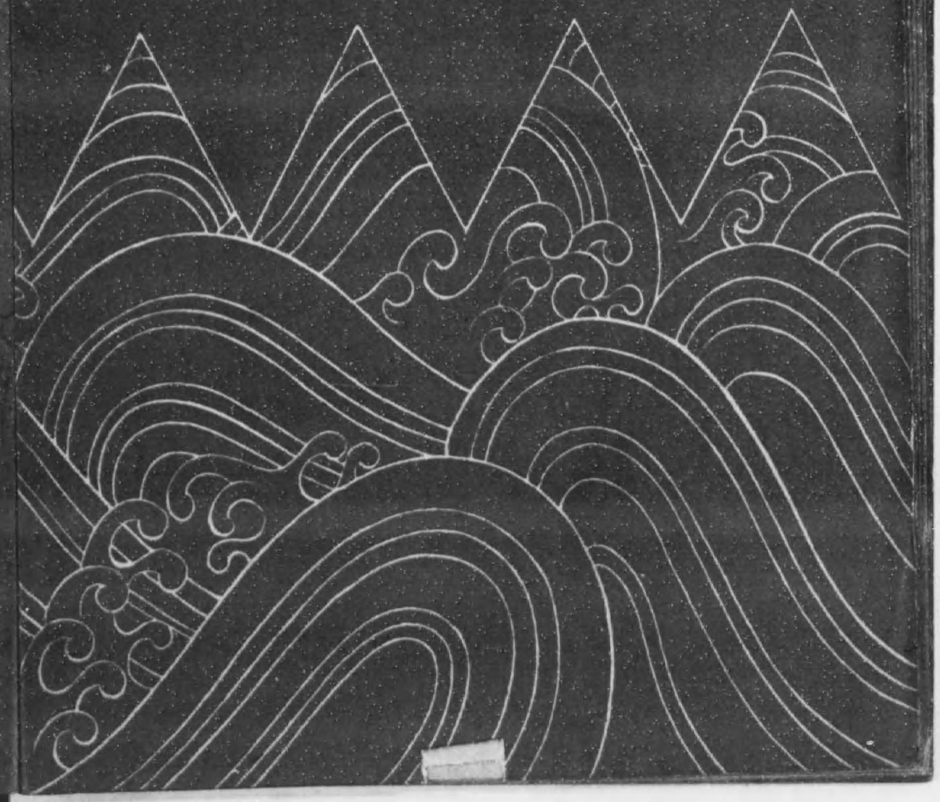
◇印刷所　忠誠堂印刷所◇

發行所　東京市麹町區飯田町六の廿一　電話四谷六一四一番　振替東京四六三九三番　文武書院

命を棄てて

□不許復製□





526
222

落